

田原本町文化財 調査年報 20

2010年度



田原本町教育委員会

田原本町文化財 調査年報 2010年度 20



田原本町教育委員会

例　　言

1. 本書は、田原本町教育委員会が2010年度（平成22年度）に実施した文化財事業の概要をまとめたものである。
2. 埋蔵文化財の発掘調査については、土地所有者・施工業者ならびに近隣の皆様にご協力とご理解を賜った。記して感謝します。
3. 本書の執筆は、I. 1を奥谷知日朗、I. 2を奥谷・清水琢哉の各調査担当者、IIを清水・西岡成晃・藤田三郎、IIIを西岡・米田いづみ、IVを清水・藤田・丸山真史（奈良文化財研究所客員研究員）が執筆し、IV. 1・2の遺物実測図は、江浦至希子・清水が実測し、江浦・西岡がトレースをおこなった。本書は、西岡の協力を得て藤田が編集した。

目 次

I. 田原本町の埋蔵文化財	
1. 町内における開発	
(1) 町内における開発と発掘調査	1
2. 埋蔵文化財の調査	
(1) 発掘調査の概要	2
1. 小阪細長遺跡 第2次調査	4
2. 多遺跡 第23次調査	11
3. 多遺跡 第24次調査	14
4. 多新堂遺跡 第5次調査	24
5. 笹鉢山古墳群 第9次調査	30
6. 保津・宮古遺跡 第38次調査	34
7. 保津環濠遺跡 第2次調査	41
(2) 工事立会の概要	45
II. 資料の整理と活用・普及	
1. 文化財資料の整理・保管	
(1) 埋蔵文化財の整理・保管	51
(2) 図面・写真的保管と資料撮影、写真的デジタル化	53
(3) 図書の受領	54
(4) 資料の寄贈	54
2. 遺跡・文化財の保護	
(1) 史跡の追加指定	56
(2) 町指定文化財	57
3. 講座	61
4. 学校教育等への支援	
(1) 小学校出前授業	63
(2) 中学校職場体験学習	64
(3) 大学の学外授業	64
(4) 講師の派遣	65
5. 刊行物一覧	65
6. 資料の活用	
(1) 資料の貸出	66
(2) 写真掲載・撮影	68
(3) 資料調査	71

7. ボランティア組織	
(1) ボランティア組織の概要	71
III. 唐古・鍵考古学ミュージアム	
1. 企画展・ミニ展示	
(1) 秋季企画展「道の考古学」	75
(2) ミニ展示	
ア. 春季ミニ展示	78
イ. 夏季ミニ展示	78
(3) 特別展示「田原本町内小学校の総合的な学習展示会」	79
2. 入館者・ホームページ	
(1) 入館者数	80
(2) 入館者アンケート	82
(3) 観察・研修・学校等からの来館	82
(4) ホームページ	83
3. ボランティアガイド	
(1) ボランティアガイドの実績	84
IV. 資料の報告	
1. 多遺跡第22次発掘調査 遺物整理事業（清水琢哉）	87
2. 唐古・鍵遺跡出土の分銅形土製品（藤田三郎）	105
3. 唐古・鍵遺跡第37次調査出土の魚類遺存体について（藤田三郎・丸山真史）	111
4. 田原本町における古道関連の遺構について（清水琢哉）	119



I. 田原本町の埋蔵文化財

1. 町内における開発

(1) 町内における開発と発掘調査

本町における2010年度（平成22年度）の民間開発行為等による埋蔵文化財発掘届（第93条）は54件、地方公共団体等による通知（第94条）は18件で、計72件を数える。ここ数年の発掘届件数は横ばいである。

今年度の発掘調査は7件、県立橿原考古学研究所が1件の計8件である。本町実施分の内訳は個人住宅等の建築3件、公共事業3件、民間開発1件である。

第1表 田原本町における2010年度の発掘届・通知件数一覧

発掘届 93条	発掘通知 94条		発掘調査	工事立会	慎重工事	先行工事
54 (うち取下1)	18	通知内容	8	40	21	2
		実施分	町7 県1	46	-	-

第2表 田原本町の発掘届・通知と発掘調査件数の推移

	'03	'04	'05	'06	'07	'08	'09	'10
発掘届(93条)	44	45	43	43	53	57	49	54
発掘通知(94条)	13	18	8	17	18	11	18	18
計	57	63	51	60	71	68	67	72
発掘件数	町	18	18	14	12	18	11	13
	県	1	0	0	4	2	1	1
町内総調査件数	19	18	14	16	20	12	14	8

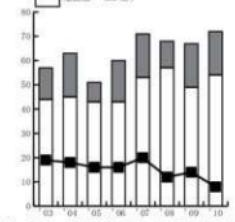
第3表 町教育委員会が実施した発掘調査の原因別推移

	'03	'04	'05	'06	'07	'08	'09	'10
範囲確認	3	3	1	0	0	0	0	0
個人住宅	7	8	5	4	5	6	4	2
公共事業	5	4	5	6	6	3	4	3
民間開発	分譲	1	0	1	2	4	2	1
	その他	2	3	2	0	3	0	3
計	18	18	14	12	18	11	13	7

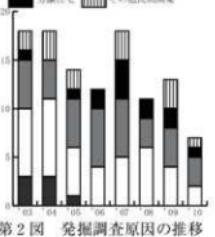
第4表 町教育委員会による調査の面積及び出土遺物数の推移

	'03	'04	'05	'06	'07	'08	'09	'10
総調査面積(m ²)	1,262	1,235	1,030	986	1,400	341	1,117	457
出土遺物数(箱)	532	314	104	95	146	103	118	74

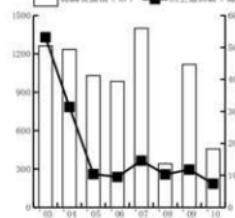
発掘届(94条) ■町内総調査件数
発掘届(93条)



■範囲確認
□個人住宅
■公共事業
△その他民間開発



□調査面積(m²) ■出土遺物数(箱)

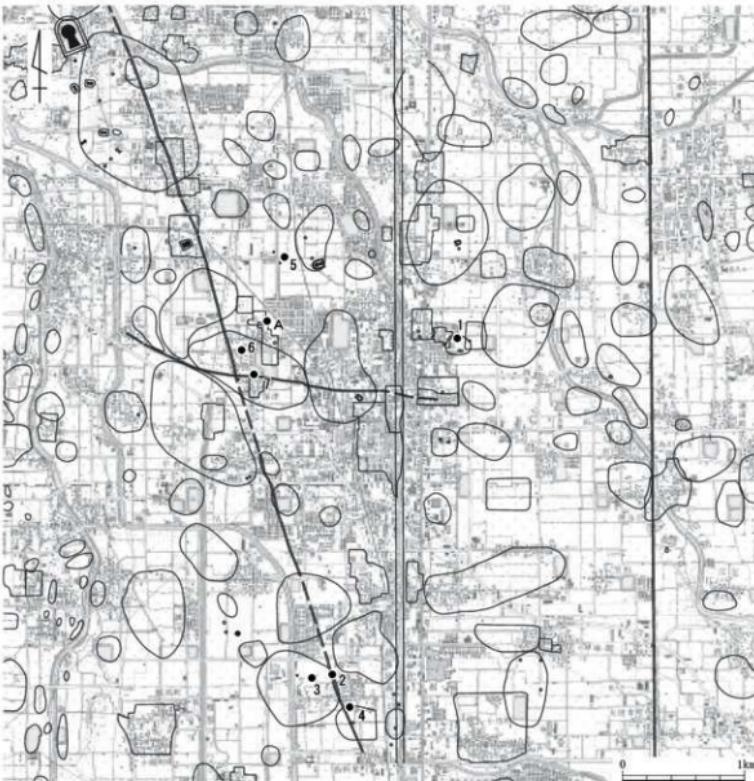


2. 埋蔵文化財の調査

(1) 発掘調査の概要

本年度は7件の本調査をおこなった。弥生時代から古墳時代では、小阪細長遺跡、多遺跡等で遺構を検出した。小阪細長遺跡では弥生時代後期から古墳時代初頭の溝などを検出し、当時期の集落の一端を明らかにした。また、調査区南端において古墳時代後期の円墳1基を確認した（小阪細長5号墳）。多遺跡第24次調査は小規模な調査区であったが、弥生時代後期を中心に集落遺構を多数検出した。

町南端にあたる多新堂遺跡の調査では、古代道路の筋違道（太子道）関連の遺構と、中世集落の環濠とみられる遺構を確認した。当遺跡では昨年度から継続的に調査を実施しているが、これらの成果から筋違道の位置や規模等が明らかになるとともに、室町期の集落が拡がることを確認した。



第4図 田原本町の遺跡と調査地点 ($S = 1/40,000$)

町中央にあたる宮古集落内で実施した保津・宮古遺跡の調査では、鎌倉期の大溝から瓦器塊や土師器小皿などが多量に出土した。この大溝はやや斜行しており、宮古集落西側を北北西～南南東に走る筋違道の影響を受けていたと考えられる。また、多遺跡の調査においても中世の溝を確認している。

近世以降では、保津・宮古遺跡の調査で大溝を検出した。保津環濠遺跡では幕末～明治期の石垣など集落を囲む環濠の調査をおこなった。

第5表 他機関による町内遺跡調査一覧表

遺跡名	調査次数	調査地	原因	調査面積	調査機関
A 常楽寺推定地	第7次	田原本町宮古地内	大和紀伊平野 農業水利事業	57 m ²	奈良県立國原考古学研究所

第6表 2010年度 発掘調査一覧表

遺跡名	次數	調査地		原因者	原因	期間	面積	担当	備考		
		検出遺構					出土遺物				
1 小阪組長	第2次	田原本町大字小阪字細長 322-1他 御生時代：土坑6基、大廈1条、廻1条、柱穴群 古墳時代：円墳1基、溝1条、落ち込み2 中世：斎場小溝群				2010.12. 6 ～12.28	210 m ²	清水・奥谷・ 大谷	受託		
								御生土器、土師器、須恵器、埴輪、 瓦、木製品等	18 箱		
2 多	第2次	田原本町大字多小字福尻 455 中世：小溝1条、落ち込み1		個人	農業用倉庫の建築	2011. 1.17	5 m ²	清水・大谷	国庫補助		
								土師器、須恵器、瓦器等	1 箱		
3 多	第24次	田原本町大字多小字森ソニ 540-1 東側水路地				2011. 2. 14 ～ 2.25	31 m ²	奥谷・大谷	建設課		
		御生時代：土坑2基、溝4条、柱穴3基 中世：溝3条 近世：斎場小溝群						御生土器、土師器、須恵器、瓦器、 瓦質土器、石器等	20 箱		
4 多新堂	第5次	田原本町大字多小字ワノ田 306地 南側水路地				2010. 11. 15 ～ 12.10	118 m ²	奥谷・大谷	建設課		
		御生時代～古墳時代：土坑1基、廻1条、河跡1条 中世：溝（溝底）1条、河跡1条 近世：土坑（野戸井1基を含む）3基、斎場小溝群						土師器、須恵器、瓦質土器、 近世陶磁器、木製品等	1 箱		
5 雲神山 古墳群	第9次	田原本町大字八尾小字大畠 235-3 近世後期？～古代？：土坑1基、河跡1条 中世：斎場小溝群 近世：斎場小溝群				2010. 4. 7 ～ 4.13	48 m ²	奥谷	国庫補助		
								御生土器、土師器、須恵器、 瓦質土器、近世陶磁器等	1 箱		
6 保津・宮古	第38次	田原本町大字宮古小字カイタ 120, 121				2010. 6. 21 ～ 7. 1	34 m ²	清水・大谷	国庫補助		
		鎌倉時代：大廈1条、溝1条 室町時代：小溝群 江戸時代：土坑2基、大溝1条、溝1条						土師器、須恵器、瓦器、輸入磁器、 近世陶磁器、瓦、木製品等	24 箱		
7 保津櫛塗	第2次	田原本町大字保津小字村脇り 132地 北側水路				2011. 1. 18 ～ 1.20	11 m ²	清水・大谷	建設課		
		近世～近代：大溝1条						土師器、近世陶磁器、瓦等	6 箱		

1. 小阪細長遺跡 第2次調査

1. 遺跡・既調査の概要

小阪細長遺跡は、奈良盆地の中央、標高49m前後の沖積地に立地する。大字小阪付近の西には、中・近世の居館跡を中心とした小阪里中遺跡が、また東には小阪榎木遺跡があり、両遺跡では弥生時代の遺構及び削平された古墳数基も検出している。小阪里中遺跡では直径20mの円墳（1号墳）から巫女や馬の形象埴輪が出土し、近接する鏡作麻気神社境内にも円墳とみられる盛土が残る。また、小阪榎木遺跡でも小規模な方墳とみられる6世紀の溝を検出している。また、両遺跡の中間地点にあたる小阪細長遺跡でも小阪細長古墳群として2基の古墳が検出されている。のことから、小阪里中遺跡から小阪榎木遺跡にかけての広い範囲に古墳群が分布することが判明していた。

今回の調査は、宅地分譲に伴って実施した。平成18年度に櫻原考古学研究所が調査し方墳2基・方形周溝墓2基を検出した調査区の西端から北西に隣接する。その位置関係から、古墳群の拡がりが確認できると予想された。

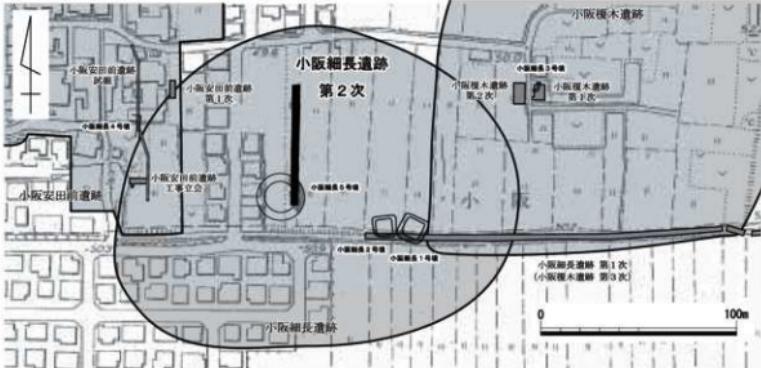
2. 調査の成果

調査地は、当初畠地であったが、深さ0.4~0.5mの造成により青空駐車場に転用された状態となっていた。今回は宅地分譲に伴う調査であり、敷地西側の道路となる予定の部分に南北61m×幅3.5mの調査区を設定して調査を実施した。

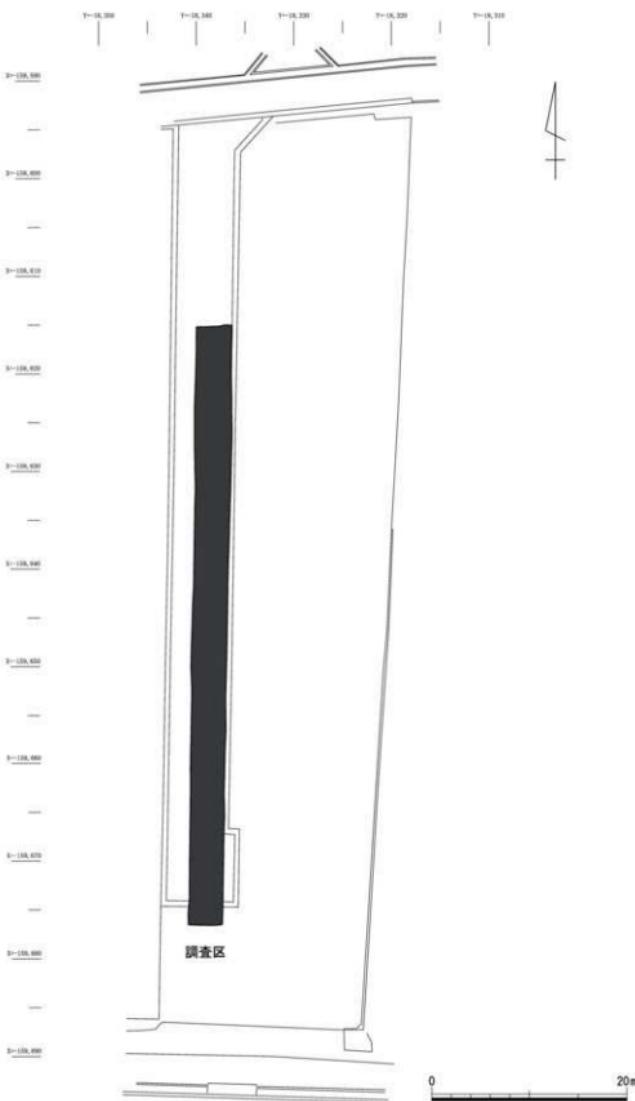
（1）層序

調査区が南北に長いため、調査区南半と北半とでは層序が大きく異なる。ここでは、古墳及び弥生時代後期の集落遺構が多数検出された調査区南半での層序を示す。

第I層：淡褐色砂礫土、第II層：暗褐色土、第III層：暗青褐色土、第IV層：淡灰褐色粘質土、第V層：暗褐色土、第VI層：暗橙褐色粘質土、第VII層：黄褐色シルト、第VIII層：黒色粘土、第IX層：淡灰色粘土（シルト質）。



第5図 調査位置図 (S = 1/2500)



第6図 調査区位置図 (S = 1 /500)

調査では、第IV層までを重機により除去し、第V層上面で中世の遺構を、第VI層上面で古墳時代の遺構を、第VII層上面で弥生時代後期の遺構を検出した。なお、調査区中央から北半にかけて第IV層の下に灰褐色粘質土の堆積が拡がっていた。

(2) 遺構と遺物

弥生時代の遺構

S K-101 調査区南半西で検出した土坑である。南北1.5m、深さ0.35mを測る。堆積土は暗灰褐色粘質土である。弥生時代後期の遺構とみられる。

S K-102 S K-101の北側で検出した土坑である。長軸0.8m、深さ0.25mを測る。弥生時代後期の遺構とみられる。

S K-103 S K-101の北東で検出した円形の土坑である。直径約1.4m、深さ約0.4m。堆積土は上層が暗黄褐色土、下層が暗灰色粘土である。その形状から井戸の可能性がある。弥生時代後期の遺構とみられる。

S K-106 調査区南端西側で検出した土坑である。南北2m、深さ0.45m。堆積土は暗灰褐色粘質土である。下層よりほぼ完形の鉢1点が出土した。弥生時代後期後半の遺構とみられる。

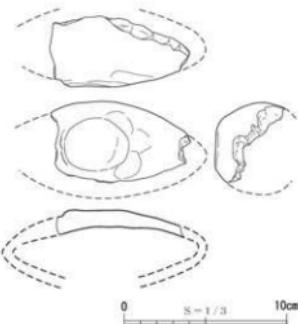
S K-107 調査区中央で検出した南北27m、東西1mの平面楕円形を呈する土坑である。深さ0.3mを測る。堆積土は黒褐色粘質土である。長頸壺と器台が完形で出土した。土器から、弥生時代後期前半の遺構と考えられる。

S K-110 調査区北側西端で検出した土坑である。調査区外に拡がるため全体の規模は明らかでないが、西壁で確認した規模は直径0.8m前後、深さ0.5mで、堆積土は灰色粘質土である。弥生時代後期前半の遺物が出土した。

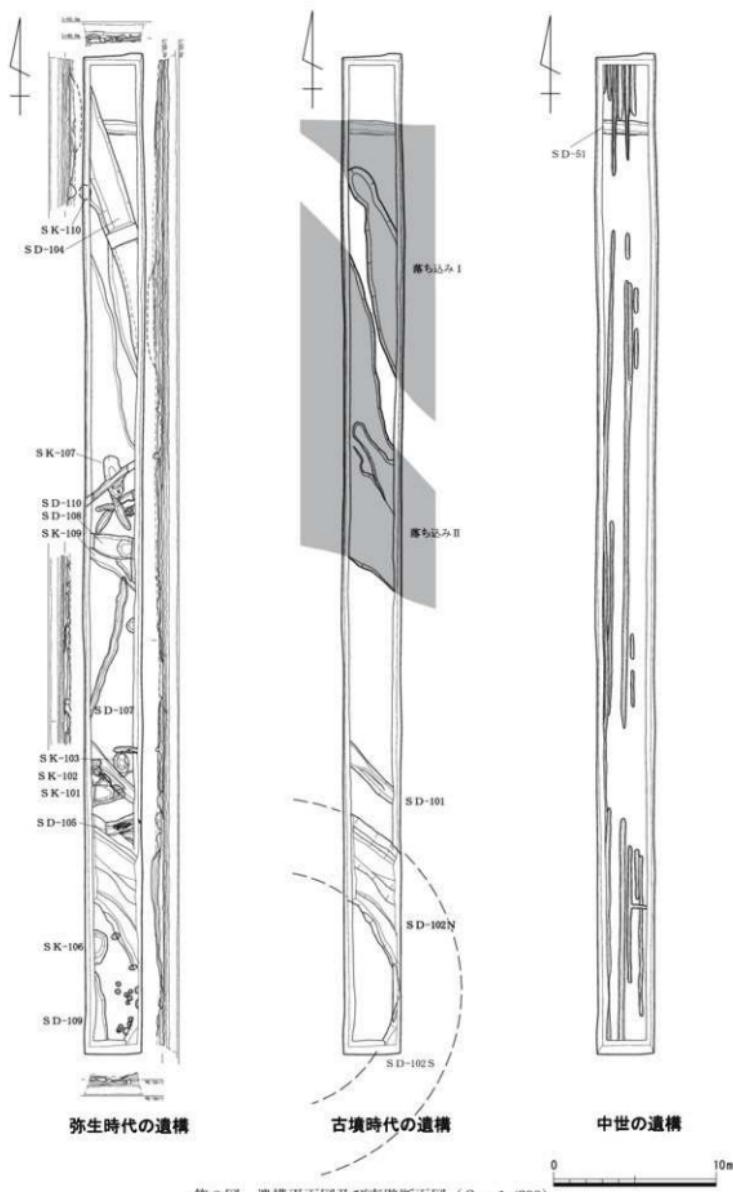
S D-104 調査区北側で検出した、幅2m、深さ0.8mの溝である。上層は暗灰色粘土と褐灰色砂質土、下層は灰色粗砂で埋没する。遺物が少ないため時期は特定し難い。ただし、S K-110を切ることから、弥生時代後期後半頃の遺構となる可能性が考えられる。

S D-105 調査区南側で検出した北東-南西方向の溝である。幅約1m、深さ0.4mを測る。堆積土は黒褐色土で、溝内からはほぼ完形の広口壺や甕・高杯が出土した。弥生時代後期末頃の遺構と考えられる。また、異形土器の破片が出土している。残存するのは底部周辺のみであるが、楕円形を呈する胴部形状から、「鳥形土器」となる可能性が高い（第7図）。

S D-110 調査区中央で検出した、北東-南西方向の溝である。幅0.5m、深さ0.4mを測る。堆積土は暗灰色粘土。遺物が少ないため時期は明らかでないが、S K-107を切ることから弥生時代後期後半頃の遺構とみられる。



第7図 鳥形土器実測図

第8図 遺構平面図及び東壁断面図 ($S = 1/300$)

古墳時代の遺構

小阪細長5号墳 調査区南端で、直径15m前後の円墳周濠を検出した。北東側の周濠S D-102Nは幅4m前後、深さ0.7m前後を測る。上層は鉄分を多く含んだ灰褐色粘質土、中層は暗灰色粘質土、下層は暗灰色粘土が堆積する。南東側の周濠S D-102Sは西肩のみの検出であり、幅等は不明。遺物は上層から朝顔形埴輪片や須恵器片が少量出土した。また、S D-102Nでは中層から板材が出土した。古墳に伴う遺物が少ないとみられる。

古代墳の遺構

S D-101 調査区南半で検出した北西－南東方向の溝である。幅1m、深さ0.3mを測る。堆積土は暗灰色粘土である。調査区南端で検出した古墳（小阪細長5号墳）に方向が規制された遺構とみられ、古墳時代後期以降とみられる。ただし、中世の素掘小溝群には切られる。遺物が少ないため詳細な時期は明らかでない。

落ち込みI・II 調査区中央～北半の幅30mにわたって拡がる落ち込み状の遺構である。中央に畦状の高まりが北北西—南南東方向に延びる。これを境として北側を落ち込みI、南側を落ち込みIIとする。両者とも灰褐色粘質土の堆積層である。堆積の厚さは最深部で0.25mを測る。出土遺物の大半は本来下層遺構に伴っていた弥生時代後期の土器であり、本遺構の詳細な時期は明らかでない。ただし、S D-104埋没後に形成されていることから、古墳時代～古代の遺構となる可能性がある。

中世の遺構

S D-51 調査地北側で検出した東西方向の溝である。幅1m、深さ0.1m。堆積土は灰褐色粘質土。遺物が僅少であり時期は明らかでない。

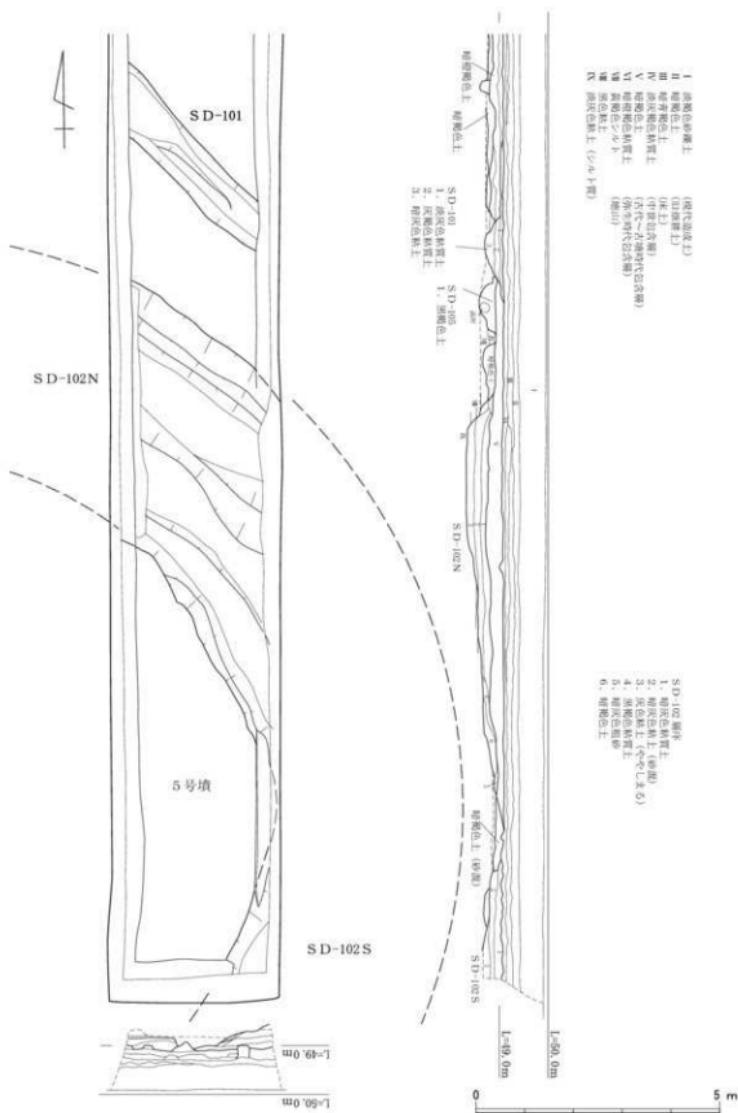
素掘小溝群 調査区全体で検出した南北方向の溝である。幅0.4m、深さ0.1～0.2m。堆積土は灰色土・淡灰色粘質土などである。中世の遺構とみられる。

3.まとめ

今回の調査では、弥生時代後期の集落遺構と円墳1基を検出することができた。

今回の調査で検出した弥生時代後期の集落遺構は、土坑6基と溝2条・ピット群などで、調査地南半に分布していた。地形的には調査地北側に向かって低くなるため、S D-104を境界として微高地となる南西側が集落域となっていた可能性が考えられる。S D-104は一定の水量をもつ水路的な遺構とみられ、耕地に伴う水路としての位置づけが可能となるかもしれない。S D-104の北東側は、周溝墓の展開する墓域、あるいは水田の拡がる耕地となっていたのであろう。いずれにしても、西側50mの小阪安田前遺跡における試掘・立会調査の成果から、弥生集落が展開する微高地の拡がりはそれほど大きなものとはならないとみられ、唐古・鍵遺跡に近接して営まれた小規模集落として位置づけることができそうである。

古墳時代後期の円墳は、小阪細長古墳群としては5号墳となる。小阪里中遺跡及び小阪榎木遺跡でも一連とみられる古墳群を検出しており、小阪里中遺跡の4基、小阪榎木遺跡の1基をあわせると、小阪地域では計10基の古墳が確認されていることになる。小阪里中古墳群では、1号墳が円墳であるほかは1辺10m前後の方墳が主体とみられ、同時期の羽子田古墳群と構成が類似する。盆地

第9図 小阪郷長5号墳遺構平面図及び東壁断面図 ($S = 1/100$)

低地部の群集墳の構成として、盟主的な円墳とそれを取りまく方墳群というのが一つの基本構造になっていたのであろう。なお、小阪地域の古墳群についてはその分布範囲及び築造主体となった集団の解明が今後の課題となるであろう。



1. 弥生時代遺構調査状況（北から）



2. 古墳時代遺構調査状況（南から）



3. 弥生時代の遺構（南西から）



4. S K-106遺物出土状況（東から）



5. SD-105遺物出土状況（北から）



6. SD-105出土土器

2. 多遺跡 第23次調査

1. 遺跡・既調査の概要

多遺跡は、奈良盆地の中央、標高52m前後の沖積地に立地する。遺跡中央には式内大社多坐弥志理都比古神社が鎮座し、遺跡東端を古代の道路「筋違道」が縱断する。これまでの調査から、弥生時代前期から後期に至る拠点的大集落であったことが判明している。

今回の調査は、多遺跡の東端、筋違道の西側隣接地で実施した。平成21年度に実施した東側隣接地での筋違道第2次調査では筋違道側溝を検出していないが、平成21~22年度に実施した多新堂遺跡第3~5次調査の成果から、筋違道西側側溝の想定ラインは現多集落の西側環濠と重なる可能性が考えられた。また、弥生時代の多集落の環濠帯が第19・22次調査で確認されているが、想定される環濠帯のラインは本調査地まで及ばない可能性が考えられた。

2. 調査の成果

調査地の現状は宅地である。以前は水田であったとみられるが、古い倉庫が建てられていた。今回の調査では、農業用倉庫建築予定範囲内の北東部分で東西45m×幅1mの調査区を設定した。

(1) 層序

第Ⅰ層：淡褐色粘質土、第Ⅱ層：淡青灰色粘土、第Ⅲ層：淡灰色粘土（茶斑）、第Ⅳ層：淡灰色粘土、第Ⅴ層：灰褐色土、第Ⅵ層：黒褐色土、第Ⅶ層：黄褐色土（シルト質）。

調査では、第V層上面まで重機により掘削し、遺構の検出をおこなった。

(2) 遺構と遺物

S D-51　　調査区中央で検出した北北西~南南東方向の小溝である。幅0.3m、深さ0.1m。堆積土は灰褐色粘質土である。筋違道の主軸に沿っており、筋違道に規制された土地利用の中で掘削された溝であることがわかる。遺物から、鎌倉時代前後の遺構とみられる。

S X-51　　S D-51の西側に隣接して検出した落ち込み状の遺構である。深さ0.05m、東肩のみの検出であるため平面的な規模は明らかでない。堆積土は灰褐色土である。東肩はS D-51同様に筋違道と同じ軸線となっていた。遺物から、鎌倉時代前後の遺構とみられる。S X-51が水田、S D-51がこれに伴う水路である可能性がある。

3.まとめ

今回の調査では、鎌倉時代の遺構を確認した。主軸が筋違道と一致していたものの、遺構の規模から筋違道側溝のような性格の遺構ではない。今回検出した遺構が想定通り水田及び水路であるならば、筋違道は本遺構の東側に存在する可能性が高い。

今回の調査では、弥生時代の遺構を確認していない。弥生時代の多集落が本調査地まで及んでいないことが考えられる。今後の調査により、多集落の東限及びその状況を確認する必要がある。



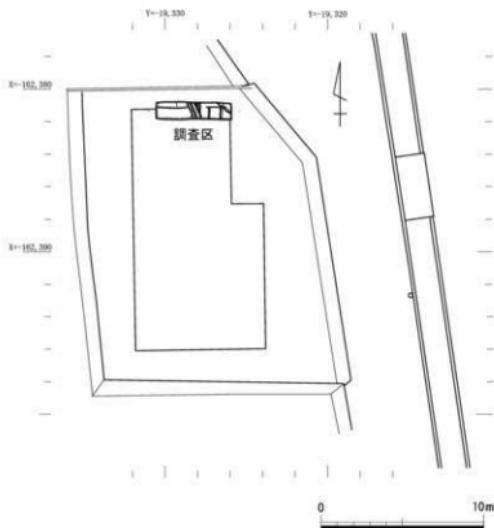
第10図 調査位置図 ($S = 1/2,500$)



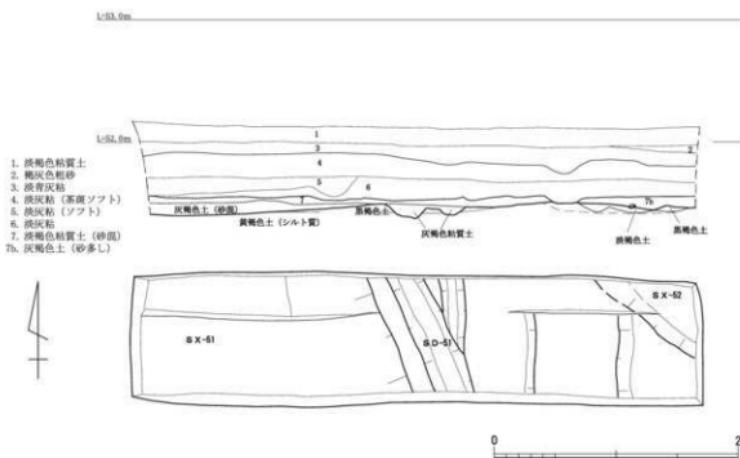
1. 調査区全景（東から）



2. 北壁土層堆積状況（南から）



1. 調査区位置図



2. 遺構平面図及び北壁断面図

第11図 調査区位置図及び遺構平面図・北壁断面図（上： $S = 1/300$ 、下： $S = 1/40$ ）

3. 多遺跡 第24次調査

1. 遺跡・既調査の概要

多遺跡は、標高約52m前後の沖積地に立地する、弥生時代前期から古墳時代にかけての集落遺跡である。遺跡中央には式内大社の多坐弥志理都比古神社（多神社）が鎮座する。

今回の調査地は多神社の東側にあたる。本地西側で櫛原考古学研究所が実施した第4次調査では、弥生時代中期を中心とする遺構を検出している。また、昨年度に本地東側で南北約200mにわたって実施した第22次調査では、弥生～古墳時代の集落を囲む環濠を中心とした遺構群を検出しており、この成果から本調査の第1～9トレンチは弥生～古墳時代集落の内部にあたることが想定される。

今回の調査地は字「森ソエ」「宮ノ内」にまたがる。また、字「宮ノ内」の北東には觀音堂があり、平安時代後期作の十一面觀音立像が安置されている。

2. 調査の成果

今回の調査は水路の建設部分にあたり、北側で東西約90m、南側で南北約50mの工区が調査対象となる。第22次調査や周辺の工事立会の成果から、水路の工事深度は遺構面に達しないことが予想されたため、遺構密度や分布状況の確認を目的として部分的な11ヶ所の調査区を設定した。北側東西水路内では東から第1～9トレンチ、南側南北水路では北から第10～11トレンチと呼称する。

(1) 層序

ここでは北側の東西水路部分、第6トレンチの層序を示す。

第I層：青褐色粘質土、第II層：茶灰色粘質土、第III層：灰青色粘質土、第IV層：暗褐色土（ハード）、第V層：黒褐色土（ハード）、第VI層：黒色粘質土（ハード）、第VII層：青灰色シルト。

第I～III層は現代水田耕土及び床土層である。その直下、第IV層は中世の遺物包含層で上面が中近世の遺構検出面となる。現地表から中近世遺構検出面までが0.3～0.4mと浅く、中世以来の耕作等による削平を著しく受けていることが予想される。

第V・VI層は弥生時代～古墳時代に形成された遺物包含層、第VII層以下は地山層である。トレンチによっては、第VII層の上に暗黄灰色土が残存している場所もある。



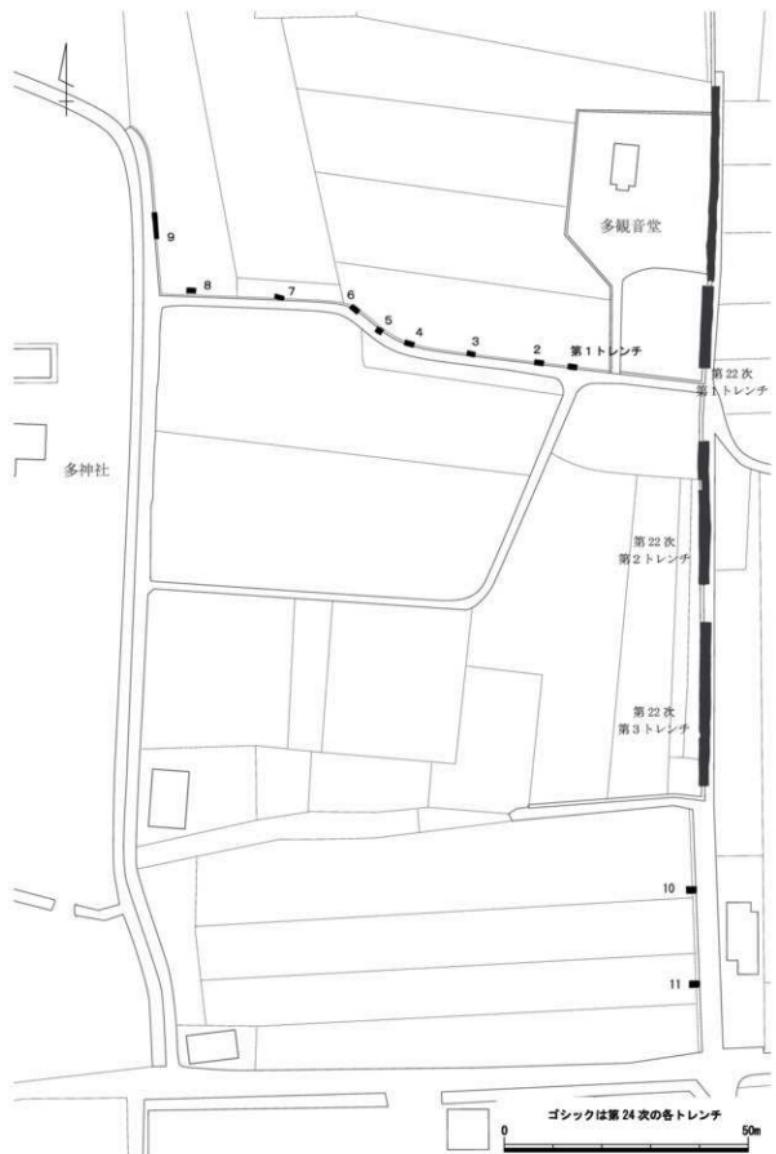
1. 第2トレンチ全景（南から）



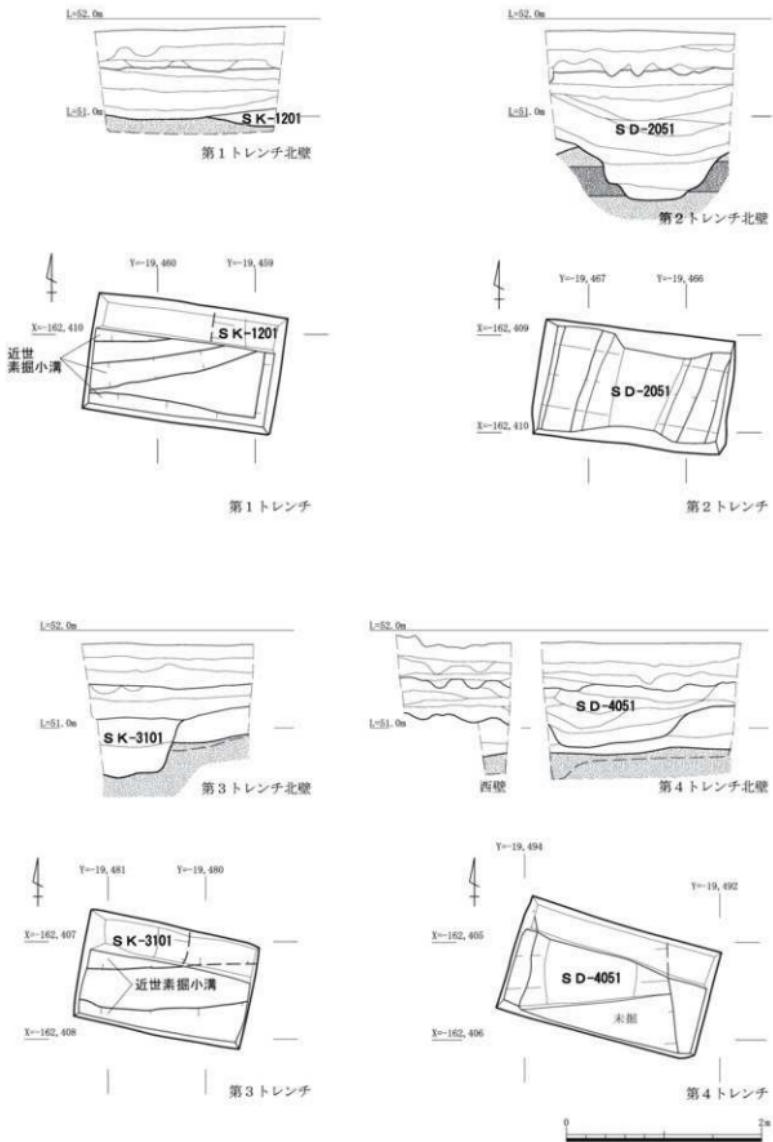
2. 第4トレンチ全景（南から）



第12図 調査位置図 (S = 1/2,500)



第13図 調査区位置図 ($S = 1/1,000$)



第14図 第1～4トレンチ遺構平面図及び断面図 (S = 1/50)

(2) 遺構と遺物

第1トレンチ

S K-1201 北側排水溝内で検出した土坑と考えられる遺構である。平面的に検出していなかったため詳細は不明だが、深さは0.2mで、堆積土は黒色粘土である。弥生時代前期（大和第1・2様式）の土器片が出土しており、この時期の遺構であろう。

素掘小溝群 近世の素掘小溝を4条検出した。東北東－西南西方向のものが2条と、現在の地割りに沿う西北西－東南東が1条・北北東－南南西方向が1条である。後者が前者を切る。

第2トレンチ

S D-2051 トレンチ全面で検出した北北東－南南西方向の大溝である。溝幅は不明、深さは約1.3mを測る。堆積土は、上層が暗灰色砂質土や淡灰緑色粘質土等、中層は淡灰色粘土や灰色粘土、下層は黒灰色粘土や暗灰色粘土等である。中世土器や木製品（建築材）、瓦等が出土しており、上層のみ瓦質土器が含まれる。鎌倉時代後期～室町時代か。

第3トレンチ

S K-3101 北側排水溝内で検出した土坑と考えられる遺構である。平面的に検出していなかったため詳細は不明だが、深さは約0.6mで、堆積土は上層が黒色粘質土、下層が黒灰色粘土である。遺物は出土しておらず時期不明。

素掘小溝群 近世の素掘小溝を2条検出した。東西方向に軸をもつ。

第4トレンチ

S D-4051 トレンチ全面で検出したほぼ南北方向の溝である。溝幅は推定で2.5～3m、深さは約0.6mを測る。堆積土は上層が褐色砂質土、中層は暗灰色粘土、下層は灰黒色砂質土等である。土師器小皿や瓦器、瓦質土器、瓦等が小片ながら比較的多く出土している。

第5・6トレンチ

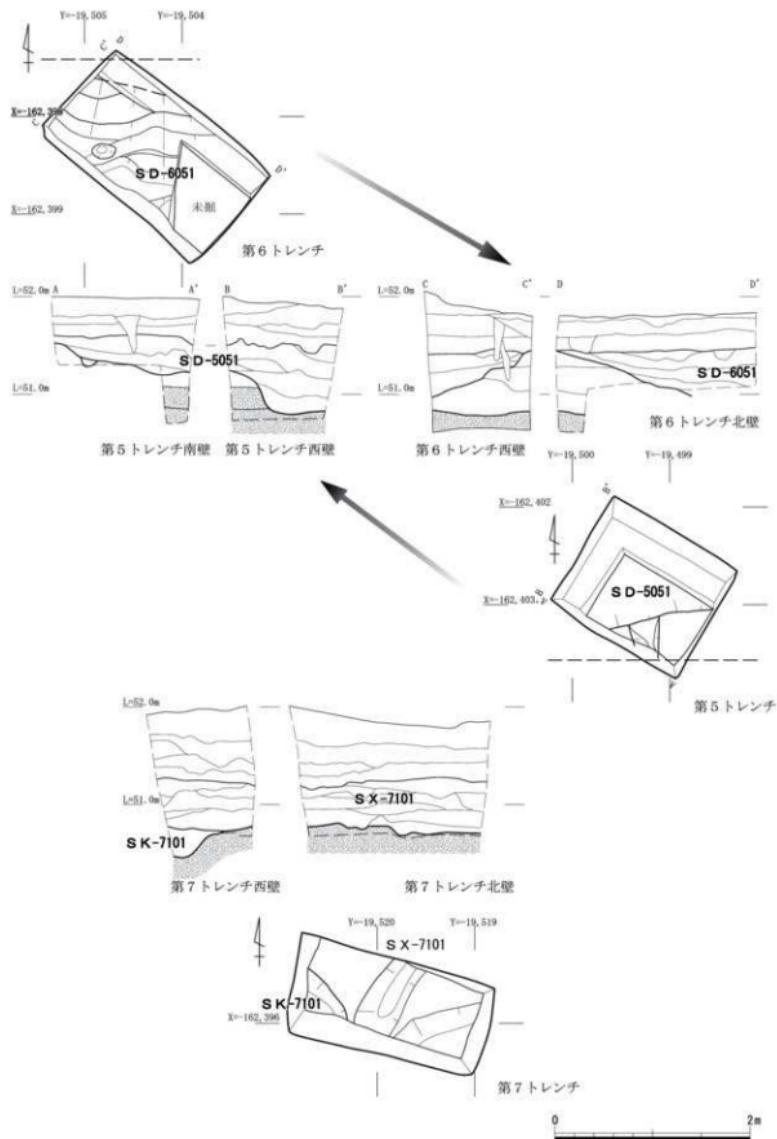
S D-5051・6051 両トレンチで検出したほぼ東西方向の大溝である。溝の軸方向や堆積層から、同一と考えられる。幅6.2m、深さは0.7m以上を測る。堆積土は、上層が明褐色粘質土（砂混）、下層は暗灰色粘土等である。土師器小皿や羽釜、瓦器、瓦質土器、瓦など室町期を中心とした遺物が出土している。



3. 第5トレンチ全景（東から）



4. 第6トレンチ全景（東から）



第15図 第6・7トレンチ遺構平面図及び断面図 (S = 1/50)

第7トレンチ

S K-7101 トレンチ南西端で検出した土坑と考えられる遺構である。調査区外に拡がるため全容は不明である。深さは0.3mで、堆積土は灰黒色粘質土（シルト混）である。遺物は少ないが、弥生時代中期前半の土器片が出土している。

S X-7101 トレンチ全面で検出した、黒褐色粘質土や黒灰色粘質土など厚さ0.5mの堆積層である。出土遺物は比較的多く、大和第VI- 3様式の半完形の長頸壺や器台、高坏の他、中期後半の土器も含まれる。本遺構の性格は不明だが、複数の遺構が切り合っていた可能性が考えられる。

第8トレンチ

S D-8201 トレンチ南端で検出した東西方向とみられる溝である。深さは0.2mを測り、堆積土は黒灰色粘質土である。詳細な時期は不明だが、弥生時代中期頃であろうか。

柱穴 トレンチ北東側で検出した2基の柱穴である。径0.4m、深さ0.3mを測り、堆積土は黒灰色土である。

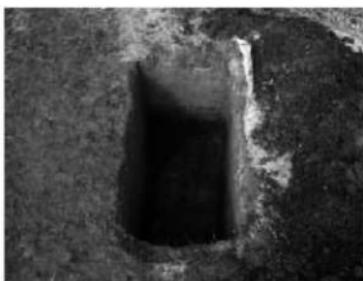
S D-8101 トレンチ東半で検出した北北東- 南南西方向の溝である。溝幅は不明、深さは0.3mを測る。堆積土は暗灰色砂質土である。出土遺物は少ないが、布留期の可能性がある。

第9トレンチ

S K-9101 トレンチ北端で検出した土坑である。S D-9101に大きく削平される。トレンチ北側に落ち込んでおり、土坑の形態は袋状を呈する。深さは1.4m以上を測る。堆積土は上層が暗灰褐色土、中層上位が黒色粘質土、中層下位が灰黒色砂質土、下層が暗褐色粘質土や黒色粘質土である。中層からの出土遺物が多く、弥生時代中期前半～中期後半（大和第IV- 2様式）の土器の他、鹿角片など獸骨も出土している。本土坑は形態等から井戸と考えられる。

S K-9102 トレンチ南半で検出した土坑である。深さ0.6mを測る。時期は不明だが、S D-9101を切っており、それよりも新しい遺構である。

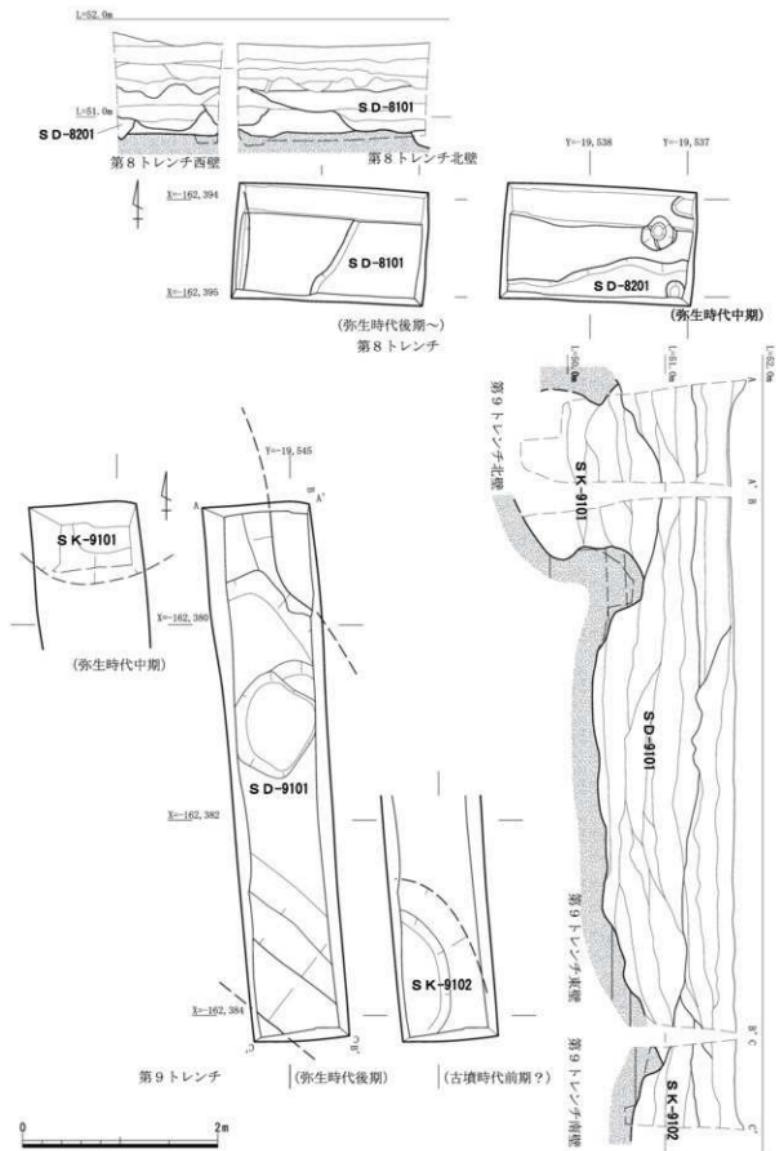
S D-9101 トレンチ全面で検出した北北西- 南南東方向の大溝である。推定溝幅5m前後、深さは約1.1mを測る。堆積土は上層が暗褐色土、中層が暗褐色粘質土、下層が黒灰色土や暗灰色粘土である。最上層には少量であるが布留期の土器片が含まれ、上層・中層からは大和第VI- 3～- 4様式の大形土器片、下層からは弥生時代中期の土器片が出土している。



5. 第7トレンチ全景（東から）



6. 第8トレンチ全景（東から）



第16図 第8・9トレンチ遺構平面図及び断面図 (S = 1/50)

第10・11トレンチ

昨年度実施した第22次調査地の南側に設定した2ヶ所のトレンチである。顯著な遺構は検出されず、南北方向の素掘小溝を検出したのみである。出土遺物も極めて少ない。

3.まとめ

今回の調査では、弥生～古墳時代の集落遺構と中世の遺構を検出した。

第1～9トレンチでは弥生時代～古墳時代の遺構遺物を多数検出し、当時期の遺物包含層も良好に残存していた。検出した遺構は弥生時代後期のものが多く、本地周辺に後期の遺構が分布していることが判明した。

また、第22次調査の南側にあたる第10・11トレンチでは、弥生～古墳時代の遺構は検出されず、遺物も極端に少ないとから、集落縁辺の様相を呈しているものと考えられる。集落の南東限は、第22次調査の第3トレンチまでとみられる。

中世の遺構は第2・4～6トレンチで検出し、この周辺に鎌倉～室町期の集落が存在していたと考えられる。特に第4トレンチで検出した南北大溝SD-4051は、第5・6トレンチの東西大溝SD-5051・6051と一連の遺構である可能性があり、屈曲する大溝、あるいは接続していたものと考えられる。また、本地東側の多遺跡第22次調査第1～3トレンチでも当時期の南北方向の大溝を確認しており、今回の大溝は集落内部を区画する大溝の可能性がある。

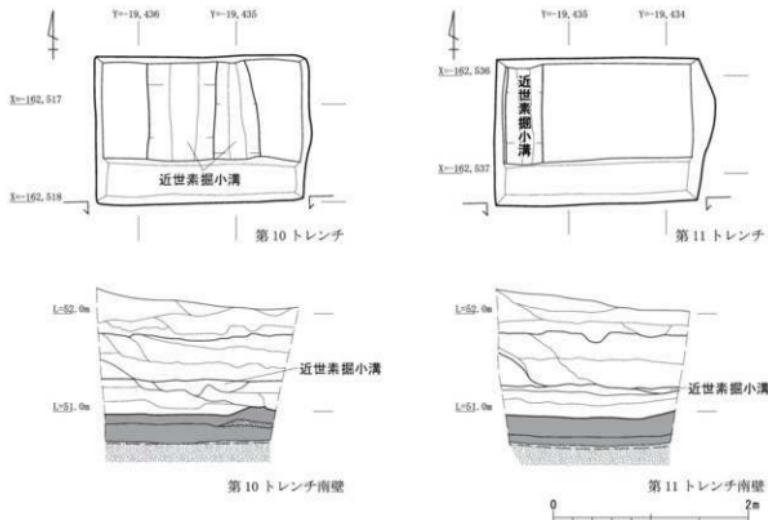
多新堂遺跡第1・5次調査地でも同時期の集落遺構を検出していることから、多新堂の中世集落と多神社東側の中世集落の廃絶と現在の多集落が形成について、今後の課題である。



7. 第9トレンチ全景（南から）



8. 第11トレンチ全景（西から）

第17図 第10・11トレンチ遺構平面図及び南壁断面図 ($S = 1/50$)第18図 第24次調査 第1～9トレンチの主要遺構位置図 ($S = 1/1,000$)

4. 多新堂遺跡 第5次調査

1. 遺跡・既調査の概要

多新堂遺跡は、標高約53m前後の沖積地に立地する遺跡である。

1984年度に権原考古学研究所がおこなった多遺跡第9調査では、弥生・古墳時代に所属する遺構遺物は少なく、調査地東半において多数の古代～中世遺構を検出した。このことから、調査地周辺は弥生時代の環濠集落である多遺跡からははずれ、新たに古代～中世を中心とする遺跡が拓がることが予想され、多新堂遺跡第1次調査として認識するに至った。その範囲は東西350m、南北300mで、「垣内」「大上院」などの小字から、中世集落・中世寺院関連の遺跡とも考えられている。

また、当遺跡は古代斜行道路の筋違道（太子道）の推定ライン上にあたる。昨年度より実施している第3・4次調査では、筋違道の側溝等を検出している（本書P.127参照）。

今回の調査地は第4次調査地の東側にあたる。南側隣接地の小字は「垣内」である。

2. 調査の成果

東西水路の建設部分において、4ヶ所の調査区を設定した。東から第1トレンチと呼称する。

（1）層序

調査対象地は東西140mにわたり、緩やかに西へ落ち込む地形である。ここでは第2トレンチの層序を示す。

第I層：暗褐色粘質土、第II層：暗青灰色粘質土、第III層：茶灰色粘質土、第IV層：灰色粘質土、第V層：黒褐色土、第VI層：灰黄色粘質土、第VII層：黒灰色粘土、第VIII層：緑灰色粘土、第IX層：青灰色粘土。

第I～III層は現代水田耕土層及び床土層である。第IV層は中世遺物包含層で、第1～3トレンチのみ確認できる。第V層以下は地山層である。第V層上面が全時期の遺構検出面となる。

（2）遺構と遺物

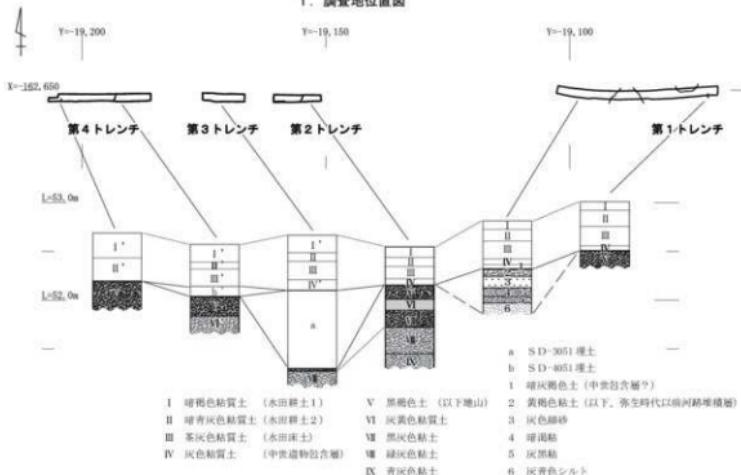
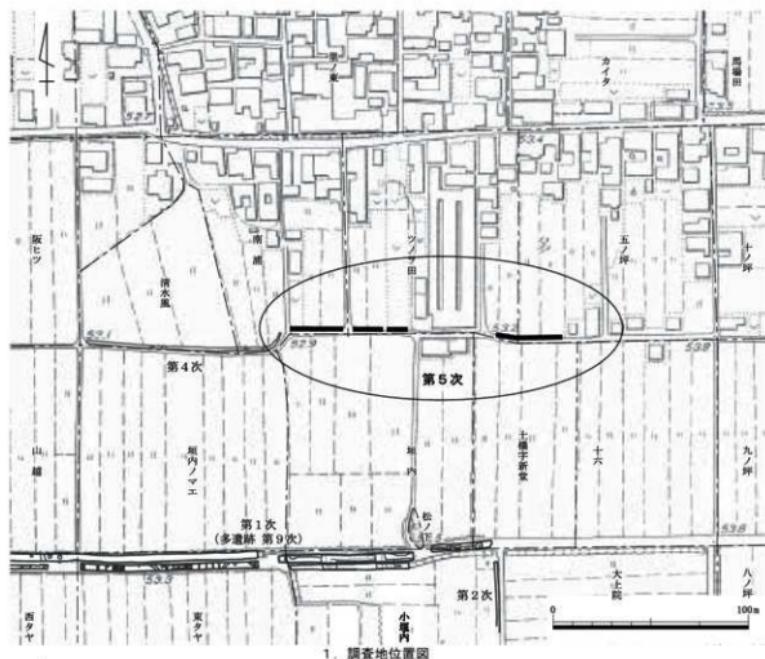
第1トレンチ

中世以前の遺構

S K-1101 トレンチ東半で検出した土坑で、その南端のみ検出した。調査区内の検出幅は約4m、深さは0.1mである。堆積土は暗灰色粘質土等である。遺物は出土しておらず時期不明。

S D-1101 トレンチ中央で検出した溝である。断面形は浅い皿形を呈し、検出幅は約7.5m、深さは約0.3m測る。堆積土は灰黒色粘質土等である。本溝の西肩よりさらに西側2mにわたって、灰色粘土ブロックを含む淡黄灰色粘質土がみられ、これが前身溝である可能性も考えられる（S D-1101B）。本溝は方形周溝墓の周濠の可能性も考えられたが、遺物は出土しておらず、時期・性格は不明である。

S R-1101 トレンチ西半、幅9mにわたって検出した河跡で、その東肩のみ検出した。土置き場の制限から、北半のみの掘削にとどめた。西側に向かい深くなり、深さは0.6m以上である。遺物は、下層から土師質の土器小片が1点出土したのみで時期は不明。本遺構は、西北西～東南東方向の河跡と考えられる。



2. 各トレンチ土層柱状図

第19図 調査地位置図及び土層柱状図（上：S = 1/2,500、下：S = 1/50）

近世～近代の遺構

S K-1001 トレンチ東端で検出した土坑である。調査区外に拡がるが、平面方形を呈するとみられる。深さは約1.0m。素掘小溝群に切られる。野井戸と考えられる。

素掘小溝群 トレンチ全域で検出した東西方向を中心とした小溝群である。溝幅0.3m前後、深さは0.1m前後で、堆積土は灰色粘質土である。近世以降の耕作溝であろう。

第2～4トレンチ

中世の遺構

S D-2051・-3051・-4051 第2～4トレンチで検出した一連と考えられる東西方向の溝で、第2トレンチ及び第4トレンチでは直角に南へ屈曲する。第2トレンチS D-2051では、溝幅約3.5m、深さ約1.1mを測る。S D-2051屈曲部の南肩部において、半完形の土師質羽釜や瓦器塊、瓦質土器等が出土しており、南側から投棄された様相を呈している。本遺構は中世集落の北側環濠と考えられ、一辺は約31m（溝を含めると38m）を測る。時期は14世紀後半とみられる。

S R-4051 第4トレンチで検出した、北北西～南南東方向の溝状遺構もしくは河跡である。東肩はS D-4051に切られ、幅は約12mを測る。堆積土は上層が暗褐灰色砂質土だが、中層以下は褐灰色粗砂で、湧水激しく掘削をおこなっていない。上層からは古墳時代～古代の土師器や須恵器小片が出土している。本遺構は、筋違道の東側道路側溝にあたる可能性が高い。

近世～近代の遺構

S K-4001 第4トレンチ西端で検出した方形の土坑である。調査区外に拡がり、また激しい湧水のため掘削をおこなっておらず、全容は不明である。野井戸であろう。

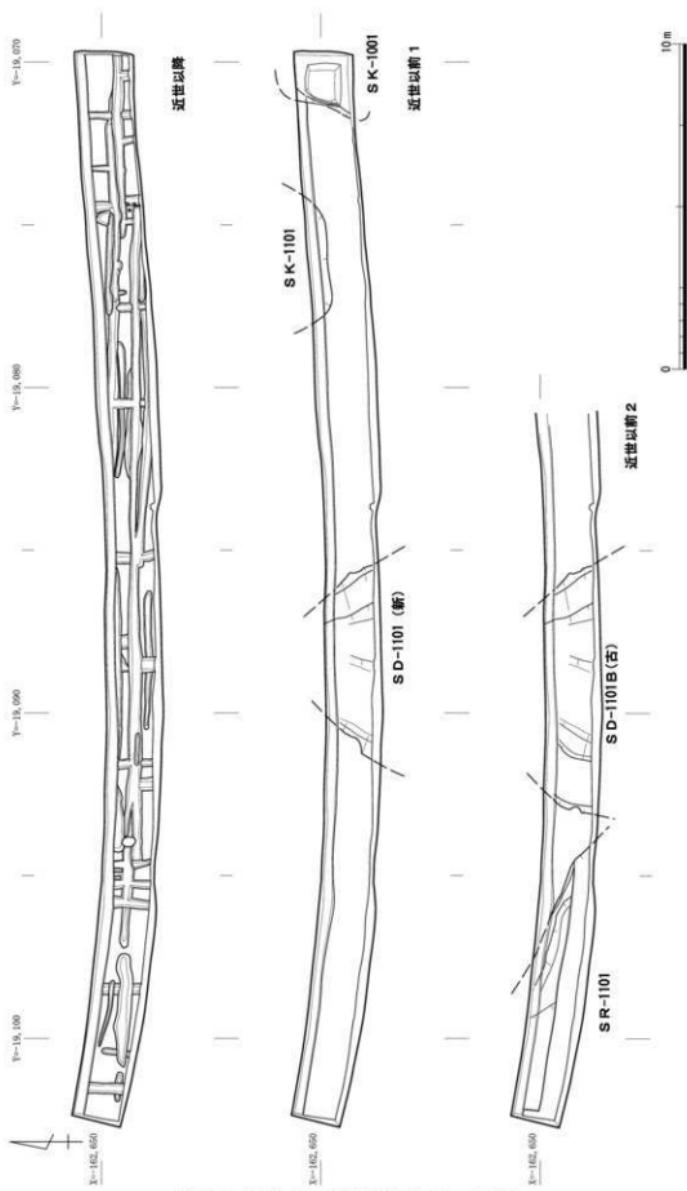
素掘小溝群 第2～4トレンチ全域で検出した東西方向を中心とした小溝群である。溝幅0.3m前後、深さは0.1m前後で、堆積土は灰色粘質土である。近世以降の耕作溝であろう。

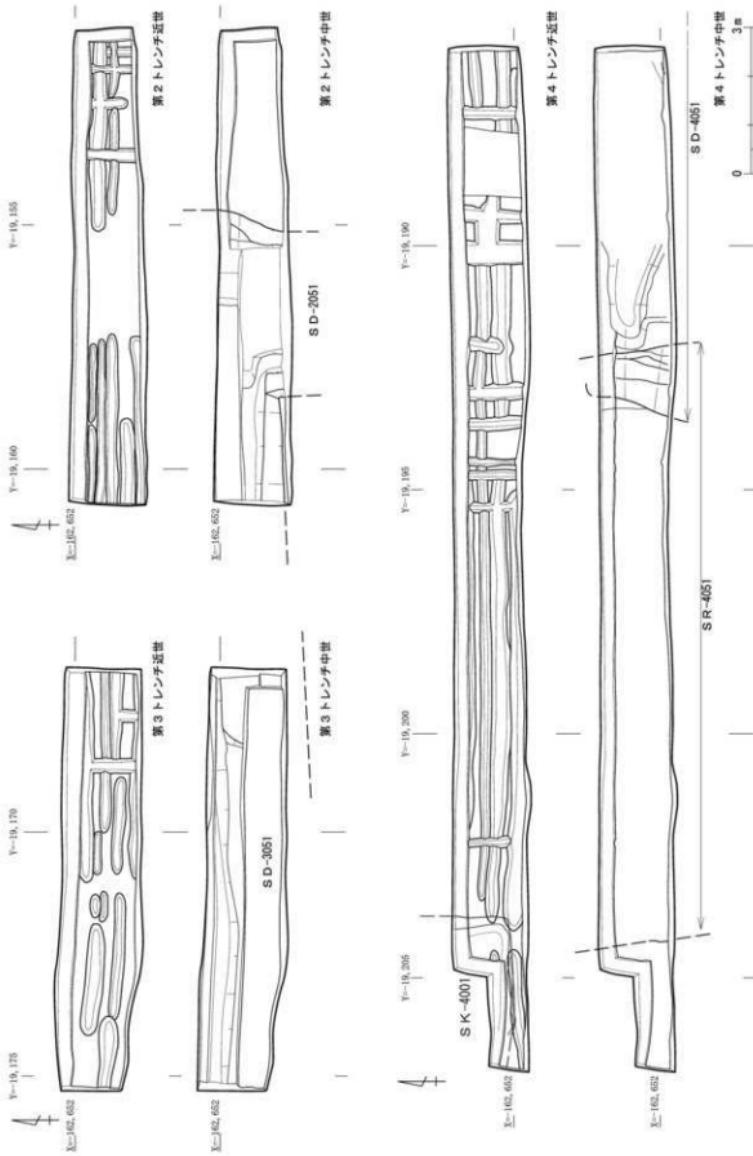
3.まとめ

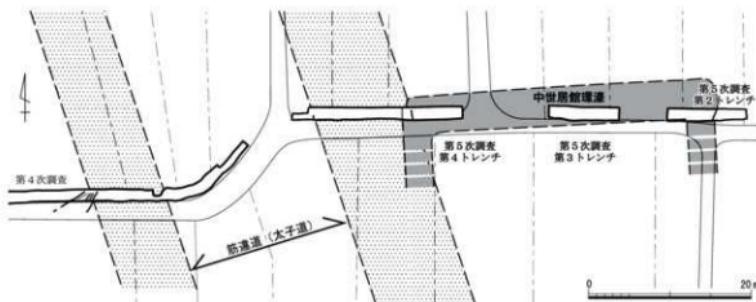
今回の調査では、筋違道の側溝と中世居館の環濠と考えられる遺構を検出した。

筋違道の東側側溝としては、位置関係や走行方向、堆積土から、第4トレンチS R-4051が該当する可能性が高い。本調査の西側でおこなった第4次調査では西側側溝を検出しており、本調査のS R-4051を東側側溝とすると、その道路幅は約20m（側溝を含まず）を測る。また、本調査区から南へ約200mでおこなった第3次調査においても東西両側溝を検出しており、東側は粗砂で埋没する点からも、本調査区のS R-4051と一連の遺構と考えられる。S R-4051からは古墳時代～古代の遺物しか出土しておらず、埋没時期は特定できなかったが、第3次調査の成果から鎌倉時代頃と推定される。

筋違道の機能が失われた後、S D-2051・3051・4051が掘削される。これらは、中世集落の北辺を開む環濠とみられる。本地南側約100mで実施した第1次調査（多遺跡第9調査）では、北側の字「垣内」を区画するようにしてコの字形に屈曲した溝群を検出している。他の調査では同時期の集落遺構を検出していないことから、中世集落は字「垣内」を中心に形成されたと考えられる。集落は短期的で、室町時代の範疇に収まるとみられる。

第20図 第1トレンチ造構平面図 ($S = 1/150$)





第22図 筋違道（太子道）・中世居館環濠復元図（S = 1/600）



1. 第1トレンチ全景（西から）



2. 第2トレンチ S-D-2151完掘状況（北東から）



3. 第3トレンチ全景（西から）



4. 第4トレンチ全景（東から）

5. 笹鉢山古墳群 第9次調査（笹鉢山5号墳 第1次調査）

1. 遺跡・既調査の概要

笹鉢山古墳群は田原本町北西部に立地する古墳群で、東西400m×南北300mの範囲内に5基の古墳が認識されている。このうち笹鉢山1号墳は町内において数少ない今も墳丘が残る前方後円墳で、過去5次にわたる調査によりほぼその全容が判明している。1号墳に隣接する2号墳は墳丘が残っていないものの、周濠から馬と馬曳き人物の埴輪が出土したことで著名である。

今回の調査対象となる5号墳は、1号墳の西側約300mに位置する。明治26年刊行の『大和國古墳墓取調書』にも「式下郡都村大字八尾字大塚第二百三十三番 村ノ西方ニアリ此草ヲ牛馬ニ與フレハ病氣アリト云フ」との記載がある。

現在は周辺の宅地化が進んでいるが、5号墳推定地だけは宅地化されず小さな墳丘状になっている。今回の調査地はこの推定地の北東側隣接地にある。

2. 調査の成果

今回の調査は農家住宅の建築に伴う事前調査である。建物自体の基礎は盛土をおこなった上でベタ基礎であり、地下遺構への影響はないと考えられた。しかし敷地東側に沿って深さ0.6mの掘削を伴う擁壁工事の計画がなされたため、この擁壁工事部分において調査を実施した。よって南北34m×幅1.4mの細長い調査区となった。

なお、弥生時代～中世の遺構については工事による破壊を免れることから一部の調査にとどめており、全て掘削調査をおこなっていない。

（1）層序

第Ⅰ層：淡青灰色土、第Ⅱ層：茶褐色土、第Ⅲ層：淡灰褐色砂質土、第Ⅳ層：暗灰褐色砂質土、第Ⅴ層：灰色シルト、第Ⅵ層：灰色粘土、第Ⅶ層：黒灰色粘土。

第Ⅲ層までは現代水田層である。第Ⅳ層からは瓦器塊や瓦質土器が出土しており、中世後期の遺物包含層と考えられる。その上面で近世の素掘小溝を検出した。第Ⅴ層以下は地山層である。その上面が弥生時代～中世の遺構検出面である。

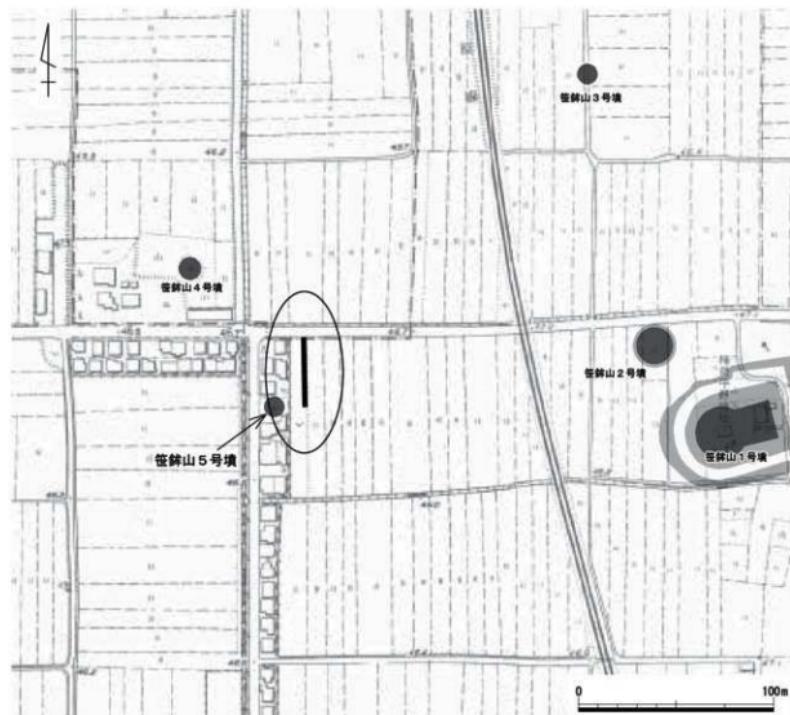
なお、調査地北半では部分的に第Ⅵ層：灰色粘土にかわり黄灰色粘土が堆積する。調査地南半は第Ⅶ層：黒灰色粘土がみられず、青灰色シルトが堆積する。

（2）遺構と遺物

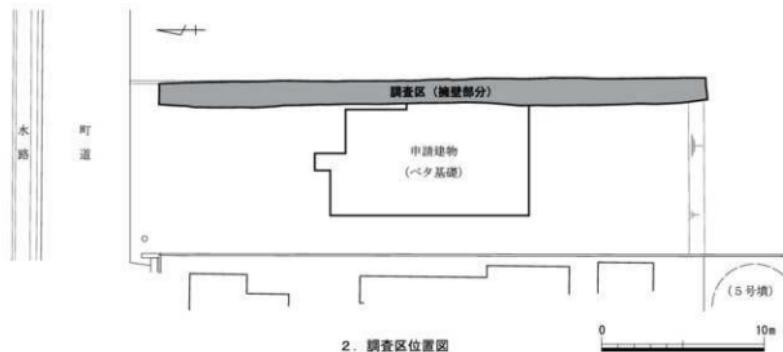
弥生時代～古代の遺構

S K-101 トレンチ北半中央で検出した土坑状の遺構である。平面は不整形で径約1.5mを測る。最深部は調査区外となるため確認できなかったが、0.8m前後になるものとみられる。ブロック土が多く混じるシルトで埋まっており、遺物は出土していない。弥生時代後期のS R-101を切ることからそれよりも新しいが、後述の中世素掘小溝群に切られている。人為的な遺構ではなく、風倒木痕である可能性が考えられる。

S R-101 トレンチ中央で検出した遺構である。南東～北西方向に軸をもち、幅約8m、深さ約0.4mを測る。北肩を後述のS K-101に切られる。堆積土は上層が暗褐色砂質土、下層が暗灰色粘土

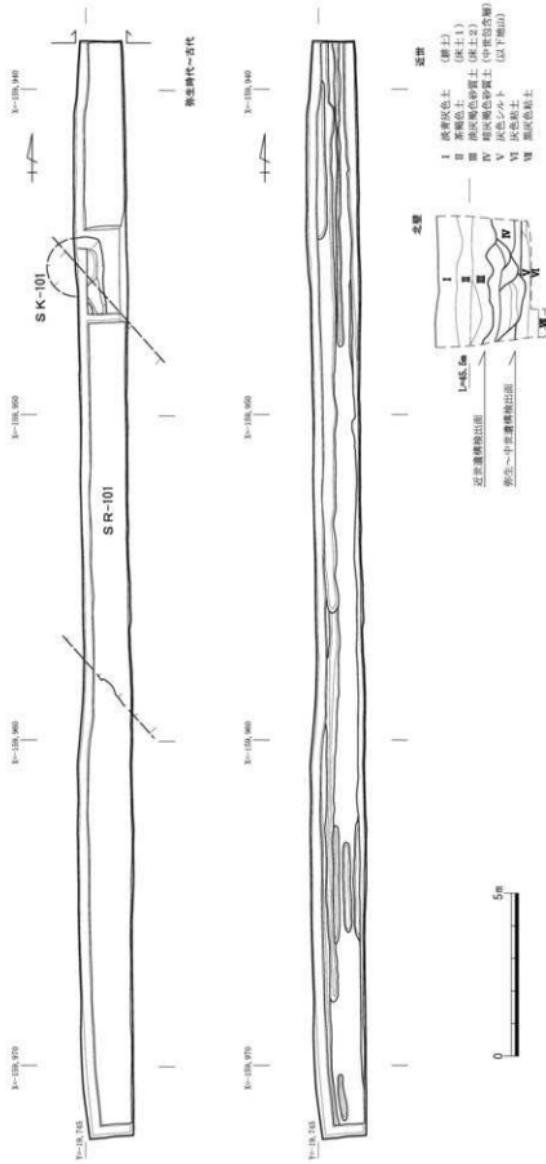


1. 調査地位置図



2. 調査区位置図

第23図 調査地及び調査区位置図（上：S = 1/2,500、下：S = 1/300）



第24図 遺構平面図及び北壁断面図（平面図：S = 1 / 150、断面図：S = 1 / 50）

である。遺物数は少なく、細片の弥生時代後期土器片が出土している。このことから、弥生時代後期頃に流れていた河跡と考えられる。

中世の遺構

素掘小溝群 調査区北壁や南壁、前述の遺構を確認する際に深掘りをおこなった箇所で確認した南北方向の素掘小溝群である。溝幅約0.4m、深さは0.2m前後を測り、堆積土は褐灰色砂質土等である。中世の耕作に伴う小溝であろう。

近世の遺構

素掘小溝群 トレンチ全域で検出した南北方向の小溝群である。溝幅は0.2~0.4m、深さは0.1m前後で、灰色砂質土等が堆積する。これも耕作に伴うものであろう。

3.まとめ

今回の調査では、笠鉢山5号墳の周濠等の古墳関連遺構は検出されなかった。ただし、中近世素掘小溝群や遺物包含層からは古墳時代後期の須恵器片や埴輪片が出土しており、付近に古墳があることを示唆していよう。5号墳の正確な位置や規模などは、今後の調査に期待したい。



1. 調査区全景（北から）



2. 調査区北半一部掘り下げ（南東から）

6. 保津・宮古遺跡 第38次調査

1. 遺跡・既調査の概要

保津・宮古遺跡は、奈良盆地の中央、標高47m前後の沖積地に立地する。遺跡では、縄文時代後期、弥生時代前期～古墳時代前期、古墳時代中・後期～古代の集落遺構を検出しているほか、遺跡南部には中世・近世の集落遺跡である保津環濠遺跡が重複する。また、遺跡中央を筋違道が縱断し、保津・阪手道が横断する。

今回の調査は、遺跡のはば中央、現宮古集落内での個人住宅建築に伴って実施した。付近では調査が進んでいないものの、筋違道の西側で実施した第19次調査では12世紀前後を中心とする遺構・遺物を多数検出している。このことから、今回の調査地にも近世及び中世の遺構が拡がる可能性が考えられた。

2. 調査の成果

調査地の現状は宅地である。新築予定建物範囲内の南西部分で東西8.5m×南北4mの調査区を設定した。

(1) 層序

第Ⅰ層：淡茶灰色土、第Ⅱ層：暗青褐色土、第Ⅲ層：淡茶灰色土、第Ⅳ層：暗茶灰色土、第Ⅴ層：黄褐色粘質土、第Ⅵ層：黄灰色粘質土、第Ⅶ層：明褐色粘質土、第Ⅷ層：淡青灰色粘土、第Ⅸ層：黒色粘土、第Ⅹ層：灰白色粘土、第Ⅺ層：灰色粗砂。

調査では、第Ⅲ層までを重機により除去し、第Ⅳ層上面で近世及び室町時代の遺構検出をおこなった。なお、鎌倉期の遺構は第Ⅴ層上面を遺構面とするが、大溝を中心とした部分的な調査に留めた。

(2) 遺構と遺物

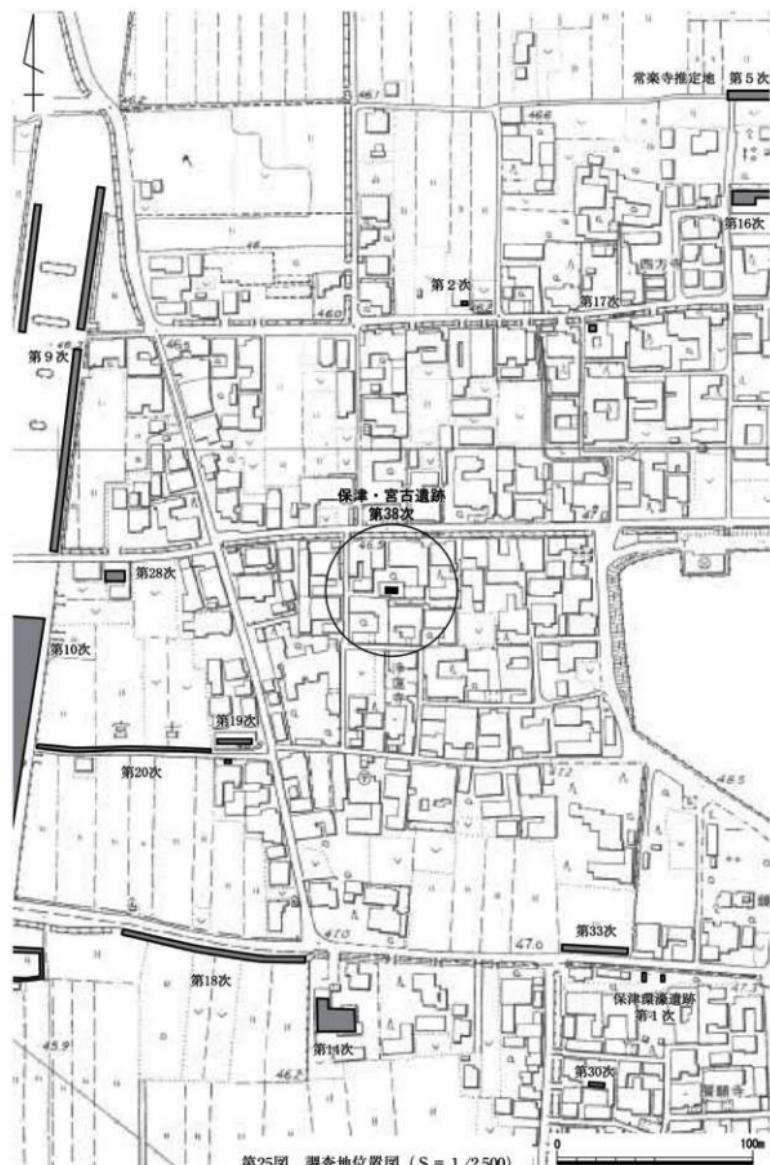
鎌倉時代～室町時代の遺構

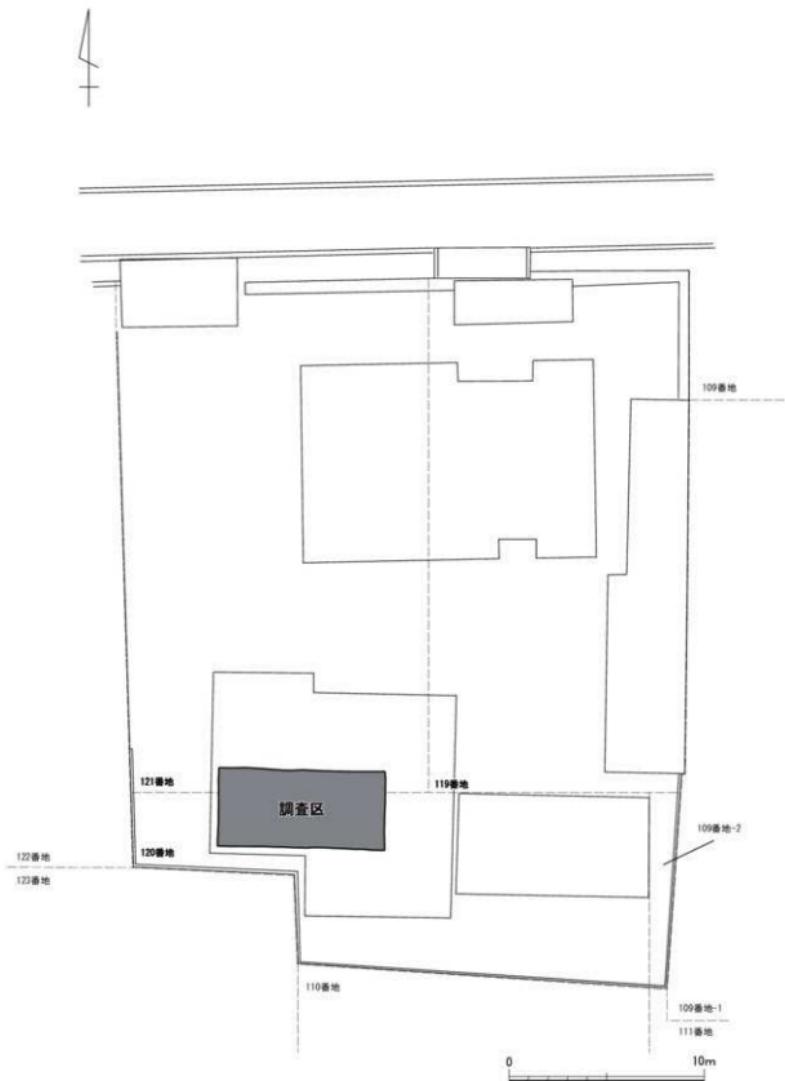
S D-21　　調査区西半で検出した南北方向の溝である。深さ0.65mを測る。西肩を検出していないため、幅は明らかでない。深さ0.35mまでが一条の大溝となっているが、以下は幅0.3m前後の小溝群となっていた。少なくとも8条の小溝に分かれるが、堆積土から同時に2条程度が掘削されていたようである。出土遺物の大半はS D-51と同時期のもので、この溝に伴うものとは限らない。室町時代頃の遺構となる可能性も考えられる。溝の性格は明らかでない。

S D-51　　調査区東半で検出した南北方向の大溝である。ただし、7度程度座標北より西側に傾く。幅2.7m、深さ1.2mを測る。中・下層から多数の瓦器・土師器が出土し、特に中層の遺物は溝の西側から廃棄された状態で出土した。また、調査区中央北で東西方向の杭列を検出した。杭列南側の溝西肩には小溝状の窪みがあり、この杭列がしがらみ、または堰のような役割を果たしていたようである。なお、この杭列を境界として溝の堆積土が大きく異なっていた。南側が先に埋没し、北側は最終的に人為的な埋め立てにより埋没したようである。遺物から、13世紀中頃の遺構と考えられる。

江戸時代の遺構

S K-01　　調査区西半で検出した方形の土坑である。東西3m、深さ約0.8mを測る。南側が調査区外となるため南北の規模は明らかでない。3辺の肩がほぼ垂直であるため土坑としているが、





第26図 調査区位置図 (S = 1 / 250)

南側へ延びる溝となる可能性も考えられる。S D-01とほぼ同時期の陶磁器などが出土した。

S D-01 調査区東端で検出した、東西方向の大溝である。調査区内で延長2mを検出した。幅約3m、深さ約0.8mを測る。陶磁器など近世後期の遺物が出土した。

S D-02 S D-01からS K-01に延びる小溝である。幅0.45m、深さ0.1m。S D-01側に丸瓦3点を連ねて設置しており、S D-01とS K-01を結ぶ暗渠であった可能性が考えられる。

(3) 出土した遺物

中世の溝S D-51からは、鎌倉時代の遺物がまとめて出土した(第28図)。

1・2は4層出土の土師器小皿である。直径9cm前後で、暗橙褐色を呈する。3・4は5層出土の土師器小皿である。3は淡褐色で直径9.2cm、4は橙褐色で直径8.2cmを測る。5は土師器中皿で、直径12.3cmを測る。色調は淡褐色である。6は復元径14cm前後の土師器中皿で、焼成後に両面からの穿孔がみられる。7は小片のため復元径は不明であるが、焼成後の穿孔がみられる土師器小皿である。

8は受口状の土師質羽釜で、復元口径28cm前後とみられる。鍔の下及び口縁部外面に煤が付着する。9は純口状の土師質羽釜で、復元口径21cm前後とみられる。鍔下の全体に煤が付着する。10は土師質の鉢である。やや表面が風化しているが、煤は付着していない。復元口径26cm。

11~13は瓦器塊である。暗文は螺旋状で、やや疊らである。外面は口縁部ちかくのみヘラミガキがみられる。口径は12~12.5cm、器高3.5cm前後である。

14は青磁碗である。見込み部分には、型押しによるとみられる「道王金堂」と読める文字を陽出している。釉の発色は鈍く、胎土も褐色がかる。15は青磁小皿である。復元口径10.4cm。見込み部にはジグザグ状の櫛点描文がみられる。釉は淡い緑灰色で、胎土は灰白色を呈する。

3.まとめ

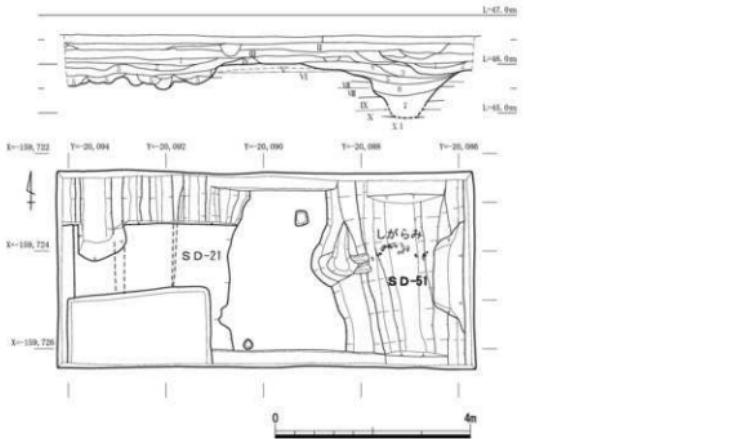
今回の調査では、鎌倉時代の集落関連遺構を確認することができた。大溝S D-51は南北方向の大溝で、座標北より7度西に傾く。これは筋違道の地割に大きく影響されたものと考えられる。

調査地の西側75mには、筋違道の痕跡である北北西-南南東方向の道路がある。現在の幅員は3.5m前後であるが、筋違道の築造当初は幅24m前後の道路面をもつ大規模な計画道路であったと考えられる。筋違道の側溝は第14・19次調査で検出しているほか、県の実施した京奈和自動車道建設に先立つ試掘調査でも東西の側溝を検出しているようである。それぞれの側溝検出位置から、現道路は両側から10mずつ浸食されて中央付近が残った状態である可能性が考えられる。第19次調査では、筋違道の西側で多数の遺物を含む12世紀末頃の溝を検出している。今回検出した大溝は、筋違道からやや離れた場所ではあるが、道沿いに形成された集落に伴って掘削された可能性が考えられる。なお、北東側には中世に栄えたと考えられる寺院跡「常楽寺推定地」がある。宮古池北半を含む広い範囲を境内地としていたことが小字名から推測され、これに近接する本調査地の中世集落はこの寺院の門前町的な性格のものであった可能性も考えられる。

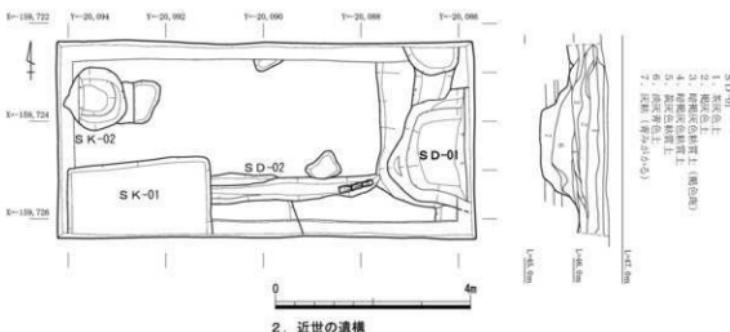
鎌倉時代の生活関連遺物が多数出土しているのに対し、室町時代頃の遺物は極めて希薄である。この時期前後と推定される溝状遺構（下層が小溝状となって複数回再掘削された痕跡がある）からは顕著な遺物が出土していないため、集落が宮古北遺跡や宮古石橋遺跡など周辺の遺跡に移動して

I	淡青灰色土 (現代造成層)
II	暗青灰色土 (古代包含層)
III	淡青灰色土 (近世包含層)
IV	暗青灰色土 (中世包含層)
V	黄褐色粘質土 (中世包含層)
VI	黄褐色粘質土 (以下地盤)
VII	褐色粘土粘質土
VIII	暗青灰色粘土
IX	暗青粘土
X	灰白色粘土
XI	灰色粗砂

- S D-21
 1. 暗青灰色砂質土
 2. 暗青灰色粘質土
 3. 暗青褐色粘質土
 4. 塔灰色粘質土
 5. 灰色粘土
 S D-51
 1. 暗青灰色粘土
 2. 暗青褐色粘質土 (SD-51 埋設後の浅い土層)
 3. 褐色粗砂
 4. 塔灰色粘質土
 5. 青灰色粘質土
 6. 塔灰色粘土
 7. 暗青灰色粘質土

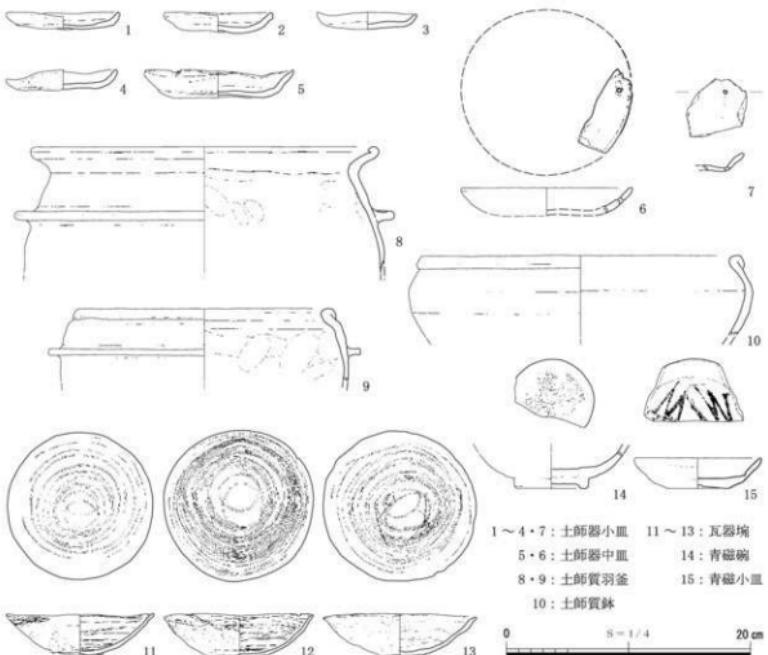


1. 中世の遺構及び北壁・東壁断面図



2. 近世の遺構

第27図 中世・近世遺構平面図及び北壁・東壁断面図 (S = 1 / 100)



第28図 S D-51出土遺物実測図

いた可能性も考えられる。

江戸時代後期には再び生活関連遺物が多数出土するようになる。江戸時代前期の状況は明らかでないが、近世以降に現在の宮古集落の景観ができあがったようである。なお、調査で検出した大溝 S D-01は、宮古120番地と121番地の境界に掘削されていた可能性がある。また、S K-01が南北方向の大溝であるとすれば、南側隣接地の敷地境界に対応するものとなる可能性もある。



1. 中世遺構完掘状況（東から）



2. S D-51中層遺物出土状況（南から）



3. S D-51下層遺物出土状況（北から）



4. S D-21完掘状況（北東から）



5. 近世遺構完掘状況（西から）



6. S D-51出土土器

7. 保津環濠遺跡 第2次調査

1. 遺跡・既調査の概要

保津環濠遺跡は、奈良盆地の中央、標高47m前後の沖積地に立地する。現在の保津集落は環濠外にも集落が拡大しているものの、元禄十七年の絵図にみられるように本来は一町四方に南側西半の張り出し部をもち、それらを「環濠」で囲むという集落形態であった。

今回の調査は、保津環濠集落の北側内濠の改修工事に伴って実施した。保津環濠遺跡の北側周濠は近世以降二重の濠となっていたとみられるが、これは北側が宮古地区の農業用水路であり、南側が保津集落の排水路として機能していたためである。なお、保津集落の北端は大字保津と大字宮古の大字境であり、旧式下郡と旧十市郡の郡境となっている。そして、古代の道路跡「保津・阪手道」の復元路線もある。平成16年度の道路拡幅工事に伴う外濠の暗渠化工事に際して発掘調査を実施し、室町時代頃の東西大溝を検出している。

2. 調査の成果

今回の調査は、北側環濠内濠部分での調査である。濠の掘削時期及び規模を確認するために4ヶ所のトレンチを設定し、調査をおこなった。調査地の現状は水路である。平成16年度の工事により北側の用水路が暗渠化し、その際溝幅等に若干の変動があった可能性がある。

(1) 層序

基本層序であるが、基本的に大溝の両肩を確認していないため、地山層を含めた本来の基本層序は不明である。ここでは、大溝の肩近くと想定される第3トレンチ北半での層序を示す。

第Ⅰ層：暗茶灰色土、第Ⅱ層：暗青灰色粘土、第Ⅲ層：黒色粘土、第Ⅳ層：淡青灰色粘土、第V層：青灰色粗砂、第VI層：青灰色微砂。

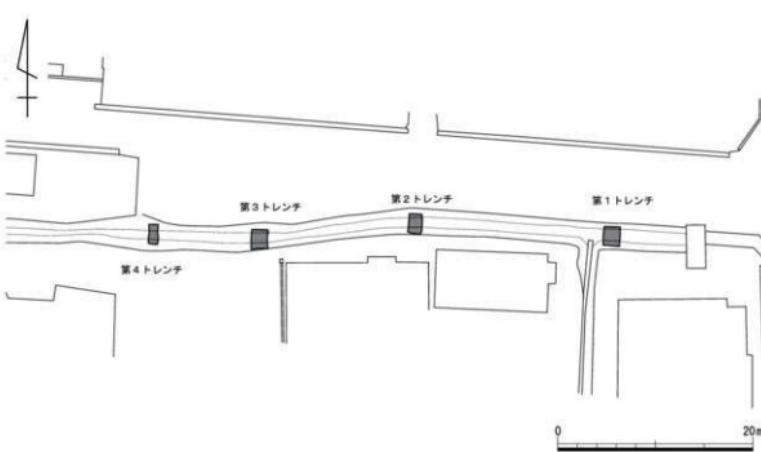
調査では、表土を含めてすべて人力により掘削をおこなった。

(2) 造構と遺物

大溝 第1～4トレンチで東西方向の大溝を検出した。幅2mの調査区内で両肩共に確認することができなかった。その状況から、幅5m程度はあった可能性がある。現代の溝が深さ1m、近代の溝が深さ1.3m、近世末頃の溝が深さ1.6m。いずれの調査区でも中層まで昭和期の陶磁器・瓶・瓦等が多量に出土した。ゴミ捨て場となっていたためであろう。下層からは近世の遺物が出土しているが、量的には僅少であり、時期決定の根拠となるかどうか明らかでない。

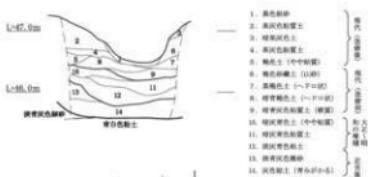
現状の保津北側環濠（内濠）は、集落西半でラインを南寄りに変えている。調査でも西半の第3・4トレンチのみで北肩の法面を確認していることから、近世後期の再掘削段階には既に集落西半の北端が一段南に疊む形となっていた可能性が高い。

なお、第4トレンチのみ南肩に石垣を構築していることが判明した。石垣は、直径15cmの丸太を横に置き、その上に奥行き50cm程度の割石を設置している。水路側では高さ30cm、幅30cm前後が露出する形となる。第4トレンチ南肩には比較的大きな古木があり、この木の根があったために石垣が撤去されず残存したのであろう。ただし、この石垣の設置時期は裏込石と共に出土した陶磁器・瓦などから幕末～明治頃とみられる。本来の濠南肩はさらに南側に拡がっていたようである。



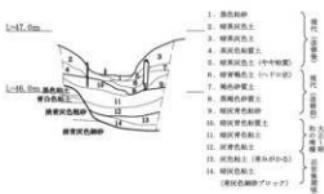
第29図 調査地及び調査区位置図（上：S = 2,500、下：S = 1 / 500）

L=88.0m



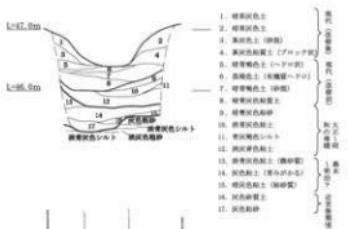
第1トレーナ

L=48.0m



第3トレーナ

L=88.0m



第2トレーナ

L=48.0m



第4トレーナ



第30図 遺構平面図及び東壁断面図 (S = 1 /80)

3.まとめ

今回の調査では、保津集落の北側環濠の埋没過程を確認した。その主要な部分は近代の再掘削以降に堆積した粘土層であり、環濠掘削当初の年代を確認することはできなかったが、溝底の深さや北肩の想定位置を確認したことから、保津環濠集落の構造について一定の情報を得ることはできた。また、大溝に伴う施設として石垣を検出した。ただし、大溝掘削当初の構造物ではなく、幕末～明治期に設置された可能性が高い。



1. 調査前 全景（東から）



2. 第2トレンチ全景（西から）



3. 第3トレンチ土層堆積状況（西から）



4. 第4トレンチ土層堆積状況（西から）



5. 第4トレンチ石垣検出状況（北から）



6. 第2次調査出土近世灯火具

(2) 工事立会の概要

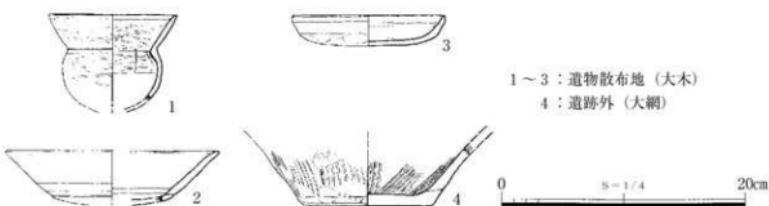
2010年度に実施した工事立会は46件である（第7表）。このうち、小阪細長遺跡（R-201017）、藏堂遺跡（中ツ道）（R-201019）、遺物散布地（11-D-0659）（R-201027）、多遺跡（R-201032）、常楽寺推定地（宮古石橋遺跡）（R-201033）、秦楽寺遺跡（R-201042）、佐味遺跡（R-201044）等で、中世を中心とした造構・遺物を確認している。

遺物散布地（11-D-0659）で実施した工事立会（R-201027）では、古墳時代及び中世の遺物包含層を確認し、古墳時代の小形丸底壺や高坏（第32図1・2）、中世の土師器中皿（3）、羽釜、瓦質播鉢や火鉢片などが出土した。当遺跡は大字より「大木遺跡」と遺跡名称を付与する予定である。

大網集落内の下水道工事に伴う工事立会（R-201029）では、室町期を中心とする土師器羽釜、瓦器塊、瓦質播鉢（4）などの中世遺物が採取された。教行寺を中心に中世造構が拡がる可能性があることから、新規発見の遺跡「大網遺跡」として登録をおこなう予定である。



第31図 田原本町の遺跡と工事立会地点 (S = 1/40,000)



第32図 工事立会時出土土器



1. R-201027 遺物散布地（大木）工事立会状況①



2. R-201027 遺物散布地（大木）工事立会状況②



3. R-201029 遺跡外（大網）工事立会状況①



4. R-201029 遺跡外（大網）工事立会状況②



5. R-201032 多遺跡内工事立会状況



6. R-201044 佐味遺跡内工事立会状況

第7表 2010年度 工事立会一覧

遺跡名	調査地	原因者	工事の目的	立会者	調査日	内 容
1 八尾丸堀 (K-201001)	田原本町八尾 182 南側道路	奈良県桜井 土木事務所	県道拡幅	清水	2010. 4. 9	道路拡幅に伴う水田排水口設置工事。4m四方、深さ 0.6m の掘削 5ヶ所。掘削は中世包含層まで及ぶが、遺構遭滅なし。
2 丹波山 (K-201002)	田原本町法貴寺 987-2 他	食糧需給土 地改良会	水路の改修	清水	2010. 4. 13	既存水路の撤去・改修工事時に立会。深さ 0.3m の掘削。近現代盛土内におさまる。
3 十六面・薬王寺 (K-201003)	田原本町薬王寺 351-3, 351-5	ファースト 住建(株)	個人住宅の建築	清水・ 奥谷	2010. 4. 16 ～ 4. 23	2棟の住宅の基礎工事時に立会。深さ 0.3m の掘削。近現代盛土内におさまる。
4 唐古・鍵 (K-201004)	田原本町唐古 126	唐古自治会 長	水車及び引込電 柱の設置	藤田	2010. 4. 23 ～ 5. 9	史跡地内の電柱設置工事時に立会。埋防柵土内におさまる。
5 矢瀬中曾司 (K-201005)	田原本町矢瀬 663-4	個人	青空駐車場	藤田・ 清水	2010. 5. 17	埋設物設置工事時に立会。中世軒小構を検出。瓦質土器が少量出土。
6 唐古・鍵 唐古北沢御厨定地 (K-201006)	田原本町唐古 330	個人	廻廊の建設	奥谷	2010. 5. 31	無届け工事。神社北と乙羽側での掩埋設置。近世～現代溝内の削削例。瓦質土器を検証。世に遡る可能性あり。
7 多・多新堂、 前通道 (K-201007)	田原本町多 284 北側道路	田原本町長	下水道	清水・ 奥谷	2010. 6. 24 ～ 7. 7	人孔設置部分 5ヶ所で立会。多集落内の入孔では、時期不明の河跡堆積層等を確認。
8 唐古・鍵 (K-201008)	田原本町唐古 95-1	個人	廻廊の建設	奥谷	2010. 6. 28	屋出地辺に設置する掩埋工事。削削はほとんどなく、地下構造への影響なし。
9 唐古・鍵 (K-201009)	田原本町唐古 255-2 280-1, 282-2	(株) ニッ セツ	フェンス設置	奥谷	2010. 6. 29 ～ 11. 18	フェンス基礎および鋼管杭設置工事。工事は現代土器におさまる。
10 唐古・鍵 (K-201010)	田原本町唐古および鍵 地内	田原本町長	景観美化のため のコスマスの設置	藤田・ 清水・ 奥谷	2011. 7. 6 ～ 10. 16	史跡地内の現状変更。種々前に軌跡を作りが浅く、地下遺構の影響なし。
11 多 (K-201011)	田原本町森谷 72-1 北側道路隣接地帯	田原本町長	下水道	清水	2010. 7. 14	人孔設置部分 3ヶ所で立会。中央の人孔では工事深さまで道筋設置時の埋め戻し土、一部、工事床面付近でぬれ層を確認。
12 繩堂 (K-201012)	田原本町繩堂 285	個人	個人住宅の建築	奥谷	2010. 7. 15	バタ基盤掘削時に立会。削削は 0.1 ～ 0.2m で、表土内におさまる。
13 十六面・薬王寺 (K-201013)	田原本町十六面 48-1	西日本電信 電話(株)	電話地下埋設工 事	藤田	2010. 7. 29	埋設管を確認するための削削。全て客土。
14 宮古北 (K-201014)	田原本町宮古 404-1 南側道路他	田原本町長	下水道	清水	2010. 8. 21	人孔設置部分 2ヶ所で工事立会。地山層を確認。地中遺物包含層。中世軒小構群が存在する可能性が高い。
15 斎手北 (K-201015)	田原本町斎手 273 の 一部	ファースト 住建(株)	分譲住宅の建設	清水・ 奥谷	2009. 9. 3	黒泥け工事。建築基礎部分は 0.1 ～ 0.5m の削削。現土或土。水道工事部分で鉄錆、G.L. - 1m 前後で地山層。
16 十六面・薬王寺 (K-201016)	田原本町十六面 51-1 西側道路他	田原本町長	下水道	奥谷	2010. 9. 9 ～ 10	人孔設置部分 4ヶ所で工事立会。一部、土質質土器細片を含む遺物包含層を確認。
17 小坂綱 長 (K-201017)	田原本町小坂 188	個人	青空駐車場	奥谷	2010. 9. 13	屋出地東側の廻廊・表設置時に立会。G.L. - 0.4 ～ 0.5m で近世軒小構が出土。この直下は中世遺物包含層。さらにはその下に古墳時代後半焼却出面が存在する可能性高い。12月に本調査。
18 十六面・薬王寺 (K-201018)	田原本町十六面 39-1 他	個人	個人住宅の建築	清水	2010. 9. 14	立会時にはコンクリート工事済み。
19 繩堂、中ノ道 (K-201019)	田原本町繩堂 388 東側道路他	田原本町長	下水道	清水・ 奥谷	2010. 9. 17 ～ 10. 13	下水道立設置部分 16ヶ所で立会。多くで初期の堆積層を確認。中世? 蔭 1条を検出。
20 寺内町 (K-201020)	田原本町 610	(株) 都建 設	モデルハウスの 建築	奥谷	2010. 9. 21	建物基礎掘削時に立会。0.1m 前後の削削。現代造成土内におさまる。
21 保津・宮古 (K-201021)	田原本町宮古 327-2, 327-3	個人	個人住宅の建築	清水	2010. 9. 27	立会時には、柱状改良・バタ基礎まで完了していった。
22 保津・宮古 (K-201022)	田原本町宮古 326-16	個人	個人住宅の建築			
23 下ノ道、 唐古北沢御厨定地 (K-201023)	田原本町今里 213-2	個人	個人住宅の建築	奥谷	2010. 10. 4	建物柱状改良工事時に立会。G.L. - 0.6m まで近現代の造成土。その下は灰色砂を多く含んだ近現代堆積土。
24 斎手北、 斎手北塙 (K-201024)	田原本町斎手 187-1 他	名古トーディ ング(株)	物販店舗の建築	清水・ 奥谷	2010. 10. 5 2011. 2. 4	建物裏西 2ヶ所の削削。約 G.L. - 1m まで現代造成土。その直下に旧水田耕土層を確認。
25 斎ノ庄、 法貴寺寄宮前 (K-201025)	田原本町法貴寺 2034	ソフテバン クモバイル (株)	携帯電話無線基 地局の設置	奥谷	2010. 10. 8	電波電気設置工事時に立会。G.L. - 1.6m 前後まで近世以降? の堆積。その直下は何軒堆積か。
26 寺内町 (K-201026)	田原本町 417, 418	個人	共同住宅の建築	奥谷	2010. 11. 1	建物柱状改良工事時に立会。土層を詳細に観察できなかったが、G.L. - 0.6m 前後まで近代造成土。その下は中世遺物包含層か、G.L. - 1m で地山。

27	遺物散布地 〔11-D-0659〕 〔R-201027〕	田原本町大木 274-2 南側道路他	田原本町長	下水道	清水・ 奥谷	2010.11. 4 ～ 11.12	人孔設置部分 11 個の立会。多くで初期川 堆積層を確認。一部、古墳時代前段や縄文、 室町期の遺物包含層を確認。
28	唐古・鍵 〔R-201028〕	田原本町唐古 167-1	個人	畑地の整地	清水	2010.11. 8	畠地の造成時に立会。剝離を作らず地下構造 に影響なし。
29	- 〔R-201029〕	田原本町大網地内	田原本町長	下水道	清水・ 奥谷	2010.11.13 ～ 12.14	別知の遺跡外での下水道工事に立会。一箇、 中近世遺構検出面が残存する。中世層、近世 層を検出。町域開拓を中心とした遺物出土。新 規確認の遺跡として登録をおこなう。
30	保原・宮古 〔R-201030〕	田原本町宮古 224-2 他	個人	個人住宅の建築	清水	2010.11.15	ベタ基礎工事発掘時に立会。0.15m 前後の範 囲であり、現代瓦と土器のみおこなう。
31	東庄 〔R-201031〕	田原本町宮森 28 他 西側道路	田原本町長	道路掘壁	奥谷	2010.12. 6	機械工事時に立会。旧田舎土槽の下に河跡 堆積層。周辺の調査で確認されている弥生～ 古墳時代の例跡に対応。
32	多 〔R-201032〕	田原本町多地内	田原本町長	農業整備基盤事 業（水路の建設）	清水・ 奥谷・ 大谷	2010.12. 6 ～ 3.16	水路の建設時に立会。瓶音堂北西、西辺で は G.L. -0.4m 前後で弥生時代遺物包含層と なり、工事ではこの包含層を 0.1m 前後削除。 中世大溝 3 条、近世 2 条検出。弥生～古 墳時代土器、中近世土器等を出土。
33	常楽寺推定地、 宮古石橋 〔R-201033〕	田原本町宮古地内	近畿農政局 大和郡平 野農業水利 事務所長	農業用管水路の 建設	清水・ 奥谷	2010.12. 7 ～ 12.18	水路管の建設工事時に立会。常楽寺推定地の 調査範囲内で中世 3 条検出。中世管片出土。 その裏側は範囲外では、時期不明の土 坑 1 基と河跡 1 条を検出。
34	羽子田 〔R-201034〕	田原本町新町 80-1	個人	個人住宅の建築	奥谷	2010.12.17	建物柱改良工事時に立会。1 m 以上の現代 柱。
35	日光寺推定地 〔R-201035〕	田原本町千代 1122-3	ソフトバン クモバイル （株）	携帯電話無線基 地局の建設	奥谷	2010.12.27	携帯電話無線電柱の設置工事時に立会。G.L. -0.5m 前後まで現代造出土、これ以下も近 現代造出土か。オーバー掘削のため詳細不明。
36	唐古・鍵、 まきば山推定地 〔R-201036〕	田原本町唐古 62-1	ソフトバン クモバイル （株）	携帯電話無線基 地局の建設	奥谷	2010.12.27	携帯電話無線電柱の撤去と新設工事に立 会。オーバー掘削と地中配管により土壤破 壊できます。
37	唐古・鍵 〔R-201037〕	田原本町鍵地内	田原本町長	避難公園整備の ための造成工事	藤田・ 清水・ 奥谷	2011. 1. 8 ～ 3.29	史跡地内の現状変更。唐古南側に厚さ 0.8 ～ 1.0 m の盛土造成工事、地下掩構への影響な し。
38	唐古・鍵、 まきば山推定地 〔R-201038〕	田原本町唐古 57-1	個人	住宅敷去	藤田	2011. 1.14 ～ 1.18	史跡地内の工事、住宅の地下室敷去に立会。 地下室の壁は除み、床面は地下掩構をつける るおそれがあつたため削除せず、2 m 以上現 代客土をし確認。山側で認め戻す。
39	小里中隣接地 〔R-201039〕	田原本町小坂 216-1 南側道路	-	下水道	奥谷	2011. 1. 19	届出なし。下水道引き込み管の新設工事。 工事深度まで現代の造出土及び埋植上。
40	羽子田 〔R-201040〕	田原本町新町 80-5、 208-10	個人	個人住宅の建築	奥谷	2011. 1. 26	柱状改良工事時に立会。G.L. -0.8m まで現 代造成土。それ以上は旧田舎土。
41	保原園地、 保原・宮古 〔R-201041〕	田原本町保原 132 他 北側水路	田原本町長	水路の改修	清水	2011. 1.26 ～ 2.14	保原園地調査第 2 回調査。工事は近世～現 代大溝におこなう。
42	東栄寺 〔R-201042〕	田原本町東栄 278-2 南側道路	田原本町長	下水道	奥谷	2011. 2. 7	下水道埋設の開削工事時に立会。G.L. -0.9 m まで近世道路造成土。その下に東西方向の 中世大溝、大溝上面から井筒質泥炭片や瓦質 土器、青銅鏡片出土。
43	阪手北 〔R-201043〕	田原本町阪手 304-3 他 南側水路	田原本町長	水路の改修	藤田・ 清水	2011. 2. 23	現代水路内、開削工事時に立会。工事は近代 ～現代大溝内におこなう。一部、地山の黒色 粘土層あり。
44	佐安 〔R-201044〕	田原本町佐安 186-1 北側道路	田原本町長	道路の拡幅	清水	2011. 2. 24	道路拡幅工事に伴う U 字構造設置工事時に立会。 工区西端は市町時代大溝もしくは河跡か。工区 中央から外生帶へ中期土器片出土。遺物包含 層が認かる可能性あり。
45	唐古・鍵 〔R-201045〕	田原本町鍵 248-3	個人	仮設工作物の撤 去・新築の伐採	藤田	2011. 3. 8 ～ 3.12	史跡地内の現状変更。樹木は撤去をおこなわ ず地上部分で伐採される。仮設建物・タンク・ 鋼管等。地下掩構に影響なし。
46	丹波山、 唐古・鍵 〔R-201046〕	田原本町法貴寺 1083-2	倉庫原地土 地改良区	水路の改修	奥谷	2011. 3.14	既存水路の擁壁の整去及び改修工事。工事深 度は水田面より上で、現代盛土？内におこな る。



II. 資料の整理と活用・普及

1. 文化財資料の整理・保管

(1) 埋蔵文化財の整理・保管

平成22年度の発掘調査と工事立会に伴い保管した埋蔵文化財は、遺物コンテナ約44箱とナイロン袋他である。遺物量は前年度より約80箱少ない。これは、調査件数が少なく、かつ小規模な調査であったためである。本年度の調査では、弥生・古墳時代遺跡の多遺跡第24次調査と小阪細長遺跡第2次調査、中世集落の保津・宮古遺跡第38次調査で出土したものが大半である。

平成21年度（11月～）に実施した秦楽寺遺跡第4次調査で出土した玉作り関係遺物の玉の選別作業は平成22年度に引き続き、緊急雇用創出事業として実施し、4月から6月までの3ヶ月間おこない完了した。この結果、勾玉・管玉・丸玉・臼玉・有孔円板等の製品と未成品6,095点を選別確認した。この事業では、この他唐古・鍵遺跡の再整理事業もおこなった。唐古・鍵遺跡第20・22次調査で出土した土器類を整理し、搬入土器や特殊土器などをピックアップし、登録した。この土器類の再確認では、新たに絵画土器の一部や分銅形土製品と考えられる遺物を確認した（IV. 資料の報告2参照）。また、未選別であった唐古・鍵遺跡第51次調査の井戸SK-104の一部土壤の選別もおこなった。この選別作業では、水晶玉1点を確認している。これらの再整理事業では、土器を再収納することにより遺物箱をかなり減らすことができた。

この他、平成21年度に調査をおこなった多遺跡第22次調査の遺物整理も実施し、その成果を第IV部に掲載した。

【埋蔵文化財保管数】

調査番号	遺跡名	調査次数	遺物明細	遺物量	
				現場後	洗浄後 (土器・瓦)
H22-01	並幹山古墳群	第9次調査	弥生土器・土師器・須恵器・瓦質土器・近世陶磁器等	1箱	1箱
H22-02	保津・宮古遺跡	第38次調査	土師器・須恵器・瓦器・輸入磁器・近世陶磁器・瓦・木製品等	24箱	8箱
H22-03	多新堂遺跡	第5次調査	土師器・須恵器・瓦質土器・近世陶磁器・木製品等	4箱	2箱
H22-04	小阪細長遺跡	第2次調査	弥生土器・土師器・須恵器・埴輪・瓦・木製品等	18箱	16箱
H22-05	多遺跡	第23次調査	土師器・須恵器・瓦器等	1箱	1箱
H22-06	保津環濠遺跡	第2次調査	土師器・近世陶磁器・瓦等	6箱	6箱
H22-07	多遺跡	第24次調査	弥生土器・土師器・須恵器・瓦器・瓦質土器・石器等	20箱	10箱
R-201027	大木遺跡	工事立会	土師器・瓦器・近世陶磁器等	1箱	5袋（大・小）
R-201029	大網遺跡	工事立会	土師器・瓦器・瓦質土器・木製品等	1箱	6袋（小）
R-201030	多遺跡	工事立会	弥生土器・土師器・瓦器・瓦質土器・瓦等	2箱	1箱
R-201033	常楽寺推定地	工事立会	土師器・瓦器・瓦質土器・近世陶磁器	1箱	3袋（小）
R-201042	秦楽寺遺跡	工事立会	土師器・瓦質土器・輸入磁器	1箱	1袋（中）
R-201044	佐味遺跡	工事立会	弥生土器・土師器・須恵器・瓦質土器・瓦・石製品等	1箱	2袋（中・小）

*遺物量の表記の箱とは、長さ56cm・幅36cm・深さ15cmの容量を標準として換算している。また、袋（小・中・大）は、ナイロン袋の小・中・大の大きさを表している。

【保管遺物種と数量】

調査番号	遺跡名	調査次数	土製品	焼土塊	木製品	石製品	骨製品	金属器	鉄貨	ガラス	木	石	獣骨・貝	種子	炭化米
H22-01	伊豫山古墳群	第9次調査	-	-	-	-	-	-	-	-	8	-	-	-	-
H22-02	保津・宮古遺跡	第38次調査	3	7	70	11	-	9	-	-	50	44	124	-	-
H22-03	多新堂遺跡	第5次調査	1	2	14	7	-	1	-	-	7	5	126	-	-
H22-04	小阪郷長遺跡	第2次調査	-	14	9	2	-	-	-	-	1	4	3	-	-
H22-05	多道跡	第23次調査	1	-	1	-	-	1	-	-	-	1	1	-	-
H22-06	保津環濠道路	第2次調査	-	-	3	7	-	4	-	-	11	2	50	-	10
H22-07	多道跡	第24次調査	5	27	9	○	1	-	-	-	5	22	77	13	12
R-201029	大網遺跡	工事立会	-	-	1	-	-	-	-	-	8	-	-	-	-
R-201032	多道跡	工事立会	-	1	-	41	-	-	-	-	-	3	1	1	-

※少量遺物は、複数次あるいは複数遺路をまとめて分別収納しているため、コンテナ量で表すことができないので、有(○)無(-)で示した。また、数量は点数であるが、□内の数字はコンテナ量である。

木器の保存処理事業は、高級アルコール法による処理委託で平成19年度に出土した十六面・薬王寺遺跡第24次調査の木棺の身と蓋を平成21・22年の2ヶ年継続でおこなった。この他、第21次調査で出土した中世の円形曲物3点（井戸枠軸用品JRY-021-00021W・00025W・00028W）と宮古北遺跡第15次調査から出土した円形板状の用途不明木製品2点（MKK-015-00006・00008W）もおこなった。

直営では、秦楽寺遺跡第4次調査で出土した中世の井戸に転用された桶の板材等をラクチトールによる保存処理方法（下表）でおこなった。

【直営ラクチトールによる保存処理木製品】

遺跡名	調査次数	製品コード	製品名	点数
唐古・鍾遺跡	第47次	KRK-047-10002W	原材	1
唐古・鍾遺跡	第53次	KRK-053-00017W	鳩脚	1
唐古・鍾遺跡	第93次	KRK-093-00019W	板材	1
阪手東遺跡	第2次	STH-002-00001W~00005W	丸太杭	5
阪手遺跡	第5次	SKT-005-00001W~00011W	丸太杭	11
十六面・薬王寺遺跡	第21次	JRY-021-00051W~00066W	円形・方形曲物底板	16
秦樂寺遺跡	第4次	JNR-004-00003W	板組井戸枠軸板	22
羽子田遺跡	第31次	HGT-031-00019W~00023W	用途不明品	5

(2) 図面・写真的保管と資料撮影、写真的デジタル化

発掘調査に伴う現場写真と図面については、下表のとおりである。また、写真撮影は町内の各遺跡から出土した木製品や企画展・ミニ展示に伴う遺物の撮影をおこなった。また、唐古・鍵考古学ミュージアムの企画展関連遺物と新規町指定文化財である補巖寺開山支派の写真デジタル化をおこなった。

【図面・写真的保管数量】

調査番号	道路名	調査次数	図面		35mm			
					カラーボジ		モノクロネガ	
			現場	遺物	シート数	コマ数	シート数	コマ数
H22-01	笠鉢山古墳群	第9次調査	5	0	4	64	2	64
H22-02	保津・宮古遺跡	第38次調査	9	0	5	100	3	100
H22-03	多新堂遺跡	第5次調査	12	11	11	218	7	220
H22-04	小阪細長遺跡	第2次調査	17	0	10	200	6	206
H22-05	多遺跡	第23次調査	2	0	1	20	1	22
H22-06	保津環濠遺跡	第2次調査	3	0	2	39	1	40
H22-07	多遺跡	第24次調査	13	0	9	169	5	169
計			61	11	42	810	25	821

【写真撮影一覧】

種類	資料名・内容	フィルム (4×5)	カット数	備考
考古遺物	唐古・鍵遺跡 木製品（斧柄ほか） 羽子田遺跡 木製品（用途不明木製品ほか） 多遺跡 木製品（歯未完成？）	カラーボジ モノクロネガ	1 24	報告書用
	唐古・鍵遺跡 木製品（蓋形木製品ほか）・絵画土器 笠鉢山1号墳 須恵器（大甕）			
	笠鉢山2号墳 木製品（笠形木製品） 黒田大塚古墳 木製品（鳥形木製品）			
	羽子田遺跡 墳輪（円筒埴輪ほか） 十六面・豪王寺遺跡 土師器（弧文壺ほか）	カラーボジ	26	春季企画展
	多遺跡 弥生土器（搬入土器ほか）・土師器 小阪細長遺跡 土師器・土製品（鳥形土製品）			
	保津環濠遺跡 陶器（灯火具ほか）			
	秦楽寺遺跡 土器・陶磁器・石製品（玉類ほか）	カラーボジ	16	夏季ミニ展示
	補巖寺 石造物・建造物（山門ほか）	カラーボジ	6	
	補巖寺開山支派	カラーボジ	12	町指定文化財
	計	カラーボジ モノクロネガ	61 24	

(3) 図書の受領

平成22年度は、文化財保存課と唐古・鍵考古学ミュージアムに関係諸機関・個人（308機関等）から996冊の図書の寄贈を受けた。また、図書の購入は13冊である。

【受領図書】

分類	報告書	概報	現況資料	年報	館報	図録	パンフレット	紀要	会報
冊数	488(1)	79	2	77(1)	14	52	57	50	2
分類	論文集	たより	発表資料	単行本	雑誌	目録	その他	合計	
冊数	9(1)	82	7	11	12	9	45(3)	996	

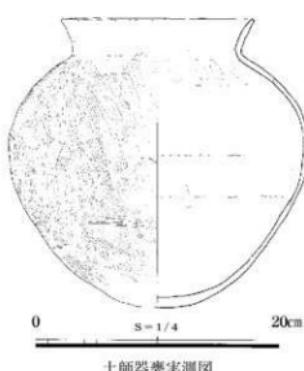
*上記冊数には、2部以上の寄贈111冊を含んでいない。※()の数字は、CD-ROM 3枚、DVD 3枚の枚数である。

(4) 資料の寄贈

平成22年度は、下記資料1件の寄贈を受けた。

資料名	登録番号	法量等	寄贈者	備考
土師器壺	MP-古墳-0047 AAA-000-00001PK	器高 23.7cm、口径 16.0cm、胴部径 24.5cm	山本重敏	伝今里出土

平成22年5月、西代在住の山本重敏氏から、土器について寄贈の申し込みがあったので受贈した。本品は、古墳時代中期頃の土師器壺で、器高23.7cm、口径16.0cm、胴部径24.5cmを測る。口縁部はやや短く外反気味に整形される。胴部は丸底で、上半が最大径となる倒卵形である。外面は縦方向のハケ仕上げ、内面は浅い削りとナデ仕上げられている。底部付近には指頭圧痕が残る。完形品であり、器面の残存も極めて良好であった。外面全体に煤が付着し、煮沸に使用されたことが判る。



山本氏によると、本品は氏の父が「60年以上前に田原本町大字今里の畑地付近（小字西ノ辻37番付近）で溝を掘削していた時に出土したらしい」との説明を受けた。実際に現地を確認すると、当該土地は一段高い島畑状となっていたが、周囲では顕著な遺物の散布は確認できなかった。

寄贈された壺の内面には緻密な灰色系の粘土が若干付着していた。この遺物が埋没していた時の周辺の堆積土であるとみられる。田原本町周辺でこのような堆積土となるのは、井戸の下層など當時水を湛えるような遺構内などである。このことから、畑地内で溝を掘った時の出土品という寄贈者の伝聞には若干の疑問がないわけではない。ただし、入手してから相当の年月が経過しており、入手した本人も既に亡くなっている現状では、これ以上本品の出土状況については確認する手段をもたない。最も近い周知の埋蔵文化財包蔵地としては、西代西遺跡や下ツ道があるが、実態は不明である。また、本品の製作された時期に存続している集落遺跡としては唐古・鍵遺跡が地理的に近いが、今里付近に当該時期の未発見の集落が存在する可能性も否定できない。

いずれにしても、古墳時代中期の土師器壺の完形品としては優品であり、今回受贈をうけて末永く本町の文化財として保存・活用したい。

なお、本品の出土地とされる今里の畑地を周知の埋蔵文化財包蔵地として登録することは、上記の疑問点があることから当面保留したい。今後もし遺物の散布が確認されたり、工事時の立会などで新たに遺跡の所在が確認されれば、その時改めて遺跡としての登録手続きをおこなうこととする。



出土伝承地現況（北から）



出土伝承地位置図 ($S = 1/10,000$)

2. 遺跡・文化財の保護

(1) 史跡の追加指定

唐古・鍵遺跡は、平成11年1月27日、唐古池を中心とする範囲の98,957.73m²（159筆）について国の史跡指定を受けた。また、平成14年12月19日には、鍵地区において検出した弥生時代中期初頭の大型建物を含む1,857.93m²（鍵248番2他7筆）を、平成20年3月28日には1次指定を受けた南端の一部と平成14年の追加指定を受けた土地の東側隣接地442.18m²について、追加指定を受けた。平成22年8月には、指定範囲南西の一角432.52m²（鍵248番3・1筆）について追加指定を受けた。この結果、唐古・鍵遺跡の指定面積は、102,614.5m²になった。

平成22年度の公有化は、643.25m²で、全公有化面積は約98%となった（唐古池、里道、水路除く）。

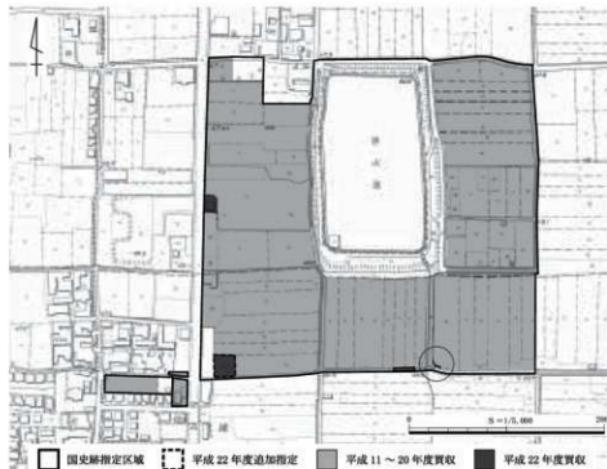
【史跡の指定面積】

平成10年度 指定	平成14年度 追加指定	平成20年度 追加指定	平成22年度 追加指定	合 計*
98,957.73m ²	1,857.93m ²	442.18m ²	432.52m ²	102,614.5m ²

* 合計面積は、一部実測により誤差が生じている。

【史跡の公有化面積】

平成11～20年度	唐古 50番2 鍵 225番1	ほか計78筆 ほか計51筆	69,375.80m ²
平成22年度	唐古 57番1	ほか計3筆	643.25m ²
合 計		計132筆	70,019.05m ²



唐古・鍵遺跡の指定地状況

(2) 町指定文化財

平成22年度において、下記文化財の古文書1件（5冊）を田原本町文化財保護審議会に諮問した。当審議会の答申を受け、町の指定文化財として台帳に登録した。これで町指定文化財は、5件となつた。

【田原本町文化財保護審議会 委員】

分野	氏名	備考
建築	林 清三郎	委員長
考古学	石野 博信	
考古学	寺澤 薫	

分野	氏名	備考
歴史	和田 萬	
歴史	谷山 正道	
彫刻	鈴木 喜博	

【町指定文化財一覧】

台帳番号	種別	名称及び員数	所有者	時代	指定年月日
1	有形文化財 (考古資料)	「櫻閣」が描かれた土器片 3点 唐古・鍵遺跡第47・77次調査出土	田原本町	弥生時代(中期)	
2	有形文化財 (考古資料)	翡翠製勾玉と鳴石容器(蓋付) 一式 唐古・鍵遺跡第80次調査出土 1. 翡翠製勾玉 2点 1. 鳴石容器 1点 1. 容器蓋(土器裏片) 1点	田原本町	弥生時代(中期)	平成20年 3月24日
3	有形文化財 (彫刻)	木造十一面觀音立像 一軒	法貴寺 自治会	室町時代 (天文10年/1541年)	
4	有形文化財 (古文書)	平野権平(長泰) 宛豊臣秀吉感状 1. 平野権平宛羽柴秀吉判物 (天正十一年六月五日) 折紙1通 2. 平野権平宛豊臣秀吉朱印状 (文禄四年八月十七日) 折紙1通 附 収納箱 内箱・外箱 包紙(2枚有り)	福岡洋介	1. 安土桃山時代 (天正11年/1583年) 2. 安土桃山時代 (文禄4年/1595年)	平成20年 12月17日
5	有形文化財 (古文書)	寶陀山補巌揮寺納帳 1. 寶陀山補巌揮寺納帳 その1 2. 寶陀山補巌揮寺納帳 その2 3. 寶陀山補巌揮寺納帳 その3 4. 寶陀山補巌揮寺納帳 その4 附 補巌揮寺開山支派	補巌寺	1. 室町時代 (明応7年/1498年) 2. 室町時代 (大永末年頃) 3. 室町時代 (永禄末年頃) 4. 室町時代 (元亀3年/1572年) 附 江戸時代 (享保7年/1722年)	平成22年 12月22日

寶陀山補巖禪寺納帳

種 別 有形文化財（古文書）

名称及び員数 「寶陀山補巖禪寺納帳」 四冊

附「補巖禪寺開山支派」一冊

所 在 地 磐城郡田原本町大字味間847番

所 有 者 補巖寺

所有者の住所 磐城郡田原本町大字味間847番

寸 法 「寶陀山補巖禪寺納帳」

その1 縦31.9cm・横21.3cm

その2 縦31.5cm・横25.2cm

その3 縦31.0cm・横25.1cm

その4 縦30.7cm・横24.8cm

附「補巖禪寺開山支派」

縦30.1cm・横18.9cm

時 代 「寶陀山補巖禪寺納帳」 室町時代

附「補巖禪寺開山支派」 江戸時代

品質・形状 「寶陀山補巖禪寺納帳」 袋綴装

その1 40紙、その2 41紙、その3 42紙、その4 45紙

附「補巖禪寺開山支派」 袋綴装 11紙

修補・損傷等 渋茶表紙後補。その4は原表紙を残すが、その1～3は欠。また、その2は末尾1丁欠。いずれも虫損があり、その2には四周に焼焦痕があるが、昭和37年に附「補巖禪寺開山支派」とともに裏打補修と表紙が付けられた。また、両者は軒にそれぞれ入れられ、桐箱に収められている。

説 明 補巖寺の納帳は寺領の土地台帳で、田地の収納高もわかる資産帳である。納帳その1は明応7年（1498）、その2は永永末年頃、その3は永禄末年頃、その4は元亀3年（1572）に書写されたもので、田原本町では数少ない中世文書であり、町内東南部の当時の様相を伝えると共に、能楽の大成者であった世阿弥の消息をも伝えるものとして、まことに貴重である。

附の「補巖禪寺開山支派」（享保七年（1722）写）1冊によれば、補巖寺は至徳元年（1384）に了堂真覚によって開山された、曹洞宗の大寺院であった。納帳にみえる田畠・屋敷地は約45町歩に及び、その所在地は十市郡を中心に城上・城下郡にも及んでいる。田畠の記載事項の内に、十市氏歴代の年忌田がみえることから、補巖寺は十市氏の菩提寺であったことがわかる。

田畠等については、作主の名前のはかに村落や小字の名称を記載しており、現在の小字名と比較することで、所在地を確定できるものが多く、まことに有用である。

補巖禪寺納帳の存在は、かねてから大和の中世史研究者に知られていたが、能

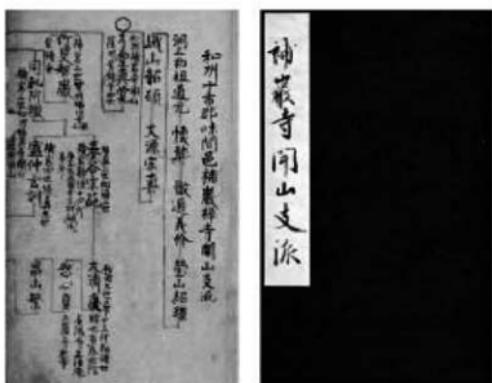
楽研究者により、世阿弥から金春大夫（禪竹）に宛てた書状にみえる「ふかん寺」は、田原本町味間の補嚴寺であることが突き止められ、さらに納帳に「至翁禪門（世阿弥の法号）八月八日」「寿椿尼（世阿弥の妻）」の記載があることが判明し、世阿弥夫婦が補嚴寺で永く菩提を弔われたことが明らかになった。

世阿弥の芸論に、禅林字句の引用が多く、補嚴寺第2世の竹叟智嚴について参禅して、多大の影響を受けたと推察される。至翁禪門の忌料として補嚴寺に寄進された味間領の「字スチカ井 東ノハ」の一段は、今も存在している。また、補嚴寺とその周辺地域には、中近世の石造物が散在しており、今後、補嚴寺について、総合的な調査・研究が望まれる。

以上のことから本史料は、本町にとってまことに貴重な価値の高いものといえる。



寶陀山補嚴禪寺納帳



附 補嚴禪寺開山支派



「至翁押門」(世阿弥)



「寿椿尼」(世阿弥の妻)

「至翁押門」「寿椿尼」の記載



「来迎」



「カキノモリ」

消滅した地名「来迎」「カキノモリ」

3. 講 座

成人向けの講座として、考古学実践講座の講演を3回開催した。また、小中学生向けの体験講座を夏と冬に、親子参加体験イベントを秋に開催した。

【考古学実践講座】

実施日	内 容		講 師	受講者数
9月25日（土）	大和の弥生集落研究 最前線	東大寺山古墳とその周辺	天理大学 桑原 久男 氏	21名
10月16日（土）		中平銘鉄刀と 東大寺山古墳の時代		33名
11月27日（土）		葛城地域における 弥生時代水田遺構について	奈良県立橿原考古学研究所 米川 裕治 氏	32名
3日間	3講演			86名

考古学実践講座では、大和の弥生集落研究最前線と題し、弥生時代を中心とした県内の最新情報についての講演を、講師を招いて実施した。

9月25日の講演では、報告書が刊行されて間もない天理市東大寺山古墳と、出土した中平銘鉄刀について解説があった。中平銘鉄刀をはじめとした出土品や古代豪族和邇氏との関わりが注目される重要な古墳でありながら、風致地区に指定されておらず、そのため開発工事などにより古墳の損傷や周囲の歴史的景観が損なわれている点から、遺跡保護について力説された。

10月16日には前回の講演を引き継ぐ形で、弥生時代中期から東大寺山古墳の時代に至る流れを講演された。特に地域の関係と交通ルートに着目され、土器や金属製品の輸送経路から当時の交通背景に迫り、中平銘鉄刀等の鉄製品は日本海を通じて運び込まれたという説を提示された。

11月27日の講演では、京奈和自動車道の建設に伴う発掘による御所・葛城地域の調査成果が解説された。水田の調査は生産に関わる集落研究の一つであり、この地域では中西遺跡・今出遺跡など複数の調査成果より、区画の変化から捉えた水田の形式的変遷に触れられた。また、これらの成果は広大な調査区を一括して発掘できたためであり、大規模な発掘調査により広大な面積の遺構を統括的に把握する重要性を説かれた。



桑原 久男 氏 講演



桑原 久男 氏 講演



米川 裕治 氏 講演

【チャレンジ子ども弥生探検隊】

実施日	内 容	会 場	参加者数
7月21日（水）	体験講座	埴輪をつくろう	陶芸室・工作室 親子 52名
8月5日（木）		埴輪をつくろう	陶芸室 親子 26名
8月11日（水）		勾玉をつくろう	陶芸室・工作室 親子 54名
12月12日（日）		樓閣くんのスタンプをつくろう	会議室 27名
11月27日（土）	弥生生活体験 イベント	お米の脱穀・赤米炊飯・火熾し	唐古・鍵遺跡現地 親子 26名
5日間	7 メニュー		185名



埴輪をつくろう



勾玉をつくろう



樓閣くんのスタンプをつくろう



弥生生活体験イベント

4. 学校教育等への支援

(1) 小学校出前授業

町内小学校から依頼を受け、総合的学習の時間及び社会科等の授業として、以下内容の出前授業をおこなった。これらの児童の作品や学習成果は、2月に開催した「田原本町内小学校の総合的な学習展示会」にて公開し、248名が観覧した。

【出前授業】

実施日	学校・学年	児童数	内容
4月28日(水)	北小学校 6年	2クラス(37名)	ミュージアム見学
5月27日(木)			勾玉づくり
6月4日(金)			火鉢し・赤米炊飯・脱穀
10月7日(木)			土器づくり
11月26日(金)			土器の野焼き
6月1日(火)	東小学校 6年	1クラス(18名)	火鉢し・赤米炊飯
10月28日(木)			勾玉づくり
6月11日(金)	南小学校 6年	2クラス(54名)	ミュージアム見学・勾玉づくり
10月15日(金)			土器づくり
11月19日(金)			火鉢し・土器の野焼き
5月7日(金)	平野小学校 6年	2クラス(47名)	ミュージアム見学
6月14日(月)			勾玉づくり
10月4日(月)			土器づくり
11月30日(火)			火鉢し・土器の野焼き
4月16日(金)	田原本小学校 6年	4クラス(110名)	ミュージアム見学
5月20日(木)			火鉢し・赤米炊飯
5月27・28日(木・金)			土器づくり
7月8日(木)			土器の野焼き
19日間		11クラス(延べ1,121名)	メニュー延べ26



小学校出前授業（田原本小学校）



小学校出前授業（南小学校）

(2) 中学校職場体験学習

中学生の職場体験学習として、田原本中学校・北中学校の生徒を受け入れ、文化財保存課と唐古・鍵考古学ミュージアムで体験学習を実施した。

【体験学習】

期 間	学 校 名	内 容	人 数
11月9・10・11日	田原本中学校	土器洗浄・遺物選別・石器の整理・土器拓本・ミュージアム受付	4名
11月14・15・16日	北中学校		4名
6日間	2学校	延べ10メニュー	延べ24名

(3) 大学の学外授業

奈良大学の通信教育の課外授業として、4回受け入れ、下記内容の授業をおこなった。

【学外授業】

実 施 日	内 容	人 数
7月18日（日）		100名
8月28日（土）	奈良大学 通信教育課程「文化財学講読Ⅱ」 唐古・鍵遺跡の現地説明	50名
2月12日（土）	唐古・鍵考古学ミュージアムの概要説明・展示品解説	40名
3月12日（土）		40名
4日間		計230名



中学校職場体験学習（北中学校）



奈良大学通信教育

(4) 講師の派遣

前記以外に、教育委員会等の事業として下記のとおり職員を派遣した。

実施日	講座名等	演題	講師
6月12日（土）	市民大学講座 第248回 (帝塚山大学考古学研究所附属博物館)	唐古・鍵遺跡と大和の弥生時代	藤田 三郎
6月18日（金）	郷土の歴史教室（生涯教育課）	唐古・鍵遺跡と大和の弥生時代	藤田 三郎
7月24日（土）	大和を掘る28 土曜講座 (奈良県立橿原考古学研究所)	多遺跡	清水 琢哉
11月11日（木）	WATERING NARA フォーラム（奈良県水道局）	地域で育む健全な水循環 (パネルディスカッション)	藤田 三郎
11月12日（金）	郷土の歴史教室（生涯教育課）	古墳時代の田原本について	奥谷 知日朗
11月20日（土）	発掘された明石の歴史展「明石の弥生人」 関連シンポジウム（明石市立文化博物館）	明石周辺の弥生時代 (パネルディスカッション)	藤田 三郎
1月29日（土）	橿原考古学研究所所長トーク 「菅谷館長と語る！ 邪馬台国」 (奈良県立橿原考古学研究所)	唐古・鍵遺跡と邪馬台国	藤田 三郎

5. 刊行物一覧

本年度は、下記3点の書物を印刷した。

【刊行物名】

書籍名	発行日	部数	内容
唐古・鍵考古学ミュージアム 夏季ミニ展示図録『秦楽寺遺跡』	2009年8月	1,500部	古墳時代の玉作りや中世の城跡など、秦楽寺遺跡の調査成果を紹介
唐古・鍵考古学ミュージアム 秋季企画展図録『道の考古学』	2009年10月	3,000部	都がおかれた奈良盆地を中心に発達した古代道路と人・物の流れについて紹介
『田原本町文化財調査年報19 2009年度』	2010年3月	700部	平成21年度の文化財事業の報告

なお、印刷発注はおこなわなかったが、後述の展示解説シートを作成し、唐古・鍵考古学ミュージアムのホームページ「刊行物案内」のコンテンツに追加した。

春季ミニ展示解説シート

『たわらもと発掘速報展2010 羽子田1号墳の新知見』(2010年4月)

『たわらもと発掘速報展2010 朱の精製に使われた古墳時代初頭の土器』(2010年4月)

『たわらもと発掘速報展2010 多神社隣接地で出土した古代の鏡』(2010年4月)



6. 資料の活用

(1) 資料の貸出

平成22年度は、11機関に延べ10遺跡102点の遺物等を貸出した。貸出内容は、唐古・鍵遺跡の出土品が大半である。また、文化庁主催の『発掘された日本列島2010展』へ長期貸出があった。

【資料貸出一覧】

貸出先／展覧会名／期間	遺跡名	資料名	点数
文化庁／『発掘された日本列島2010展』 平成22年6月5日～7月25日（東京都江戸東京博物館）／平成22年8月3日～9月5日（青森県立郷土館）／平成22年9月14日～10月11日（多賀城市立埋蔵文化財センター）／平成22年10月22日～11月19日（大分県立歴史博物館）／平成22年11月27日～12月23日（香川県立ミュージアム）／平成23年1月12日～2月28日（大阪歴史博物館）	唐古・鍵遺跡	石製銅鋤鋤型1・土製銅鋤鋤型外枠6・土製武器鋤型外枠6・土製不明鋤型外枠1・高环形土製品3・送風管5・土製銅鋤鋤型（復元品）1・砥石3・銅鏡2・銅鏡1・銅鏡片1・鞘入石劍1・鞘入石劍（鞘）（レプリカ）1・石劍1・石劍3・馬頭形土製品1・翡翠製勾玉1・翡翠製丸玉1・広口壺1・器台1・異形高环1・横闇が描かれた土器片3・繪画土器3・繪画土器片4・弧帶文が描かれた土器2・記号土器2	56
九州国立博物館／『馬 アジアを駆けた2000年』 平成22年7月13日～9月5日	筑前山2号墳	馬形埴輪1・馬曳き人物埴輪1	2

出雲弥生の森博物館／『弥生人の彩エンス—出雲王が愛した色』 平成22年7月17日～9月20日	唐古・鍵遺跡	水晶玉3・褐鉄鉢容器（レプリカ）1・褐鉄鉢容器蓋（レプリカ）1・翡翠製勾玉（レプリカ）2	7
吉野ヶ里歴史公園／『よみがえる駆馬団～後人伝の証明 吉野ヶ里と櫛向～』 平成22年10月2日～11月28日	唐古・鍵遺跡	褐鉄鉢容器1・褐鉄鉢容器蓋（土器片）1・翡翠製勾玉2・模様が描かれた絵画土器（レプリカ）3	7
奈良県立橿原考古学研究所附属博物館／『常設展示』 平成22年6月17日～平成23年3月31日	唐古・鍵遺跡	石製銅鋒型1・土製武器鋒型外枠1・高環形土製品2	4
奈良県立橿原考古学研究所附属博物館／『大和を掘る28』 平成22年7月17日～9月5日	羽子田1号墳	円筒埴輪2	10
	多造跡	銅鏡1・弥生時代土器3・古墳時代土器4	
奈良県立橿原考古学研究所附属博物館／『十二支の考古学—卯—』 平成22年12月11日～平成23年1月22日	唐古・鍵遺跡	ウサギ骨1・小型臼2・堅杵1・臼（レプリカ）1・堅杵（レプリカ）1	6
奈良県立橿原考古学研究所附属博物館／『埴輪のはじまり—大和の特殊器台とその背景—』 平成23年1月18日～3月31日	唐古・鍵遺跡	弧帶文臺1・弧帶文瓶臺2・弧帶文瓶器台1・臺（籠の絵画）1	5
尼崎市立田能資料館／『弥生の集落』 平成23年3月8日～3月27日	唐古・鍵遺跡	木製品未成品5	5
11機関／延べ会期間日数	871日	延べ10遺跡	102点

【種別による貸出点数】

土器	埴輪	土製品 焼土	石器	木器	金属器	骨角器	ガラス	骨・貝	種・穀物	レプリカ 模型	総点数
30	4	25	17	8	6	0	0	1	0	11	102点

【資料の継続貸出】

貸出先／展示名／期間	道跡名	資料名	点数
香芝市二上山博物館 常設展示 【貸出期間】平成21年4月1日～平成22年3月31日	唐古・鍵遺跡	弥生土器壺・甕・高环・槍先形石器	4点
大阪府立弥生文化博物館 常設展示 【貸出期間】平成21年4月1日～平成22年3月31日	唐古・鍵遺跡	土弾	3点
2件	延べ2遺跡		7点

(2) 写真掲載・撮影

写真的貸出及び掲載（転載含む）は48件199点であった。写真掲載の内容は、唐古・鍵遺跡の出土遺物や唐古・鍵考古学ミュージアムのエントランス、館内展示風景の利用度が高い。

【写真掲載・撮影一覧】

貸 出 先	掲 載 書 籍	名称（遺跡名）	資 料 名	点数
九州国立博物館	図録『馬 アジアを駆けた二千年』	筑鉢山2号墳	馬形埴輪・馬曳き人物埴輪	2
北井利幸	『FUSUS』Vol.3	唐古・鍵遺跡	铸造実験に使った道具・鉱滓	2 (転載)
桶渡俊男	個人HP掲載	唐古・鍵遺跡	大型建物の柱・弥生人復願模型・木製轡・弥生の食展示風景・絵画土器・褐鉄鉢容器と翡翠製勾玉・糸を拂る展示風景・唐古・鍵遺跡調査地点図	16
千葉県立中央博物館	図録『箕—その世界—』	唐古・鍵遺跡	箕出土状況	1
寺前直人	「武器と弥生社会」	唐古・鍵遺跡	石棒片実測図	1
大阪府立弥生文化博物館	図録『MASK—仮面の考古学—』	清水風遺跡	絵画土器	2
出雲弥生の森博物館	図録『弥生人の彩エンスー出雲王が愛した色』	唐古・鍵遺跡	翡翠製勾玉・広片口鉢	2
千葉県教育振興財團	図録『房総発掘ものがたり』	筑鉢山1号墳	馬曳き人物埴輪	3
		羽子田遺跡	人物埴輪	
		唐古・鍵遺跡	手焙形土器	
小学館	『ビジュアル版 逆説の日本史』	唐古・鍵遺跡	復元楼閣	2 (転載1)
	『Jr.日本の歴史』第1巻 国のなりたち	唐古・鍵遺跡	楼閣が描かれた土器片	
奈良県立橿原考古学研究所友史会	友史会遺跡地図シート18 『田原本周辺の遺跡』	筑鉢山2号墳	馬形埴輪・馬曳き人物埴輪	3 (転載)
		羽子田遺跡	牛形埴輪	
愛知県津島市蛭間小学校	『津島の達人』歴史検定ジュニア版公式テキスト 尾張津島見聞録	個人蔵	平野権平（長泰）宛敷臣秀吉感状	1
檜書店	『觀世』6月号	補嚴寺	寶陀山補嚴寺納帳	2
奈良テレビ放送㈱	DVD『はじめりの奈良から未來へ（仮）』	唐古・鍵遺跡	唐古・鍵遺跡復元イラスト・唐古・鍵遺跡の環濠復元イラスト	2

株式会社 株悠工房	『社会科資料集 6年』	唐古・鍵遺跡	麻布・木製簪・テン牙製垂飾品・猪牙製垂飾品・堅櫛・銅鏡・翡翠製勾玉(2)・水晶製丸玉集合・高环(2)・広口壺・器台・台付鉢・鉢・水差形土器・細頸壺・甕	19
		唐古・鍵考古学ミュージアム	機織りの風景模型	
河出書房新社	『列島の考古学 弥生時代』	唐古・鍵遺跡	櫻闇が描かれた土器片・絵画土器(2)・復元櫻闇・実験考古学復元銅鐸・土製銅鐸鋳型外枠集合	7
		唐古・鍵考古学ミュージアム	マツリを再現した模型	
有笠間書院	『古事記を解説する一新しい文脈の発見』	唐古・鍵遺跡	記号土器(8)	8
田原本町文化団体連絡協議会	文化祭参加賞		櫻闇くんキャラクター	1
堺市立みはら歴史博物館	図録「古代に誇る一青銅器一」	唐古・鍵遺跡	炉跡遺構	1
株式会社山間	『邪馬台(ヤマト)国』	清水風遺跡	前漢鏡	1 (転載)
株式会社エディット	『河合教授の歴史が好きになる旅の本 飛鳥・奈良(仮)』	筑紫山2号墳	馬形埴輪と馬曳き人物埴輪	1
株式会社朝日旅行	パンフレット『邪馬台国シリーズ パートV 邪馬台国の候補地を大和の遺跡に探る3日間』	唐古・鍵遺跡	復元櫻闇	2
		唐古・鍵考古学ミュージアム	唐古・鍵考古学ミュージアムエンタランス	
健自治会	説明板	唐古・鍵遺跡	航空写真	1
奈良県立橿原考古学研究所附属博物館	図録「十二支の考古学—卯—」	唐古・鍵遺跡	ウサギ骨・小型臼(2)・堅杵・臼と堅杵(レプリカ)	5
	図録「埴輪のはじまり—大和の特殊器台とその背景—」	唐古・鍵遺跡	台付壺(弧帶文)・壺	2
	図録「弥生の里—くらしといのり—」	唐古・鍵遺跡	銅鐸形土製品・栽培・採集された植物・雑穀を炊いた壺(2)・大型臼・翡翠製勾玉を納めた褐鉄鉢容器・刈りとられた穂束と植物・骨・さまざまなまつりの道具・堅杵・弥生人復顔模型・ムラの環境イラスト・弥生の食イラスト	13

ザ・ライトスタッフ フォフィス	「新・やまと物語」	唐古・鍵遺跡	壺の変遷・弥生時代の唐古・鍵ムラ模式図・弥生人骨検出状況と土器棺墓・青銅器鋳造風景イラスト・櫻閣を描いた土器片・復元櫻閣・絵画土器（4）・供獻土器・タタキ板・堺実測図	13 (転載)
株大月書店	『明日の授業に使える小学校社会科6年生』紙面・ウェブサイト	唐古・鍵遺跡	木製の農具（2）・刈りとられた穂束と稲捆・稲穂を摘む道具（2）・一本鎌の製作工程・さまざまな記号をもつ土器・翡翠製勾玉	12
		唐古・鍵考古学ミュージアム	マツリの風景模型（2）・鳥島のシャーマン模型・盾と戈をもつ人物模型	
兵庫県立考古博物館	図録『木のうつわ 六千年の技』	唐古・鍵遺跡	木製四脚容器（4）・蓋付高杯・鳥形容器・復元木製容器・木製品復元実験で使った道具	8
株新泉社	『舟葬論』	唐古・鍵遺跡	翡翠製勾玉を納めた掲鉄舷容器	1 (転載)
株新人物往来社	月刊『歴史読本』2011年4月号	唐古・鍵遺跡	玉類集合・供獻土器・弥生時代中期土器集合・絵画土器（2）	5
財)奈良交通安全協会田原本支部協会	交通安全啓発ステッカー		櫻閣くんキャラクター（2）	2
株六一書房	『考古学からみた古代日本の紡織』	唐古・鍵遺跡	織物片・縫打具実測図・布巻具実測図	3
奈良県立教育研究所	奈良県教育委員会製作教育番組「大和路歴史の旅 木と森の文化史」ウェブ配信	唐古・鍵遺跡	唐古・鍵遺跡全景・復元櫻閣・大型建物の柱出土状況・発掘映像	4
実業印刷㈱	奈良県ポータルサイト「歩く・なら～記紀万葉でたどる大和路」	唐古・鍵考古学ミュージアム	唐古・鍵考古学ミュージアム館内展示風景	1
大阪府立近づ飛鳥博物館	図録『倭人と文字の出会い』	唐古・鍵遺跡	調査地点図・航空写真・絵画土器（8）・記号土器（6）	29
		清水風遺跡	絵画土器（13）	
株文芸社	『邪馬台国女王 卑弥呼の生（仮）』	唐古・鍵遺跡	戦いの様子イラスト	1
朝日新聞出版	『研究最前線 邪馬台国』	唐古・鍵遺跡	土製銅鐸鋳型外枠（2）・櫻閣が描かれた土器片・唐古・鍵遺跡調査成果図	4 (転載)
尼崎市教育委員会	図録『弥生の集落』	唐古・鍵遺跡	木器貯蔵穴・区画溝に貯められた鍬・鋤の未成品・炉跡状遺構	3

㈱アド近鉄	観光ビデオ	唐古・鍵考古学ミュージアム	唐古・鍵考古学ミュージアム外観及び館内展示風景	1
財北九州市芸術文化振興財団	「重留遺跡 第8～15地点」報告書	唐古・鍵遺跡	環濠復元イラスト	1
静岡市	『ようこそ、登呂ムラへ—登呂遺跡の生活復元図鑑—』	唐古・鍵遺跡	幅台脚と木錘・繩・木庵丁	3
歴史教育者協議会	『歴史地理教育773号』2011年4月号	唐古・鍵遺跡	環濠の掘削風景・石獣と石剣・唐古・鍵ムラ鳥瞰図・環濠	4
株ベストセラーズ	『歴史人』	唐古・鍵遺跡	楼閣が描かれた土器片・復元楼閣	2
財奈良県ビジターズビューロー	『奈良県修学旅行ガイドブック』パンフレット・ウェブサイト	唐古・鍵考古学ミュージアム	唐古・鍵考古学ミュージアム館内展示風景	1 (転載)
サンライズ出版㈱	『歴史旅悠々』	唐古・鍵遺跡	楼閣が描かれた土器片	1
48件		延べ52遺跡等		199点

(3) 資料調査

本町所有・保管遺物について、下記の者による資料調査があった。

【資料調査】

調査日	調査者	資料名
7月16日（金）・7月23日（金）	勘柄後夫・下山莉加（同志社大学）	唐古・鍵遺跡 弥生土器
8月17日（火）	下山莉加（同志社大学）	唐古・鍵遺跡 弥生土器
12月22日（水）	河合章行（島取県埋蔵文化財センター）	唐古・鍵遺跡 骨角器

7. ボランティア組織

(1) ボランティア組織の概要

唐古・鍵遺跡を総合的に支援する任意ボランティア組織として、平成16年4月10日、「唐古・鍵遺跡の保存と活用を支援する会」（愛称：唐古・鍵支援隊）が設立された。今年度の会員は、44名である。

主な活動は、唐古・鍵考古学ミュージアムの展示説明ガイドや小学校の総合的学習の支援や子ども会等を対象とした考古学体験、ミュージアムへの勧誘活動、文化財保存課（ミュージアム）主催事業への支援等がある。活動については、4月の総会を経て、月例の運営委員会で検討され実施されている。また、「ものづくり教室」の部会では、新しい体験学習メニューの開発や体験学習教材の整備など月2回おこない、延べ26日201人が参加した。唐古・鍵遺跡においては団体向けに現地ガイドを実施し、二日間で延べ68人に対応した。

【唐古・鍵支援隊の支援活動】

活動日	内容	主催	支援内容	活動人數
4月17日・6月16日・6月19日・ 10月23日・11月24日 計5日間	春季ミニ展示 報告会・秋季企画展 講演会・ガイド研修会	文化財保存課	受付	3人
9月25日・10月16日・11月27日 計3日間	考古学実践講座		受付	6人
7月21日・8月5日・8月11日・ 12月12日 計4日間	チャレンジ子ども弥生探検隊（埴輪をつくろう・勾玉をつくろう・スタンプをつくろう）		支援	21人
11月27日	弥生生活体験イベント		支援	10人
5月20日・5月27日・5月28日・ 6月1日・6月4日・6月11日・ 6月14日・7月8日・10月4日・ 10月7日・10月15日・10月28日・ 11月19日・11月26日・11月30日 計15日間	総合的学習（土器づくり・野焼き・火壇し・赤米炊飯・観穀・勾玉づくり）	北小学校 平野小学校 田原本小学校 東小学校 南小学校	支援	112人
2月11～16日 計5日間	田原本町内小学校の総合的な学習展示会	文化財保存課 支援隊 町内5小学校	受付 支援	27人
11月6日	文化祭（グラスアート）	生涯教育課	支援	14人
延べ34日		14団体		193人





III. 唐古・鍵考古学ミュージアム

1. 企画展・ミニ展示

(1) 秋季企画展「道の考古学」

内 容：古代の奈良盆地は、都が相次いで造営されたとともに、計画的に建設された官道の中心であり、全国からの物資流通の要であった。今回の企画展では、古代の道路や河川による交通路、それを利用して運ばれた‘もの’、それらを通じて浮かび上がる、道を往来した‘人々’を探る展示をおこなった。

期 間：10月9日（土）～11月28日（日）

入館者：877名（企画展のみ）

【展示構成と主要展示品】（展示総数131点）

（I）弥生時代の流通と「道」（ケース②～④）

石庖丁・糧・搬入土器・絵画土器（唐古・鍵遺跡）

（II）古墳時代の流通と「道」（ケース①⑤）

楕円筒埴輪（東殿塚古墳）・搬入土器（羽子田遺跡）

（III）奈良盆地における古代道路の萌芽（ケース⑤～⑦）

須恵器・土師器・瓦・土馬・人面墨画土器（鴨神遺跡・石神遺跡・保津・宮古遺跡・軽寺跡）

（IV）七道駅路の設置と交通網（ケース⑧～⑫）

馬骨・須恵器・土師器・円面鏡・土製品・木製品・

金属製品・錢貨・人面墨画土器（小立古墳・藤原京

右京五条四坊・稗田・若槻遺跡ほか）

（V）道路の要衝でみつかった遺跡（ケース⑬⑭）

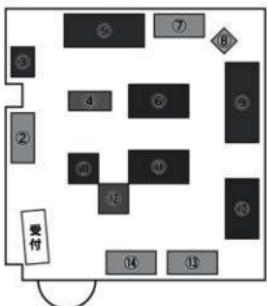
製塙土器・墨書き土器・黒色土器・須恵器・土師器・綠釉陶器・土馬・石製品・碧玉素材片・

錢貨（清水風遺跡・阪手北遺跡・城島遺跡・羽子田遺跡・笠鉢山1号墳）



秋季企画展チラシ

【展示ケースの配置】



展示風景

【借用遺物】

道跡名(遺物名・点数)	点数	所蔵者
石神道路(土師器鉢1・土師器壺2・土師器台付壺1・土師器高环1・須恵器鉢(猿投?)1・須恵器長脚高环1・須恵器环2・須恵器身1・須恵器蓋2・須恵器壺1)	13点	奈良文化財研究所
鶴神道路(須恵器壺3・須恵器泡1)／稗田・若槻道路(和同開塚1・隆平通寶2・鶴益神寶2・須恵器2)	11点	奈良県立橿原考古学研究所
稗田・若槻道路(ミニチュア壺2・人形木製品1・壺串1・武器形木製品1・馬形(?)木製品2・土馬3・人面墨画土器3)	13点	奈良県立橿原考古学研究所附属博物館
藤原京右京五条四坊(銅鏡1・金屬製人形1・素文鏡1・小形海獸葡萄鏡1・土師器壺2・須恵器壺1・須恵器环1・須恵器蓋1・人面墨画土器1・円面鏡1・人形木製品2・武器形木製品1・馬形木製品1)／軒寺跡(軒丸瓦1・軒平瓦1)	17点	橿原市教育委員会
阿倍寺遺跡(須恵器环1・須恵器蓋1・須恵器高环1・須恵器台1)／城烏遺跡(碧玉素材片1・土師器取手付壺1・土師器取手付盤1・土師器环1)／小立古墳(車輪1)	9点	桜井市教育委員会
東殿塚古墳(鱗付棺円筒埴輪1)	1点	天理市教育委員会
10遺跡等(48製品)	64点	6機関等

【田原本町保管遺物】

道跡名	遺物名	点数
唐古・鍵遺跡	石廐丁(1)・石廐丁素材(2)・搬入土器(4)・櫛(2)・馬骨(1)・絵画土器(2)・絵画土器レプリカ(2)	14点
阪手北遺跡	石製巡方(1)・墨書土器(2)・黒色土器(1)	4点
椎鋸山1号墳	須恵器蓋(2)・須恵器环(2)・須恵器壺(3)・墨書土器(1)・綠釉陶器(1)・萬年通寶(1)・土馬(1)	11点
清水風遺跡	製塙土器(8)・製塙土器片(一括)・丸削(1)・土馬(1)	11点
羽子田遺跡	搬入土器(10)・庄内壺(1)・土師器环(1)	12点
保津・宮吉遺跡	土馬(1)・須恵器环(3)・須恵器蓋(2)・須恵器平瓶(1)・須恵器泡(2)・須恵器壺(1)・須恵器高环(1)・須恵器蓋(1)・人面墨画土器(2)・下駄(1)	15点
6遺跡	34製品	67点

【関連イベント】

イベント名	内容	日時・場所	参加人数
講演会	近江俊秀氏(文化庁記念物課 文化財調査官) 「道路から見た大和の古代史」	10月28日(土) 午後1時30分～3時30分 公民館視聴覚室	43人



展示風景



展示ケース①



展示ケース⑤



展示ケース⑨



展示ケース⑦



講演会（近江俊秀氏）

(2) ミニ展示

ア、春季ミニ展示

平成21年度の発掘調査において、特に著しい成果がみられた多遺跡第22次調査・羽子田遺跡第36次調査・宮古北遺跡第15次調査について紹介する「たわらもと発掘速報展2010」展を4月17日（土）～5月23日（日）まで開催した。

【展示の構成と内容】（展示期間：32日間／展示総数44点）

（I）多遺跡の出土品と古代の鏡（ケース①）

軒丸瓦・羽釜・銭貨・銅鏡・ミニチュア土器・石器

（II）羽子田1号墳の新知見と多遺跡（ケース②）

弥生土器・搬入土器・土師器・円筒埴輪

（III）宮古北遺跡の朱精製土器ほか（ケース③）

弥生土器・搬入土器・石器・須恵器・土師器・朱精製土器



展示風景



報告会（清水琢哉）

【関連イベント】

イベント名	内 容	日 時 ・ 場 所	参 加 人 数
報告会	清水 琢哉（町文化財保存課） 『平成21年度の発掘調査成果』	4月17日（土）午後2時～3時30分 公民館視聴覚室	55人

イ、夏季ミニ展示

発掘調査をおこなった町内の遺跡や出土品を紹介する「田原本の遺跡6 秦楽寺遺跡」展を8月7日（土）～9月30日（木）まで開催した。

【展示の構成と内容】（展示期間：47日間／展示総数172点）

（I）古墳時代の玉作り工房（ケース①②）

玉類（製品・未完成・素材）、石製品・玉紙石・須恵器・

韓式土器・製塙土器・不明鉄製品・土錘



（II）秦楽寺の創建（ケース③）

土師器・須恵器・瓦器・土馬

（III）中世の秦楽寺城（ケース④～⑤）

青白磁唐子草花文梅瓶・瓦質土器・土師器・瓦



展示風景

(3) 特別展示「田原本町内小学校の総合的な学習展示会」

内容：田原本町内の各小学校において、総合的な学習の時間を利用した土器づくりや赤米炊飯を中心とする体験学習を実施している。今年度の学習成果である土器や勾玉、児童らの感想文等を展示陳列した。

期間：2月11日（金）～16日（水）

観覧者：248名（特別展示のみ）

【展示構成と内容】（展示期間：5日間／展示総数400点）

(I) 北小学校

土器・勾玉・感想文

(II) 平野小学校

土器・勾玉・感想文

(III) 田原本小学校

土器・感想文

(IV) 南小学校

土器・勾玉・感想文

(V) 東小学校

勾玉・感想文

(VI) 唐古・鍵支援隊

体験学習感想文集・火熾しの道具（火鑽杵・火鑽

臼・着火材・火吹き竹）・土器炊飯の道具（炊飯用

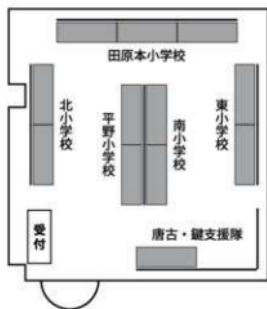
土器・五徳）・脱穀の道具（堅杵・臼・モミ・赤米）・スタンプ（楼閣くん・土器絵画・銅鐸

絵画）・貫頭衣・カレンダー・ペン画



特別展示チラシ

【展示の配置】



展示風景

2. 入館者・ホームページ

(1) 入館者数

平成22年度の入館者数は、8,775人である。前年度に比べると約9%減少した。なお、平成22年1月1日より開催された平城遷都1300年祭に伴って「せんとくんクーポン」が販売された。クーポンの利用期限は12月31日であり、利用した場合の観覧料は一般150円、高・大学生50円とした。

【年度別入館者推移】

年 度	開館日数	有料入館者		無料入館者				合 計
		一 般	高・大学生	15歳以下	身障者	招待者	その他の	
16年度	103	1,744 (209)	131 (0)	1,345 (65)	42	251	1,083	4,596 (274)
17年度	306	4,988 (1,423)	401 (20)	3,060 (229)	174	357	3,040	12,020 (1,672)
18年度	306	2,962 (785)	911 (650)	3,138 (333)	105	233	3,879	11,228 (1,768)
19年度	306	3,760 (932)	483 (174)	2,933 (531)	102	186	4,963	12,427 (1,637)
20年度	307	3,473 (1,148)	567 (253)	2,790 (359)	92	216	2,079	9,217 (1,760)
21年度	307	4,204 (1,599)	585 (311)	2,123 (258)	111	264	2,347	9,634 (2,168)
22年度	306	3,621 (1,151)	744 (430)	1,584 (213)	74	71	2,681	8,775 (1,794)
累 計	1,941	24,752 (7,247)	3,822 (1,838)	16,973 (1,988)	700	1,578	20,072	67,897 (11,073)

※1 16年度は、11月24日から3月31日まで延べ103日間の入館者数。

※2 () は団体入館者の人数(内数)。

【企画展 入館者数】

	開館日数	有料入館者		無料入館者				合 計	
		一 般	高・大学生	15歳以下	身障者	招待者	その他の		
17年度	春季	32	733 (211)	43 (0)	222 (0)	15	77	298	1,388 (211)
	秋季	32	349 (25)	31 (0)	104 (0)	5	42	449	980 (25)
18年度	春季	32	340 (52)	65 (41)	205 (32)	10	30	140	780 (125)
	秋季	32	0 (0)	0 (0)	217 (0)	0	0	1,628	1,845 (0)
19年度	春季	32	332 (54)	21 (0)	331 (223)	9	15	140	848 (277)
	秋季	32	0 (0)	0 (0)	169 (0)	0	47	2,373	2,589 (0)
20年度	春季	32	303 (28)	15 (0)	163 (63)	7	38	178	704 (91)
	秋季	32	231 (0)	44 (0)	93 (0)	5	33	265	671 (0)
21年度	春季	32	442 (186)	20 (0)	142 (46)	9	46	132	791 (232)
	秋季	32	388 (147)	16 (0)	105 (0)	21	21	430	981 (147)
22年度	秋季	44	485 (86)	164 (92)	95 (0)	11	10	542	1,326 (178)
	合 計	364	3,603 (789)	419 (133)	1,846 (364)	92	359	6,575	12,903 (1,286)

※1 () は団体入館者の数(内数)、18年度・19年度の秋季企画展は無料の為、団体入館者はカウントしていない。

※2 本表「無料入館者 その他の」は、「親子無料入館日」・「関西文化の日」の無料入館者を含む。また、18年度・19年度の秋季企画展は、文化庁の「埋蔵文化財保存活用整備事業」の為、無料とし、本項に含めた。

【月別入館者数】

月	開館日数	有料入館者		無料入館者				合計
		一般	高・大学生	15歳以下	身障者	招待者	その他	
4月	26	200 (47)	3 (0)	229 (110)	1	0	70	503 (157)
5月	26	373 (120)	22 (0)	122 (0)	8	4	68	597 (120)
6月	26	385 (255)	9 (0)	42 (0)	1	9	97	543 (255)
7月	27	217 (85)	122 (103)	155 (0)	7	1	156	658 (188)
8月	26	211 (26)	90 (64)	240 (0)	5	0	921	837 (90)
9月	26	274 (79)	14 (1)	95 (0)	9	7	119	518 (80)
10月	27	497 (80)	32 (0)	97 (0)	15	2	801	1,444 (80)
11月	25	624 (171)	311 (184)	145 (0)	19	16	604	1,719 (355)
12月	23	156 (51)	35 (0)	110 (0)	2	23	92	418 (51)
1月	23	94 (0)	8 (0)	53 (0)	1	5	113	274 (0)
2月	24	234 (95)	46 (35)	227 (103)	2	4	152	665 (233)
3月	27	356 (142)	52 (43)	69 (0)	4	0	118	599 (185)
合計	306	3,621 (1,151)	744 (430)	1,584 (213)	74	71	2,681	8,775 (1,794)

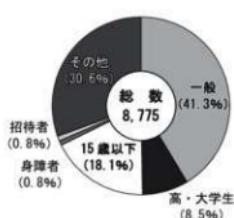
※1 () は団体入館者の人数(内数)

※2 その他は、研修での利用(減免)・ボランティア研修等の来館者

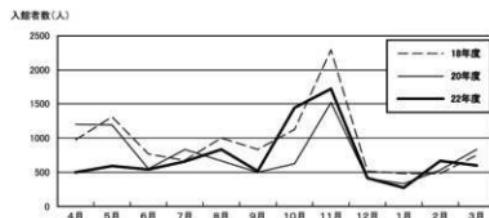
【せんとくんクーポンの利用者数】

	1月	2月	3月	4月	5月	6月	7月	8月	9月	10月	11月	12月	合計
一般	0	2	0	3	8	3	6	26	8	11	9	7	83
高・大学生	0	0	0	0	0	0	0	1	1	0	1	0	3
合計	0	2	0	3	8	3	6	27	9	11	10	7	86

【入館者の内訳】



【入館者の月別推移】



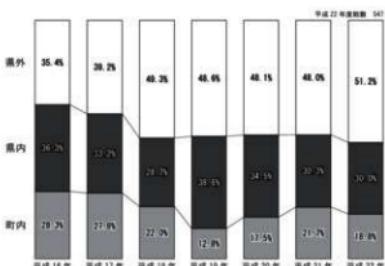
また、全体に対する団体の割合は、約20%でやや減少した。

無料入館日の入館者は、5月5日(水・祝)の子どもの日(親子・保護者を対象)13名、関西文化の日の11月20日(土)127名・21日(日)117名の総計257名であった。

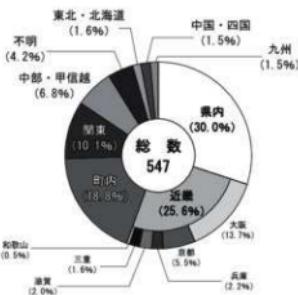
(2) 入館者アンケート

入館者アンケート（常設展示）を実施した。回答総数548件、回答率4～6%である。

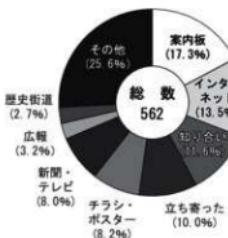
【入館者居住地別 年度推移】



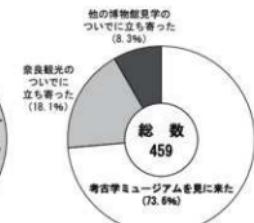
【入館者の居住地内訳】



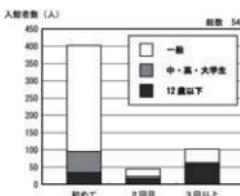
【ミュージアムを知った理由】



【来館目的】



【来館回数】



(3) 観察・研修・学校等からの来館

平成22年度は、下記のとおり観察・研修1件2名、学校の利用5校563名、海外からの研究者14名の来館があった。

観察・研修 田原本町教育委員会（8月4日／2名）

学校利用 田原本小学校6年生（4月16日／115名）・北小学校6年生（4月28日／40名）・奈良大学文化財学科（11月10日／70名）・近畿大学附属小学校5年生（2月15日／108名）・奈良大学通信教育（7月18日／100名、8月28日／50名、2月12日／40名、3月12日／40名）

海外研究者 東アジア古代史・考古学研究会（12月3日／14名）

(4) ホームページ

各種メニューや新着情報等の閲覧効率化のため、トップページのリニューアルをおこなった。また、平成22年4月より休館日の変更があり、月曜日が祝日の場合は開館し次の平日が休館日となつた。この周知と、イベント等の情報をより確認しやすくするため、ミュージアムカレンダーのページを設置した。

平成22年度のアクセス数は12,655件で、前年度より約12%増加した。

【ホームページのアクセス数】

	平成16年度	平成17年度	平成18年度	平成19年度	平成20年度	平成21年度	平成22年度
アクセス数	2,518	8,324	8,183	10,291	9,391	11,303	12,665
累計	2,518	10,842	19,025	29,316	38,707	50,010	62,655

【トップページ（平成23年4月現在）】



【ミュージアムカレンダー】



3. ボランティアガイド

(1) ボランティアガイドの実績

ミュージアムの展示品解説ボランティアは、開館以来実施している。ガイドは年度単位とし、継続更新は可としている。平成22年度のガイド登録は36名で、22年度の新規登録者は0名である。基本的に月2回の午前10時から午後4時（冬季の12月～2月は午前11時から午後3時）までとし、常駐2人体制で実施した。また、団体客等多数の来館の場合に備えて、応援ガイド体制を作りその時間帯のみ臨時に応じている。このような体制で、下表実績に示すとおり約5割の来館者に対応した。ガイドの研修は、6月16日と19日に「要約ガイド講座・ガイドマナー講座」を、11月24日に「遺跡ガイド研修（唐古・鍵遺跡現地ガイド講習）」を実施した。

【展示ボランティアガイド実績】

月	開館日数	稼動人数	ガイド人数 ^{※1}	入館者数 (常設展のみ)
4月	26日	45人	328人	503人
5月	26日	49人	330人	597人
6月	26日	47人	314人	543人
7月	27日	53人	309人	658人
8月	26日	53人	318人	837人
9月	26日	47人	262人	518人
10月	27日	51人	372人	903人
11月	25日	47人	355人	953人
12月	23日	40人	115人	418人
1月	23日	36人	68人	274人
2月	24日	49人	334人	665人
3月	27日	44人	379人	599人
合計	306日	561人	3,484人(47%) ^{※2}	7,468人

※1 ガイド人数は概数

※2 ガイド人数／入館者の割合



IV. 資料の報告

多遺跡第22次発掘調査 遺物整理事業

清水 琢哉

1. はじめに

多遺跡は、田原本町南部、標高52m前後の沖積地に立地する。これまでの調査から弥生時代前期から古墳時代まで継続する集落遺跡であることが判明している。平成21年度には、多遺跡の北東部において水路工事に伴う第22次調査を実施し、弥生時代から近世の遺構を多数検出した。各遺構の詳細については、『田原本町文化財調査年報19』を参照されたい。

本調査で出土した遺物は遺物箱92箱分で、その整理作業は平成22年度事業として実施したので報告する。

2. 出土した遺物

(1) 土器

弥生時代前期後半から末の遺構としてSK-3151、SD-1104などを検出した。第1図-1はSK-3151から出土した壺で、大和第I-2-a様式に属する。また、SD-1104からは大和第II-1様式前後の遺物が多数出土した。第1図-3の広口壺は胎土に角閃石を含み暗褐色を呈する。盆地東南部産の可能性がある。第1図-5~7は大和第II-1様式の甕で、いずれも口縁端部に刻目を施す。5は2条、7は4条のヘラ描直線文を施すが、6は直線文がみられず外面ヘラミガキで仕上げる。8の鉢は内外面ともに棒状の工具によるナデつけで仕上げる。

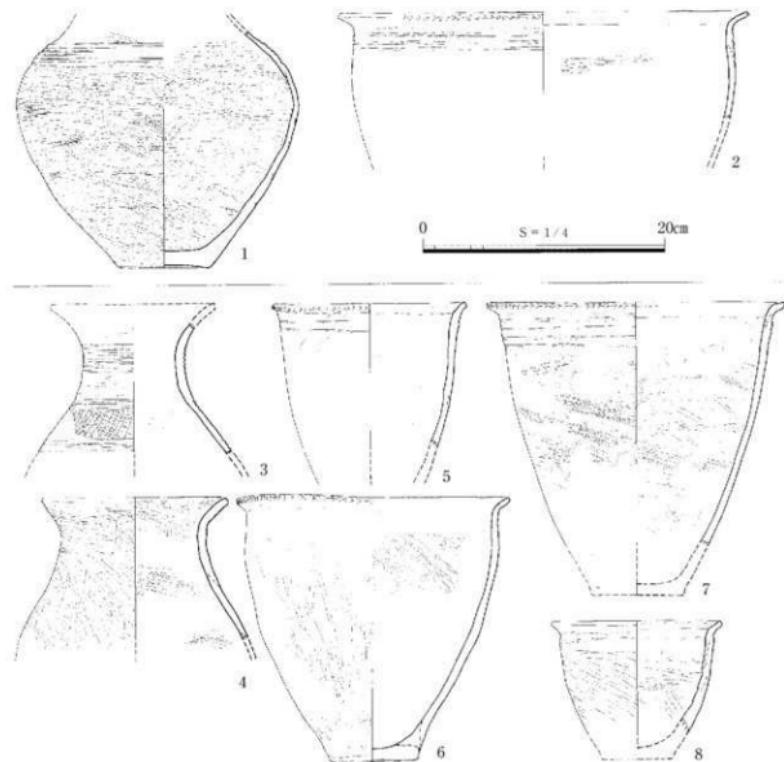
弥生時代中期前半の遺構として、SK-2102がある(写真2-2~5)。写真2-3・4は粗いハケ調整と胴部の膨らみが少ないのが特徴となる初期大和型甕である。写真2-2の広口壺は搬入品の可能性がある。いずれも大和第II-2様式に属する。

多集落東部を囲む環濠となる可能性がある遺構として、調査区北端のSD-1101、第2トレンチ南端のSD-2101がある。いずれも下層から弥生時代中期中頃を中心とする遺物が出土した。

第2図-9~14はSD-1101の下層から出土した土器である。9は有段口縁壺、10は細頸壺、11は無頸壺、12は水差形土器で、大和第III-2~3様式に属する。13・14は大和型甕で、大和第III-2様式に属する。第5図-53はSD-1101下層出土の高坏で、内面に赤色顔料が付着する。大和第III様式に属する。今回は図示していないが、SD-1101上層からは大和第V様式頃の高坏等が出土しており、この時期まで開口していたと考えられる。第5図-54はSD-1101上層から出土した弥生時代後期の鉢で、丹後・丹波地域からの搬入品の可能性がある。

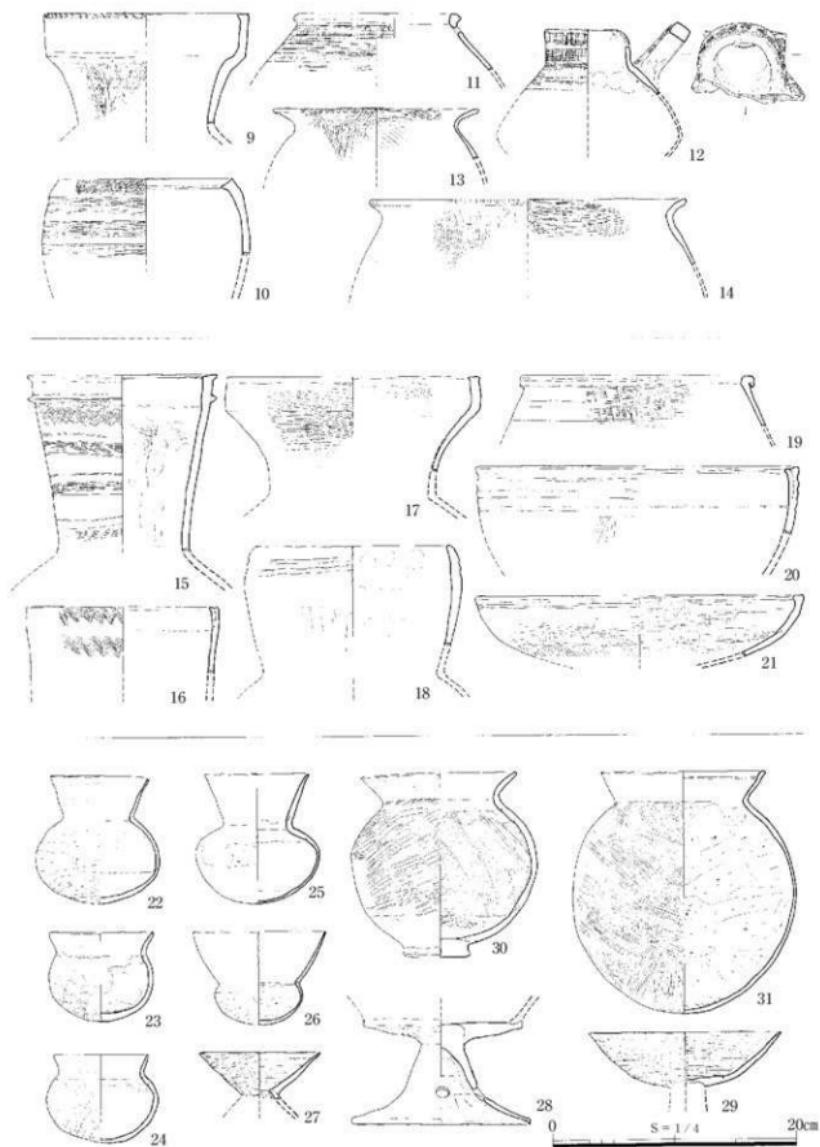
第2図-15~21は、SD-2101の下層を中心に出土した土器である。大和第III-1~4様式までの時期幅がある。この遺構は古墳時代前期に再掘削がおこなわれており、上層から第2図-22~29の土師器が出土している。土師器もやや時期幅があり、布留1式の小形丸底甕(第2図-26)と器台(第2図-27)、布留2式の甕(第2図-31)・小形丸底甕(第2図-23・24)などが出土しているほか、弥生系のタキ仕上げの甕(第2図-30)なども出土している。

第1トレンチ中央で検出した北北東-南南西方向の溝SD-1102からは、弥生時代後期初頭~前半

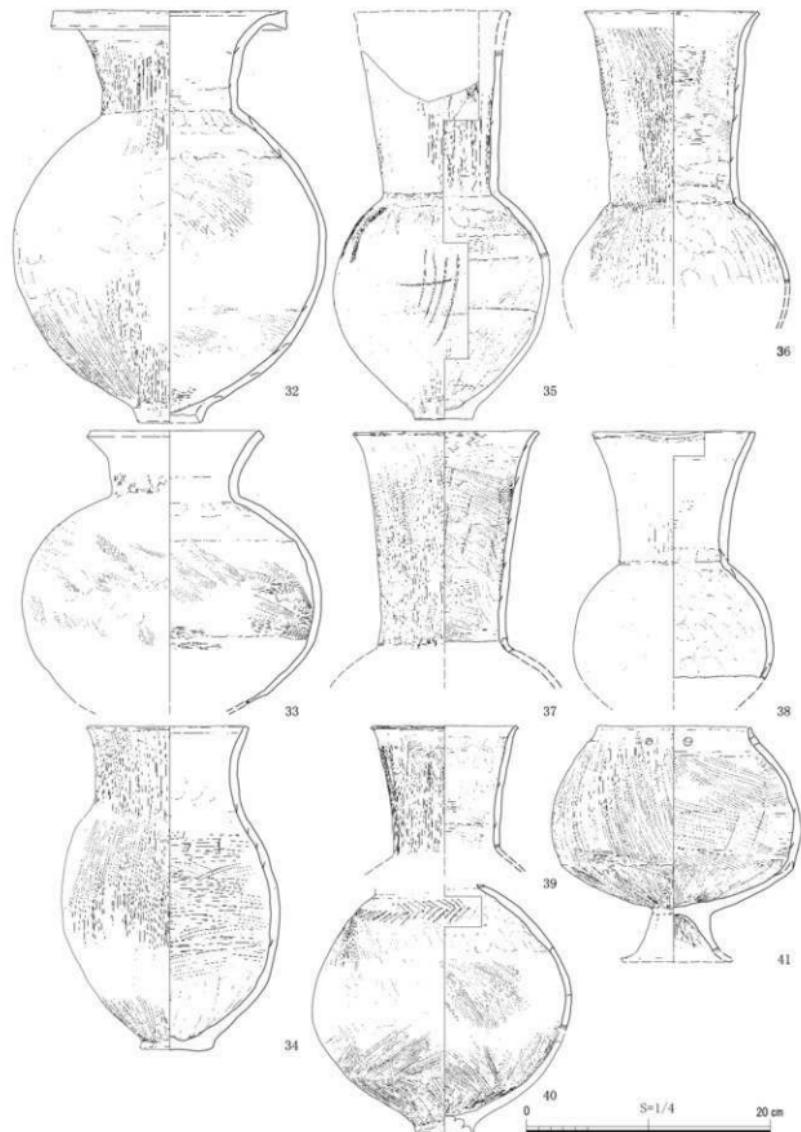


第1図 S K-3151・S D-1104出土土器

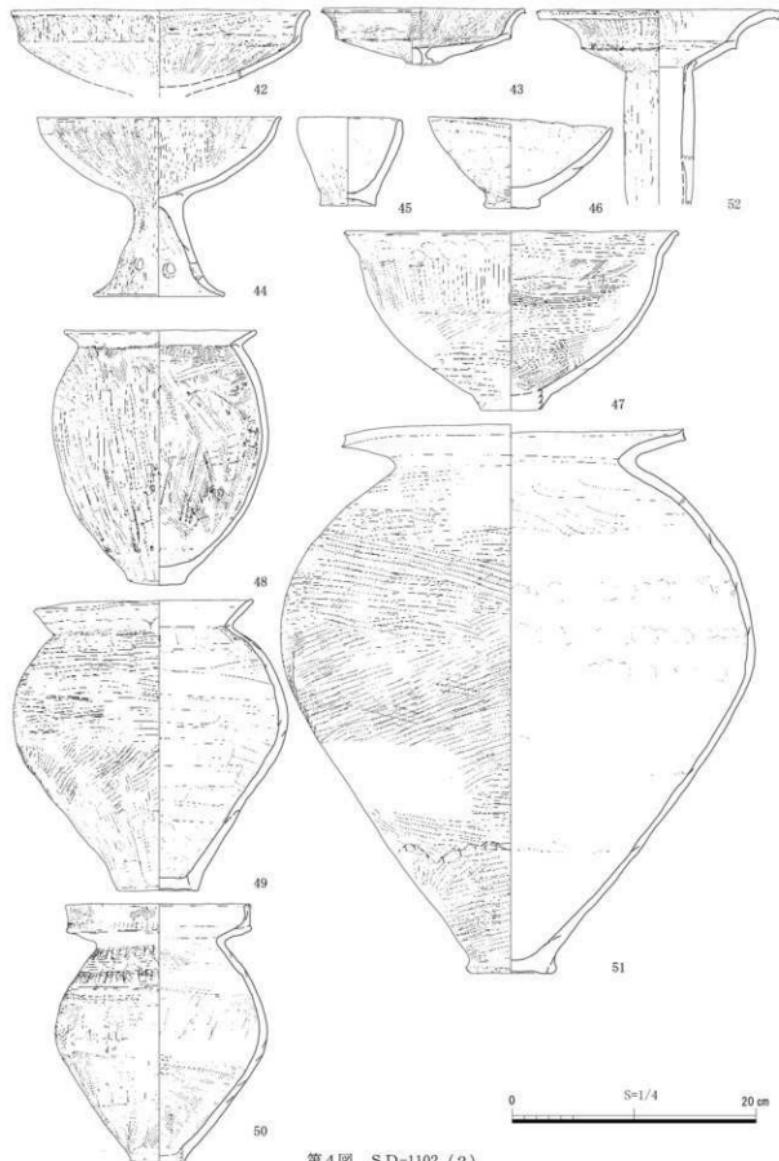
遺物番号 写真番号	器種	調査文號	造形名	層位	法徑 (cm)	調整・文様	備考	時期
1 写真1-1	広口壺	22次	S K-3151	第5層	口径：25.3 底径：7.5	(外) 底部底面へハケナリ。側部ミギザ。側部上半の削り出し凸面に4条のハラ模沈線文。 (内) ミギザ。	外面に黒色物被布	I-2a
2 写真1-2	壺	22次	S K-3151	第5層	口径：33.4	(外) 口縁部に側削目、ヘラ模沈線文3条。端付着のため調整不明。 (内) ハケ削石。		I-2a
3 写真1-4	広口壺	22次	S D-1104	第3層		(外) ミギザ。上からヘラ模沈線7条、3条、斜格子文、3条以上のハラ模沈線文。 (内) ナデ。	角閃石を含む 盆地東南部か？	II-1
4 写真1-3	広口壺	22次	S D-1104	第4層	口径：14.9	(外) ミギザ。 (内) 口縁部ミギザ。側縁部ハケ削ナデ。		II-1
5 写真1-5	壺	22次	S D-1104	第3層	口径：15.5	(外) ハケ削ナデ。口縁端部に削目。ヘラ模沈線文2条。被熱のため調整は不明。 (内) ナデ。口縁部ヨコナデ。	側部内面下半に灰白色付着	II-1
6 写真1-5	壺	22次	S D-1104	第4層	口径：22.6 最高：22.2 底径：7.3	(外) 両端ナデ。底面カスリ。側部端部ミギザ。口縁部ナデ。端面に削目。 (内) 剣・底部ナデ。側部上半た上がりハナ。口縁部ナデ。		II-1
7 写真1-6	壺	22次	S D-1104	第4層	口径：21.0	(外) 剣端ナデ。上半はハケ削ナデ。口縁端部に削目を有し直側削ナデ。側部上半ハラ模沈線文。 (内) ハケ、口縁部ナデ。	上半部に端付着	II-1
8 鉢	鉢	22次	S D-1104	第4層	口径：13.5	(外) 口縁部ヨコナデ。側部へラ・棒状工具によるナデつけ。 (内) 口縁部ヨコナデ。側部ヘラ・棒状工具によるナデつけ。	角閃石を含む 盆地東南部か？	II-1



第2図 SD-1101・SD-2101出土土器



第3図 SD-1102 (1)



第4図 SD-1102 (2)

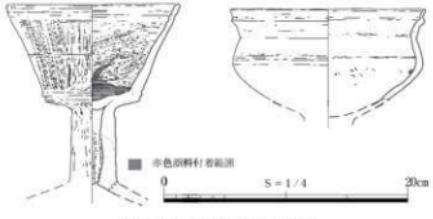
遺物番号 写真番号	器種	測定 文様	遺構名	層位	法量 (cm)	調整・文様	備考	時期
9 写真1-2	直口壺	22次	SD - 1101	第4層	口徑：36.5 層位：135	(外) 壁部は厚さ1.5mm、口縁部ヨコヨコ。口縁端部に側突丸。 (内) 壁部は厚さ1.5mm、口縁部ヨコヨコ。		Ⅱ-2
10 直口壺		22次	SD - 1101B	第6層	口徑：14.3 層位：135	(外) 口縁上段から側面後壁文様1と前文様の横幅1.5mm。 (内) 口縁部上端ヨコヨコ。		Ⅱ-3
11 無柄壺		22次	SD - 1101B	第6層	口徑：12.4 層位：135	(外) 口縁部上段ヨコヨコ。側面後壁文様1.5mmと前文様の横幅1.5mm。 (内) 壁部は厚さ1.5mm。	2孔一対の鉢孔あり	Ⅱ-2
12 水差形土器		22次	SD - 1101	第4層	口徑：7.2 層位：135	(外) 口縁部上段から側面後壁文様1と前文様の横幅1.5mm。 (内) 壁部は厚さ1.5mm。	把手は挿入式	Ⅱ-2
13 壺		22次	SD - 1101B	第6層	口徑：16.8 層位：135	(外) 口縁部ヨコヨコ。側面後壁文様1.5mmと前文様の横幅1.5mm。 (内) 壁部は厚さ1.5mm。	大和型壺	Ⅱ-2
14 壺		22次	SD - 1101	第4層	口徑：25.8 層位：135	(外) 壁部ハケ。口縁部ヨコヨコ。 (内) 壁部は厚さ1.5mm。	大和型壺 外表面付着	Ⅱ-2
15 直口壺		22次	SD - 2101	街盤土	口徑：14.7 層位：135	(外) 口縁部ヨコヨコ。側面後壁文様1.5mmと前文様の横幅1.5mm。 (内) 壁部は厚さ1.5mm。	内面下半横筋により調節	Ⅲ-1
16 直口壺		22次	SD - 2101	第5層	口徑：14.4 層位：135	(外) 壁部は厚さ1.5mm、側面後壁文様1.5mm。 (内) 口縁部ヨコヨコ。直筋ナメ。		Ⅲ-2
17 有段口壺		22次	SD - 2101	第5層	口徑：19.0 層位：135	(外) 壁部は厚さ1.5mm、側面後壁文様1.5mm。 (内) ナメ。口縁部ヨコヨコ。		Ⅲ-2
18 圓筒壺		22次	SD - 2101	第4層	口徑：15.1 層位：135	(外) 口縁部ヨコヨコ。側面後壁文様1.5mmと前文様の横幅1.5mm。 (内) ナメ。		Ⅲ-2
19 合符杯		22次	SD - 2101	第5層	口徑：17.4 層位：135	(外) 壁部は厚さ1.5mm、側面後壁文様1.5mm。 (内) ナメ。口縁部ヨコヨコ。		Ⅲ-2
20 鉢		22次	SD - 2101	第5層	口徑：24.5 層位：135	(外) 口縁部ヨコヨコ。側面後壁文様1.5mmと前文様の横幅1.5mm。 (内) ナメ。		Ⅲ-3 -4
21 高环		22次	SD - 2101	第3層	口徑：25.0 層位：135	(外) 口縁部ヨコヨコ。側面後壁文様1.5mmと前文様の横幅1.5mm。 (内) ナメ。	外表面一部に付着	Ⅲ-3 -4
22 写真-2-3 写真-6-6	小丸丸底壺	22次	SD - 2101	第3層	器高：10.6 口徑：7.4 層位：135	(外) 腹部は厚さ1.5mm、側面後壁文様1.5mmと前文様の横幅1.5mm。 (内) 壁部は厚さ1.5mm。	半完形品	専留2
23 写真-6-6	小丸丸底壺	22次	SD - 2101	第3層	器高：7.4 口徑：7.4 層位：135	(外) 壁部は厚さ1.5mm、側面後壁文様1.5mmと前文様の横幅1.5mm。 (内) ナメ。口縁部ヨコヨコ。	完形品	専留2
24 写真-5	小丸丸底壺	22次	SD - 2101	第3層	器高：7.3 口徑：7.3 層位：135	(外) 壁部は厚さ1.5mm、側面後壁文様1.5mmと前文様の横幅1.5mm。 (内) ナメ。口縁部ヨコヨコ。	完形品	専留2
25 写真-2	小丸丸底壺	22次	SD - 2101	第2層	器高：8.7 口徑：8.4 層位：135	(外) 壁部は厚さ1.5mm、側面後壁文様1.5mmと前文様の横幅1.5mm。 (内) ナメ。	被熱	専留2
26 写真-1-1	小丸丸底壺	22次	SD - 2101	第2層	器高：7.2 口徑：10.7 層位：135	(外) 壁部は厚さ1.5mm、側面後壁文様1.5mmと前文様の横幅1.5mm。 (内) ナメ。	完形品 (一部欠)	専留1
27 小形器台		22次	SD - 2101	第2層	口徑：11.9 層位：135	(外) 口縁部ヨコヨコ。下段腰部ケズナメ。上半横筋ハケナメ。 (内) ナメ。		専留1
28 高环		22次	SD - 2101	第2層	口徑：14.3 層位：135	(外) 被熱したため調査不規則。	被熱	専留2
29 高环		22次	SD - 2101	第5層	口徑：15.5 層位：135	(外) 横径1.2mm。直筋ナメ。		専留2 ?
30 写真-7	壺	22次	SD - 2101	第3層	器高：15.1 口徑：10.0 層位：135	(外) 壁部は厚さ1.5mm、側面後壁文様1.5mmと前文様の横幅1.5mm。 (内) 壁部は厚さ1.5mm。	被熱	庄内?
31 写真-6-8	壺	22次	SD - 2101	第2層	器高：10.9 口徑：13.2 層位：132	(外) 壁部下段ヨコヨコ。上半部上上がりハケ。口縁部ヨコヨコ。 (内) 壁部は厚さ1.5mm。	被熱 半完形品	専留2
32 広口壺		22次	SD - 1102	第1層	器高：34.8 口徑：11.8 層位：132	(外) 壁部は厚さ1.5mm、側面後壁文様1.5mmと前文様の横幅1.5mm。 (内) 壁部は厚さ1.5mm。	被熱のため表面保存不良	V-2
33 写真3-1	広口壺	22次	SD - 1102	第1層	口徑：13.7 胸径：14.5 層位：132	(外) 壁部は厚さ1.5mm、側面後壁文様1.5mmと前文様の横幅1.5mm。 (内) 壁部は厚さ1.5mm。		V-2
34 無柄壺		22次	SD - 1102	第1層	器高：26.6 口徑：13.0 層位：132	(外) 壁部は厚さ1.5mm、側面後壁文様1.5mmと前文様の横幅1.5mm。 (内) 壁部は厚さ1.5mm。	被熱表面に灰黒色 被熱表面と口縁部外面や肩	V-2
35 写真3-4	長颈壺	22次	SD - 1102	第3層	口徑：17.6 胸径：17.8 層位：135	(外) 壁部は厚さ1.5mm、側面後壁文様1.5mmと前文様の横幅1.5mm。 (内) 壁部は厚さ1.5mm。	被熱にヘラによる記号書き左 45度上方に赤色顔料による記号書き右 表面に龜甲文様が残る付着 瓶部内面に良化物付着	V-2
36 写真4-1	長颈壺	22次	SD - 1102	第1層	口徑：14.0 胸径：18.5 層位：135	(外) 壁部は厚さ1.5mm、側面後壁文様1.5mmと前文様の横幅1.5mm。 (内) 壁部は厚さ1.5mm。		V-2
37 写真4-2	長颈壺	22次	SD - 1102	第1層	口徑：14.7 胸径：14.5 層位：135	(外) 壁部は厚さ1.5mm、側面後壁文様1.5mmと前文様の横幅1.5mm。 (内) 壁部は厚さ1.5mm。		V-2
38 長颈壺		22次	SD - 1102	第1層	口徑：13.0 胸径：13.4 層位：135	(外) 壁部は厚さ1.5mm、側面後壁文様1.5mmと前文様の横幅1.5mm。 (内) ハケナメ。口縁部ヨコヨコ。	口縁部 (淡褐色) と瓶部 (淡 青褐色) を剥離しにより成形 瓶部内面に良化物付着	V-2
39 長颈壺		22次	SD - 1102	第1層	口徑：11.5 胸径：11.5 層位：135	(外) 壁部は厚さ1.5mm、側面後壁文様1.5mmと前文様の横幅1.5mm。 (内) ハケナメ。口縁部ヨコヨコ。		V-2
40 写真3-2	広口壺	22次	SD - 1102	第1層	胸径：21.0 層位：135	(外) 壁部は厚さ1.5mm、側面後壁文様1.5mmと前文様の横幅1.5mm。 (内) 壁部は厚さ1.5mm。		V-2
41 写真4-7	台付無柄壺	22次	SD - 1102	第1層	口徑：12.3 胸径：12.5 層位：135	(外) 壁部は厚さ1.5mm、側面後壁文様1.5mmと前文様の横幅1.5mm。 (内) 壁部は厚さ1.5mm。	口縁部 (淡褐色) と瓶部 (淡 青褐色) を剥離しにより成形 瓶部内面に良化物付着	V-2

遺物番号 写真番号	器種	測定 次元	遺構名	層位	法量 (cm)	調整一文様	備考	時期
42 写真5-2	高环	22次	SD-1102	第1層	口径：240	(外) 环部下半纏波ミガキ、上半ヨコナデ後纏波ミガキ。口縁部は崩滅する。 (内) 环部下半ハケ後纏波ミガキ、上半横板工具によるヨコナデ後纏波ミガキ。 (外) 环部下半ハケ後纏波ミガキ、上半ヨコナデ後纏波ミガキ。口縁部ヨコナデ。	V-2	
43 写真5-4	高环	22次	SD-1102	第1層	口径：240	(外) 环部下半ハケ後纏波ミガキ、上半ヨコナデ後纏波ミガキ。口縁部は崩滅する。 (内) 环部下半ハケ後纏波ミガキ、上半ヨコナデ後纏波ミガキ。口縁部ヨコナデ。	V-2	
44 写真5-5	高环	22次	SD-1102	第1層	器高：146 口径：192 底径：192	(外) 腹部ヨコナデ後纏波ミガキ、上半ヨコナデ後纏波ミガキ。口縁部ヨコナデ。 (内) 环部下半ハケ後纏波ミガキ、上半ヨコナデ後纏波ミガキ。口縁部ヨコナデ。	V-2	底部收斂に稍粗直あり
45 写真5-6	钵	22次	SD-1102	第1層	器高：73 口径：143 底径：45	(外) 崩滅したため不明。 (内) 崩滅したため不明。	V-2	
46 写真5-4	钵	22次	SD-1102	第1層	器高：74 口径：143 底径：42	(外) 腹部付近タケ後ナダ、胴部ナダ。口縁部ヨコナデ。 (内) ナダ。崩滅したため不明。	完形（一部欠） 底部收斂に稍粗直あり	V-2
47 写真5-7	钵	22次	SD-1102	第1層	器高：146 口径：192 底径：48	(外) 腹部半纏波タキキ、胴部中央右上方がハケ。上半纏波ハケ。 (内) 腹部右上方がハケ後纏波ハケ。口縁部横位ハケ。	V-2	
48 写真5-5	甕	22次	SD-1102	第1層	器高：208 口径：176 底径：176	(外) 腹部半纏波ミガキ、上半纏波ハケ後纏波ミガキ。口縁部ヨコナデ。 (内) 腹部ヨコナデ。	腹部外表面付近に剥離材	V-2
49 写真5-6	甕	22次	SD-1102	第1層	器高：239 口径：175 底径：65	(外) 腹部下部右上がりタケ後纏波ミガキ、上半横位タキキ。口縁部ヨコナデ。 (内) 腹部ヨコナデと指捺痕。胴部横位ハケ。口縁部ヨコナデ。	外表面の最大断面付近に剥離材 下半は楕円のため変形	V-2
50 写真5-8	甕	22次	SD-1102	第1層	器高：212 口径：148 底径：44	(外) 腹部横位ハケ。胴部と上半から鰐鱗状文、直線文、櫛状文、直線文、櫛状文。 (内) 腹部半纏波ミガキ。上半ハケ後ナダ。口縁部ヨコナデ。	外表面部以外に剥離材 内表面最大断面以下に剥離材付着 近江	V
51 写真5-7	大型甕	22次	SD-1102	第1層	器高：450 口径：387 底径：68	(外) 腹部半横位タキキ、胴部下部左横位タキキ、上半ヨコナデ後纏波文風、 上半横位及び左上ヨコナデタキキ。口縁部ヨコナデを有すること。 (内) 腹部ハケ後纏波ミガキ。上半ヨコナデ。	底部を圓錐形で成形 崩落	V
52 写真5-1	結合型土器	22次	SD-1102	第1層	口径：200	(外) 腹部横位ミガキ、环部下半ヨコナデミガキ。上半ヨコナデ後纏波文風、 環部ヨコナデ。口縁部ヨコナデ。环部横位による环部横位文風。胴部横位。 (内) 腹部横位タキキ。环部ハケ後纏波ミガキ。上半ヨコナデ。	表面保存不良	V
53 写真2-6	高环	22次	SD-1101	第5層	口径：138	(外) 口縁部ヨコナデ。最大断面付近に直線文2条。崩落したため調査不<明。 (内) 口縁部ヨコナデ。	耳内面に赤色剥離材付着	N
54 合付2体	22次	SD-1101	第5層	口径：135	(外) 口縁部ヨコナデ。最大断面付近に直線文2条。崩落したため調査不<明。 (内) 口縁部ヨコナデ。	胴部内面に稍粗直		
55 写真5-9	丸瓦	22次	1トレンチ 曲手北	近世 住居層	直径：134 全長：246 厚さ：103	(外) ナダ。 (内) 布目瓦反張。繩張状の両面直。	焼成良好 表面焼化粧	中世
56 写真6-10	軒瓦	22次	2トレンチ 曲手	近世 住居層	高さ：39 厚さ：18 幅：94	(外) ナダ。風化のため調査不<明。 (内) 風化のため調査不<明。	砂粒多く含む やや軟質 表面焼化粧	中世
57 羽釜	22次	SD-2051	第3層	口径：218	(外) 備付部のため調査不<明。 (内) 口縁部ヨコナデ。底ナダ。	外面剥離材	宝町	

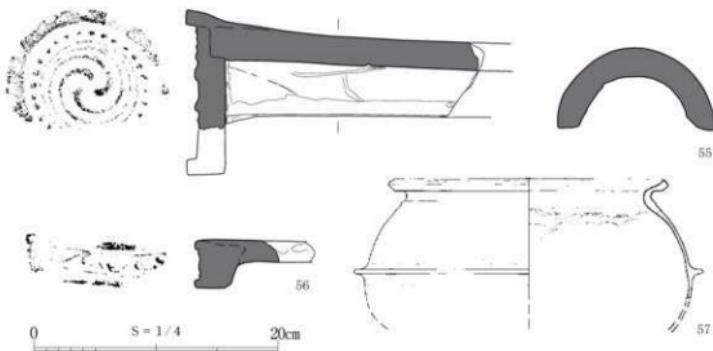
* 法量の()で示した数値は残存部。

(大和第V～VI-2様式)の遺物が多数出土した(第3・4図、写真3～5)。第3図-35及び写真4-4・5は記号をもつ長頸壺である。写真4-4・5は後期後半の遺物で、溝の遺物には若干の時期幅がある。なお、第4図-50の甕は近江からの搬入品とみられる。

本調査は、南北方向の水路改修に伴う調査であったが、この水路はほぼ近世水路を踏襲するもので、さらにその前身となる中世の南北大溝(SD-1051・2051・3051)も調査区全体で検出した。この溝は、調査区西側に括る小字「宮ノ内」にあったと伝わる中世多集落の東側を区画していた可能性がある。第2トレンチSD-2051では、最下層から室町時代の羽釜などが出土した(第6図-57)。なお、近世堆積層から中世以降の銭貨が出土している(写真6-11～13)。



第5図 SD-1101出土土器



第6図 中世の遺物

中世寺院に関する遺物として第1トレンチの近世溝堆積土から中世の軒丸瓦（第6図-55）が、第2トレンチの近世溝堆積土から軒平瓦（第6図-56）が出土した。また、五輪塔の水輪1点（写真8-16）も第1トレンチから出土した。第1トレンチの西側には現在も「観音堂」があり、廃仏毀釈により廃絶した多神社神宮寺の堂宇の1つであったとみられる。堂内に保管される鬼瓦に寛文三年（1663）・宝永六年（1709）の銘がみられるほか、天正二年（1574）の「多神宮寺觀音下地田数帳」（天理図書館近世文書）に一町九反三十歩の寺地が記録されるなど、中世末まで遡ることが確認できる。今回出土した瓦は室町時代に属すると考えられ、観音堂の成立年代が少なくとも室町時代まで遡る可能性が高い。なお、堂内の千手觀音立像は平安時代後期の作とされる。

（2）石器

今回の調査では、包含層及び中・近世の遺構から弥生時代の石器類が多数出土した。図化は後日の課題として、今回は写真のみ掲載する。主なものとしては、石鎌・石剣・石小刀・石錐などのサスカイト製打製石器（写真7）、石庖丁・大型蛤刃石斧・環状石斧・紡錘車などの磨製石器（写真8）などがある。石鎌（写真7-1～9）は、弥生時代後期の溝SD-1102から多く出土している。この遺構は全体に遺物量が多く、居住区に近接していたのであろう。写真7-10の石剣は、SD-1101下層から出土した。この石剣は、先端及び刃部には細かい敲打痕が多数みられることから、敲石に転用されたものである。写真7-11はSD-2101下層から出土した打製石剣で、先端部を欠損し、3cm程度残存する刃部には鋸歯状の加工を施す。環状石斧（写真8-13）は、第1トレンチ北半の近世包含層出土のため所属時期は不明であるが、出土例の少ない貴重な遺物である。石庖丁には流紋岩製のもの（写真8-1～4）と結晶片岩製のもの（写真8-5～9）がある。また片麻岩系の石庖丁も1点出土している（写真8-10）。大半は中・近世の遺構や包含層からの出土であるが、写真8-3の流紋岩製石庖丁未製品は中期前半の土坑SK-2102から、写真8-6・7の結晶片岩製石庖丁は中期中葉～後半の大溝SD-2101からの出土である。

3.まとめ

今回の整理事業では、多遺跡第22次調査で出土した92箱の遺物の洗浄作業、優品の接合・図化作業及び写真撮影などを実施した。多遺跡の成立時期に関わる前期前半～後半の資料、これまで資料に恵まれていなかった後期中頃の資料、環濠とみられるS D-1101及びS D-2101の存続期間を決定するための資料を重点的に図化したが、これらは膨大な出土品のごく一部であり、未整理分が将来に積み残された課題となった。

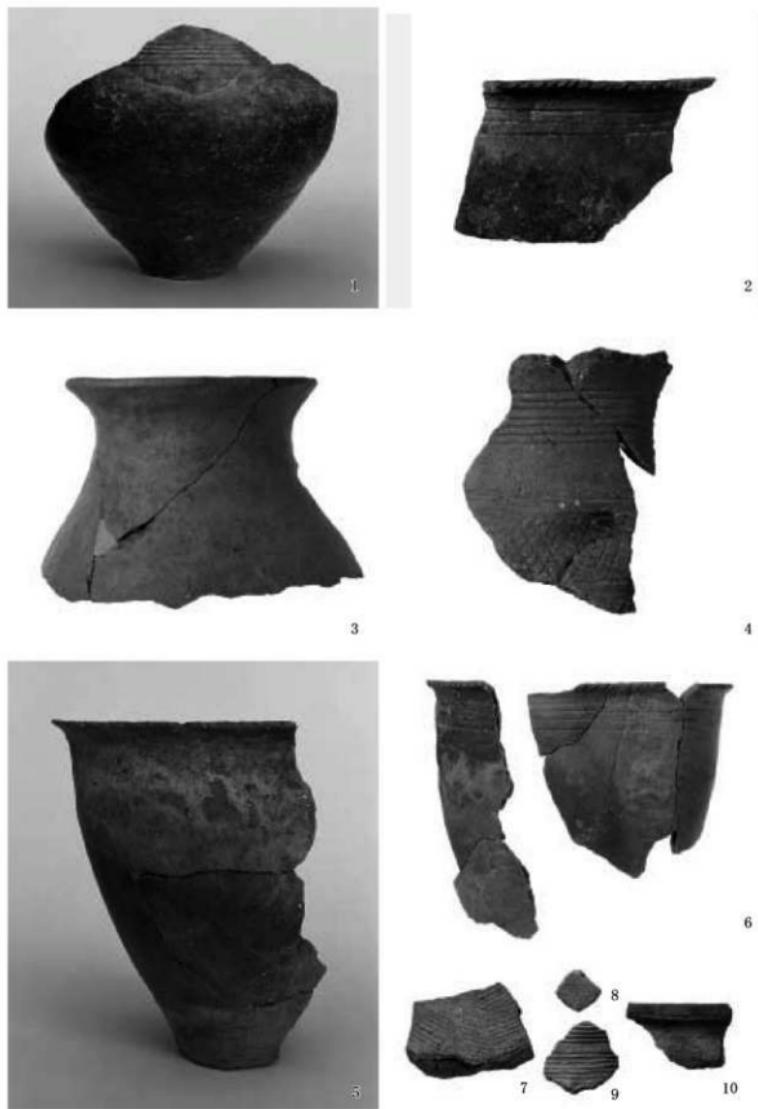
多遺跡の遺物としては、S K-3152出土の壺が大和第I-2-a様式に遡る古い資料となる。この遺構は木器貯蔵穴とみられ、下層には木製品製作時に発生する削り屑が堆積し植物腐食層を形成していた。奈良盆地では、大和第I-1-b～I-2-aに遡る集落は少ない。また、少数の古い集落は、その大半が拠点集落へと発達するようである。

多集落の環濠として位置づけできそうな遺構にS D-1101・2101・3101がある。S D-1101は、下層出土遺物が大和第Ⅲ様式前半に遡る。また、上層遺物には後期中頃の高坏や鉢などがみられた。再掘削については明確にできなかったが、弥生時代中期から後期にかけての長期間維持された遺構と考えられる。S D-2101は、下層がS D-1101とほぼ同様の時期と考えられるが、古墳時代前期に再掘削される。弥生時代後期の遺物も散見されるため、溝としては継続していたのかもしれない。

写真番号	部 様	測定 次數	遺構名	層位	法量 (cm)	調 整 · 文 程	備 考	時期
写真1-7 内側口縁土器	22次	S D-1302	第1層	幅: 62 (内) 剥離下平ナデ。上半横仪又は左上がりの条痕。 高: 8.8 (内) ナデ。			伊勢西泊原部	II-2?
写真1-8 美?	22次	S D-2302	第3層	幅: 30 (内) 横位の条痕。 高: 3.3 (内) ナデ。			伊勢西泊原部	II-2?
写真1-9 素	22次	S D-1302	第1層	幅: 52 (内) 亂れ底の直線文。 高: 5.4 (内) ナデ。			伊勢西泊原部?	II-2?
写真1-10 素	22次	S D-1302	第1層	幅: 46 (内) 横位ナヘ。口縁部底に直線文、口縁部曲部に斜文。 高: 7.3 (内) ナデ。口縁部ヨコナヘ。			近江系	II-?
写真2-1 素	22次	S K-1303	第1層	口径: 36.0 (内) 剥離上がりナヘ、剥離部横位ナヘ、口縁部に剥離。		(内) 剥離下半に剥離着。		II-1
写真2-2 素	22次	S K-2302	第3層	幅: 18.1 (内) 剥離ナギキ。剥離上: 10以上のハラ剥離底直線文と竹管文。剥離 位に15cmのハラ剥離底直線文。 (内) ナデ。剥離のための隙間。			既然	II-2
写真2-3 素	22次	S K-2302	第5層	口径: 24.0 (内) 剥離ナヘ。口縁部剥離底直工具による剥離。 剥離ナナ。口縁部剥離ナヘ。			大和型素 外縁付付着 内縁付化物付着	II-2
写真2-4 素	22次	S K-2302	第4層	口径: 24.0 (内) 剥離部位ナヘ。口縁部剥離ナヘ。口縁部に剥離。 剥離ナナ。口縁部剥離ナヘ。			大和型素 外縁付付着 内縁付化物付着	II-2
写真2-5 素	22次	S K-2302	第6-7層	口径: 14.4 (内) 剥離部位ナギキ。口縁部ヨコナヘ。底部兩面板状工具による ナナ。			外縁付付着 内縁部上半に炭化物付着	II-2
写真3-3 長振束	22次	S D-1302	第1層	口径: 22.0 上位: 13.5 中位: 13.5 底位: 4.6 (内) 剥離部位ナギキ。口縁部ヨコナヘ。底部兩面板状工具による ナナ。			半完新品	V-2
写真3-5 長振束	22次	S D-1302	第1層	口径: 13.0 (内) 剥離部位ナギキ。口縁部ヨコナヘ。剥離部上半左上がりナヘナナ。剥離部ヨコナヘ。 (内) 剥離部下半左上ナギキナヘナナ。上ナナ。剥離部ナヘ-剥離ミギキ。			口縁部直下に剥離底直線文に よる記号文	V-2
写真3-6 長振束	22次	S D-1302	第1層	口径: 11.0 (内) 剥離部位ミギキ。剥離部右上がリタキナ。剥離部ヨコナヘ。 剥離部ナナナナ。剥離部ナヘナナ。口縁部ヨコナヘ。				V-2
写真3-7 長振束	22次	S D-1302	第2層	口径: 15.0 (内) 剥離部ナギキナ。剥離部左ナギキナ。剥離部ヨコナヘ。				V-2
写真4-3 長振束	22次	S D-1302	第1層	口径: 11.0 (内) 剥離部ナギキナ。剥離部ヨコナヘ。剥離部ナナナナ。剥離部ナヘナナ。口縁部ヨコナヘ。			剥離ナ方に二重のナラ剥離直 線を輪状にめらせる	V-2
写真4-4 長振束	22次	S D-1302	第1層	口径: 10.0 (内) 表面剥離のため、調査不詳。				VI
写真4-5 長振束	22次	S D-1302	第2層	幅: 15.0 (内) 剥離部ナギキナ。剥離部ヨコナヘ。ナナ。口縁部ヨコナヘ。			剥離ナ上端にナヘによる記号文	VI
写真4-6 把付 短振束	22次	S D-1302	第2層	口径: 10.9 幅: 15.4 (内) 剥離部ナギキナ。剥離部ヨコナヘ。ナナ。口縁部ヨコ ナヘ。口縁部底にナヘによる記号文。 (内) 剥離部下半左上がりナヘナナナナ。上ナナ。口縁部ヨコナヘ。			剥離部の底面以外に既存着 把手は挿入 剥離に押しだれて把手上 部が少し変形	V
写真5-3 短振束	22次	S D-1302	第1層	口径: 8.1 幅: 9.0 底径: 4.2 (内) ナデ。縫合孔2孔-1封二組。 (内) 底部ナヘ。剥離ナナ。			完形品	V

写真番号	銘 賞 名	調査 大数	遺 積 名	層 位	直径(cm)	孔幅(cm)	厚さ(cm)	重量(g)	備 考
写真6-11	圓元通寶	22枚	2 トレス半	近世包含層	2.41	0.67	0.12	240	
写真6-12	皇宋通寶	22枚	1 トレ中央東	近世包含層	2.37	0.75	0.10	282	
写真6-13	寛永通寶	22枚	S D - 2051	第2層	2.41	0.60	0.09	245	近世舟戸SK-2001の遺物
写真番号	器 様	調査 大数	遺 積 名	層 位	長さ(cm)	幅(cm)	厚さ(cm)		備 考
写真7-1	石顎	22枚	S D - 1104	第3層	19	1.7	0.4		
写真7-2	石顎	22枚	S D - 1102	第1層	34	1.9	0.3		表面白色化すむ
写真7-3	石顎	22枚	S D - 1102	第1層	35	1.6	0.3		
写真7-4	石顎	22枚	S D - 1102	第1層	33	1.9	0.7		未成品
写真7-5	石顎	22枚	S D - 1102	第1層	(21)	1.2	0.6		先端と基部欠損
写真7-6	石顎	22枚	1 トレ	古代包含層	25	1.6	0.4		基部欠損
写真7-7	石顎	22枚	S K - 2107	第1層	25	1.0	0.3		
写真7-8	石顎	22枚	S K - 2109	第3層	27	1.7	0.2		
写真7-9	石顎	22枚	S D - 3001	第1層	39	1.3	0.4		
写真7-10	鐵石	22枚	S D - 1101	第5層	(143)	2.9	1.7		転用により先端丸く加工 被打磨美しい
写真7-11	打製石劍	22枚	S D - 2101	第5層	(141)	3.1	1.4		基部長1cm、刃部は3.1cmを残し先端欠損
写真7-12	打製石劍	22枚	S D - 1101	第1層	(83)	2.7	1.2		先端の破片
写真7-13	打製石劍	22枚	S D - 3051	第1層	(56)	3.8	1.6		基部の破片
写真7-14	打製石劍?	22枚	S D - 1101	第2層	(46)	2.4	0.9		
写真7-15	打製石劍	22枚	1 トレ北半北	近世包含層	(48)	3.8	1.2		
写真7-16	打製石劍?	22枚	S K - 2102	第2層	(67)	3.0	1.1		
写真7-17	打製石劍?	22枚	S K - 2102	第2層	(48)	2.5	0.8		
写真7-18	打製石劍	22枚	S D - 2101	第5層	(33)	2.7	1.2		
写真7-19	尖頭器	22枚	2 トレ東昇	中世包含層	32	1.6	0.7		
写真7-20	石小刀	22枚	S D - 1051	第1層	105	2.6	0.7		
写真7-21	石顎	22枚	S D - 1101	第2～3層	55	1.4	0.9		
写真7-22	石顎	22枚	S D - 1102	第1層	57	2.3	1.0		
写真7-23	石顎	22枚	S D - 1115	第1層	39	2.3	0.8		
写真7-24	石顎	22枚	S D - 1001	第1層	72	3.4	1.4		
写真7-25	石顎	22枚	S D - 1061	第1層	35	1.4	0.6		
写真7-26	石顎	22枚	1 トレ北半北	生糸包含層	41	1.9	0.6		
写真7-27	石顎	22枚	Pt-3126	第1層	34	1.1	0.6		
写真8-1	石庖丁	22枚	S D - 1102	第1層	(15)	0.0	0.6		流紋岩質
写真8-2	石庖丁	22枚	S D - 1062	第2層	(34)	4.3	0.6		流紋岩質
写真8-3	石庖丁	22枚	S K - 2102	第5層	(73)	5.4	1.2		未成品 流紋岩質
写真8-4	石庖丁	22枚	S D - 3104	第1層	(76)	4.8	0.6		未成品 流紋岩質
写真8-5	石庖丁	22枚	S K - 1110	第1層	(52)	4.6	0.8		結晶片岩質
写真8-6	石庖丁	22枚	S D - 2101	第4層	(48)	4.7	0.7		結晶片岩質
写真8-7	石庖丁	22枚	S D - 2101	第2層	(64)	3.8	0.6		結晶片岩質
写真8-8	圓通不明品	22枚	S K - 2103	第2層	69	3.9	0.4		結晶片岩質 石塗を施す。背面を剥ぎ離位も半分に打ち抜る 両刃部に研削する 未貯留の穿孔あり
写真8-9	石庖丁	22枚	S D - 2051	第3層	(72)	3.4	0.7		結晶片岩質
写真8-10	石庖丁	22枚	1 トレ	近世包含層	(56)	3.2	0.9		片麻岩質?
写真8-11	大形石庖丁	22枚	S D - 3051	第1層	(77)	7.3	1.3		結晶片岩質
写真8-12	結縛牽	22枚	S D - 2101	第5層	38	3.7	0.6		孔径0.7cm 結晶片岩質
写真8-13	環状石斧	22枚	1 トレ北半南	近世包含層	(44)	(2.6)	1.8		
写真8-14	太盤輪刃石斧	22枚	3 トレ中	近世包含層	(57)	(3.5)	3.8		
写真8-15	鐵石	22枚	1 トレ南半南	近世包含層	63	3.0	4.0		
写真8-16	瓦輪塔(水輪)	22枚	1 トレ南半南	近世包含層	高さ 200	21.0	(160)		最高点 底盤が大きく欠損する 高さ18cmの本体の上部に高さ2cmの突起がつく

* 法量の()で示した数値は残存量。



1・3・4: 壺 2・5・6: 壺 7~10: 撥入土器

写真1 S K-3151・S D-1104出土土器



1



2



3



4



5



6

1・3～5：甕 2：壺 6：高坏？（内面ベンガラ付着）

写真2 SK-2101ほか出土土器



1・2：広口壺 3・5・6：長頸壺 4：長頸壺（記号）

写真3 SD-1102出土土器（1）



1



2



3



4



5



6



7

1 ~ 5 : 長頸壺

6 : 把手付短頸壺

7 : 台付無頸壺

写真4 S D-1102出土土器 (2)



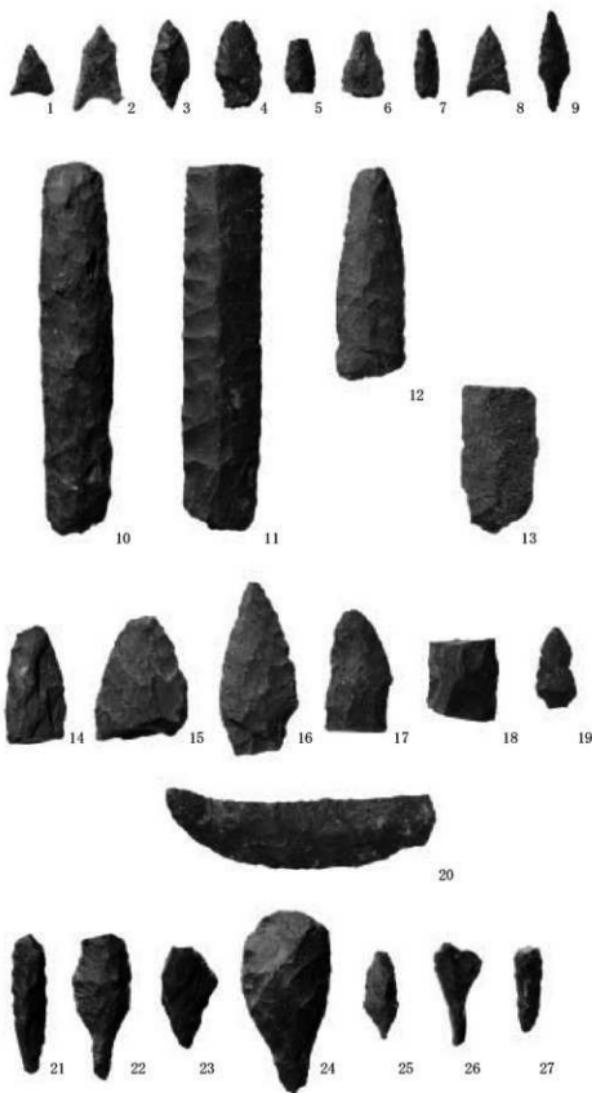
1: 結合形土器 2 : 高坏 3 : 無頸壺 4 : 鈎 5 ~ 7 : 壺 8 : 梗入土器 (近江壺)

写真 5 S D-1102出土土器 (3)



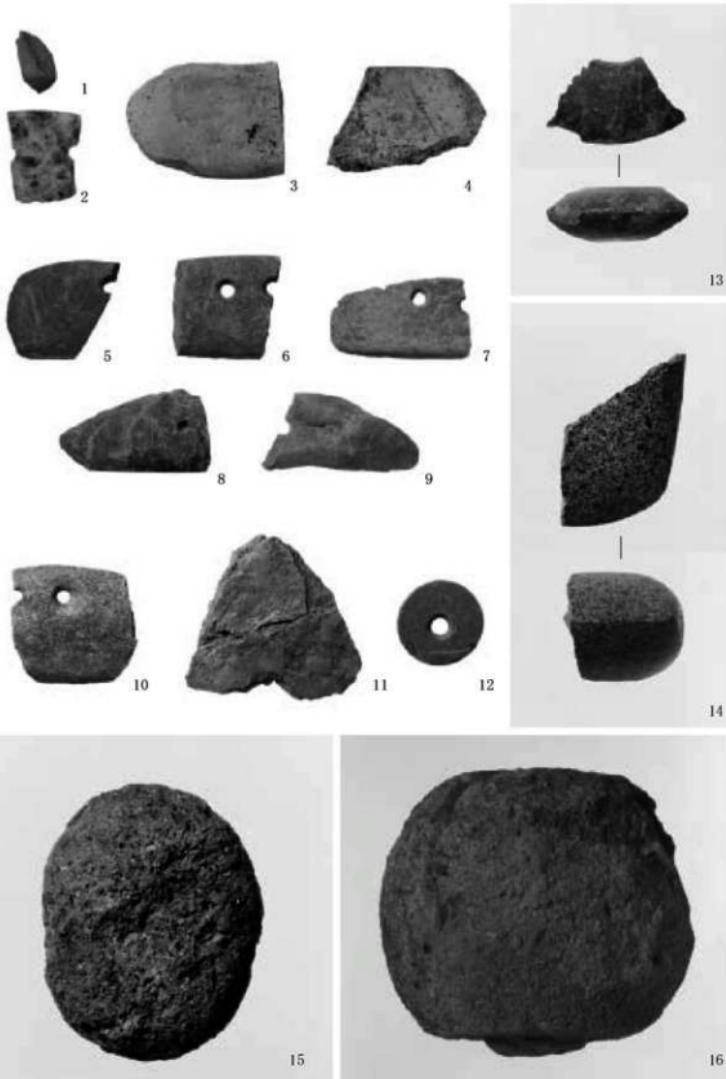
1～6：小形丸底壺 7：甕 8：布留式甕 9：軒丸瓦 10：軒平瓦 11：開元通寶 12：皇宋通寶
13：寛永通寶

写真6 S D-2101上層出土土器・中世の遺物



1～9：石鏃 10～13：石劍 14～19：石劍片ほか 20：石小刀 21～27：石錐

写真7 打製石器



1～4：流紋岩製石庖丁 5～9：結晶片岩製石庖丁 10・11：大形石庖丁 12：石製紡錘車 13：環狀石斧
14：大型始刃石斧 15：敲石 16：五輪塔（水輪）

写真8 磨製石器

唐古・鍵遺跡出土の分銅形土製品

藤田 三郎

1. はじめに

本町では、平成21年度から緊急雇用創出事業の1つとして「町内遺跡出土遺物整理事業」が採択され、実施している。この事業のうち、21年度と22年度前半は秦樂寺遺跡の古墳時代玉作り関係遺物の抽出（選別）作業を実施し¹⁾、22年度後半からは唐古・鍵遺跡の再整理事業をおこなっている。

唐古・鍵遺跡の調査については、概報や年報においてそのごく一部を報告しているが、調査初期であった1980年代では応急的な整理作業を実施したのみであった。このため、遺物の取り扱いについては、その基準が曖昧なまま収納しているものが多くあり、資料のデータ化・数量化ができないまま今日に至っているのが現状である。また、唐古・鍵遺跡の出土遺物は約12,000箱（W34cm×D54cm×H15cm）を保管しており、収納スペースの課題もかかえている。このような状況のため、遺物内容の圧縮も兼ねて実施している。

平成22年度は、唐古・鍵遺跡第20次と第22次調査の再整理を実施した。いずれの調査も既に応急整理をし、その概要^{2)[3]}を報告しているので主要なことはそれらを参照してもらいたい。今回の再整理事業では、土器を収納しているコンテナを整理したため、土器類や土製品の選別が中心であった。土器類では搬入土器や特殊土器（ミニチュア土器・異形土器・赤色塗彩土器・転用土器・被熱土器）、絵画土器を、土製品では土器片円板や焼土塊等の抽出をおこなった。

これらの再整理事業を実施した中で注目される遺物が多くみられたが、今回、特に重要と思われる分銅形土製品について紹介する。分銅形土製品は、既に唐古・鍵遺跡第48次調査で出土しているが、これは報告後⁴⁾の整理作業で見つかったため、今回、第22次調査の分銅形土製品と併せて紹介する。

2. 第22次調査の概要

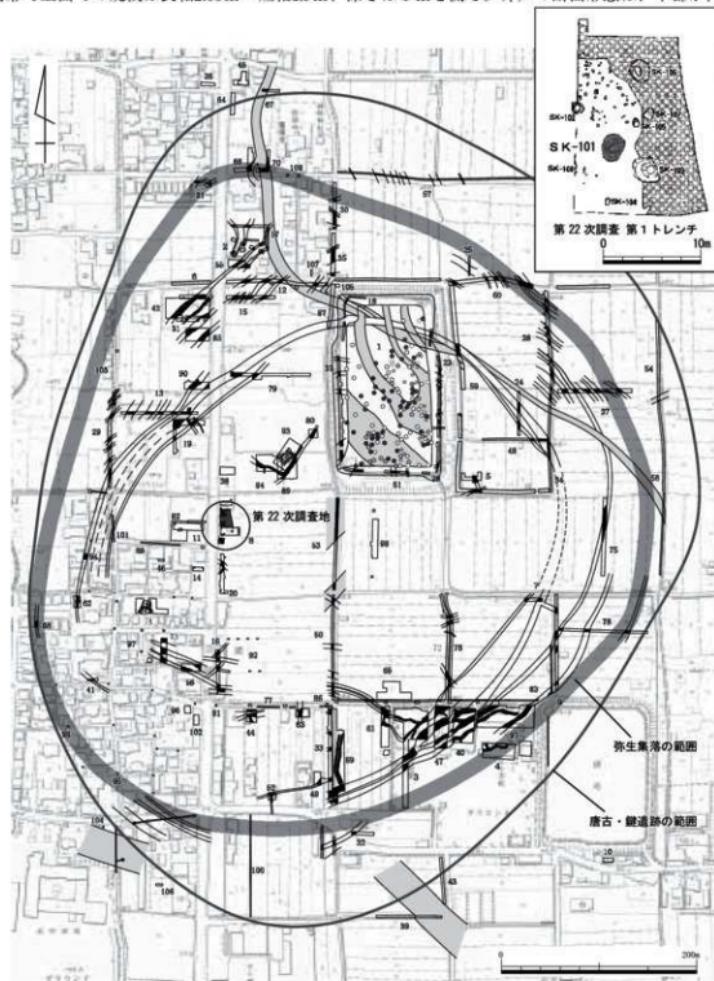
唐古・鍵遺跡第22次調査地は国道24号線沿いに位置し、弥生時代と中世の2時期の遺構遺物を検出している⁵⁾。弥生時代の遺構は、集落の西地区の微高地西端に営まれている。中世の遺構は、「唐古南氏居館推定地」内の一画に営まれたものであり、居館関係の土坑や区画小溝、居館を囲む大溝などを検出している。

弥生時代の遺構は、弥生時代前期から後期までの土坑や溝、柱穴を検出した。なかでも前期から中期の遺構遺物が特に多く、西地区的居住区の一画であることを示している。調査区の東端は、土地区画に沿うように推定幅6mの中世の大溝が掘削されており、弥生時代の遺構は、ほとんどが削平を受け消滅していた。この中世大溝の出土遺物の大半は、これら破壊された遺構の弥生土器である。

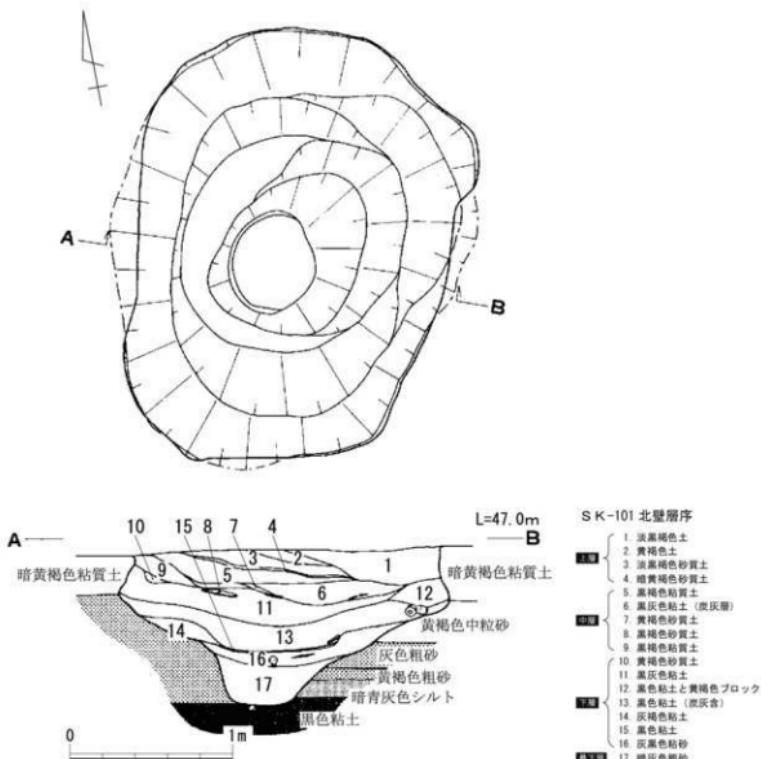
中期の主要遺構としては、SK-103（大和第III-1様式）・SK-105（大和第III-4様式）・SK-101（大和第IV-1様式）の井戸3基があり、南東から北西方向に並んで検出した。また、SK-102（大和第III-3様式）は炭化米を多量に出土したやや浅い土坑であるが、前者土坑の延長方向にあ

ることから井戸の可能性もある。おそらく弥生時代の地下水の「水道」であった場所を選んで掘削したのであろう。これら井戸は、時期が少しずつ異なるため、井戸埋没後に順次掘削されていったものと考えられる。

今回紹介する分銅形土製品は、このSK-101から出土した。このSK-101の平面形態は、ほぼ楕円形で上面での規模は長軸2.65m・短軸1.9m、深さは1mを測る。井戸の断面形態は、下部が円筒



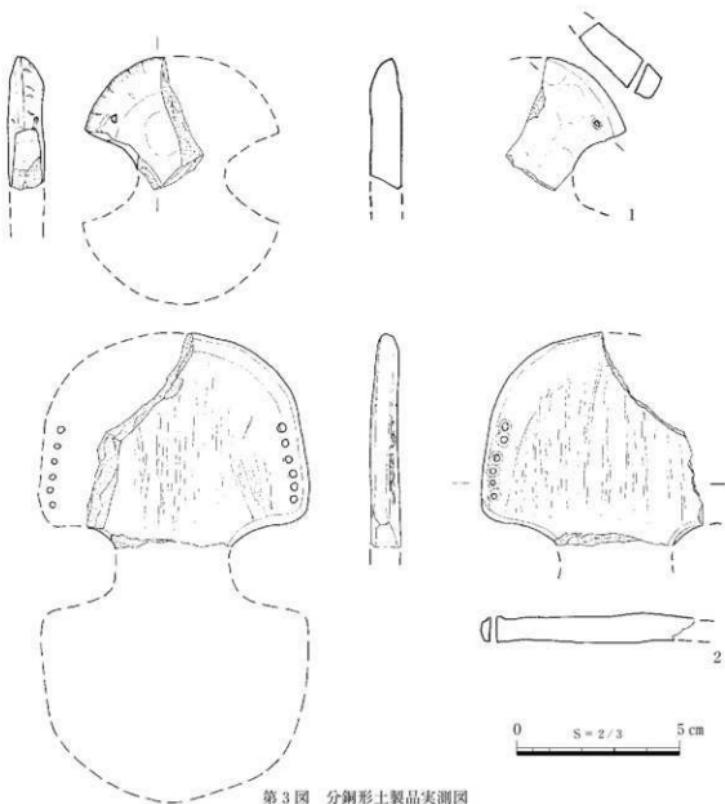
第1図 唐古・鍵遺跡第22次調査位置図（左下：S = 1/5,000、右上：S = 1/500）



第2図 SK-101平面図及び北壁断面図 (S = 1/30)

状で上部が漏斗状に拡がる形態である。唐古・鍵遺跡の井戸の中では平面規模はほぼ同等のものが多いが、深さについては1mと比較的浅い部類にはいる。おそらく掘削途中に粗砂層があり地下水位が高かったためであろう。井戸の堆積層は17層に細分されるが、大きく4分層（上層・中層・下層・最下層）される。最下層の堆積は井戸使用時の堆積、下層から上層の堆積は井戸機能喪失後の堆積で、粘土と砂質土で構成される。遺物は下層下位（13・16層）からミニチュア土器4点と木製杓子1点、下層上位（11層）では半完形土器や大型壺に描かれた絵画土器片など大形破片が出土した。中層からも土器片が多く出土したが細片が中心であった。下層のミニチュア土器と木製杓子が井戸埋没時の供獻遺物と考えられる。

分銅形土製品は、土器細片を多く含む中層から出土した。小片のため、土器片の中に混在していたことから、見過ごしていた土製品である。本遺物の所属時期は、出土した層位から大和第IV-1様式になる。



第3図 分銅形土製品実測図

3. 第22次調査出土の分銅形土製品

本土製品は全体の1/6程度の小破片で、分銅形の円弧から括れ部にかけての部分に相当するとみられることや後述の小孔から分銅形土製品として判断した（第3図-1）。表・裏面の判断はしがたいが、やや湾曲した面と平坦な面を有しているため、前者を表面、後者を裏面とした。

本土製品は、小判状の粘土板を製作した後、ケズリによって括れ部分を作り出している。表・裏面はナデ調整で仕上げた文様をもたない簡素なものであるが、裏面には指頭圧痕と思われる凹みがわずかにみられる。本土製品の括れ部ちかくには、長径2mm程度の貫通する孔がある。この孔は、串状工具による刺突で表面から裏面に向かってあけられている。縁辺部は、焼成時の乾燥による収縮でひび割れが生じている。色調は暗褐色を呈する。胎土は雲母を含む粘土であるが、砂粒を混和させないものである。残存する長軸4.0cm、短軸3.7cmで、復元すれば7.5cmほどの大きさになると思われる。

4.まとめ

唐古・鍵遺跡の分銅形土製品は本例で2例目となった。1例目は第48次調査の古墳時代前期の井戸（SK-1111）から出土した（第3図-2）。本土製品は、この時期の可能性もあるが、井戸掘削時に弥生時代中・後期の遺物包含層を切っているので、弥生時代中期の所産の可能性が高い。1/4程度残存する破片であるが、両側に括れ部が残存することから分銅形土製品と判断できる土製品である。円弧を呈するのではなく、やや長方形ぎみであることから西部瀬戸内地域の形態にちかいものと思われる。両面にはナデ後ミガキ調整を施している。文様等は描かれていないが、側面には6つ的小円孔があけられている。

唐古・鍵遺跡第22次調査の分銅形土製品の所属時期が大和第IV-1様式であり、中期後半には瀬戸内地の精神文化がこの地に到達していたことが確実になった。唐古・鍵遺跡では中期後半以降、土器製作手法に瀬戸内地の影響がみられることや搬入土器も存在していることから、一連の流れになるものであろう。なお、天理市平等坊・岩室遺跡でも2点の分銅形土製品が出土しており^①、奈良県で4例目となった。分銅形土製品の分布としては東端であり、内陸部まで分布している意義は大きい。

註

- 1) a. 田原本町教育委員会2009『田原本町文化財調査年報19』
b. 田原本町教育委員会2010『平成22年度夏季ミニ展示 泰楽寺遺跡』田原本の遺跡VI
- 2) 田原本町教育委員会1986『田原本町埋蔵文化財調査概要3』
- 3) 田原本町教育委員会1986『田原本町埋蔵文化財調査概要4』
- 4) 田原本町教育委員会1992『田原本町埋蔵文化財調査年報3』
- 5) 3) に同じ。
- 6) 天理市教育委員会2010『天理市埋蔵文化財調査概報 平成17年度』

唐古・鍵遺跡第37次調査出土の魚類遺存体について

田原本町教育委員会

藤田 三郎

奈良文化財研究所 客員研究員

丸山 真中

1. はじめに

日本列島は火山灰に由来する酸性土壤に覆われ、乾燥地の遺跡では動物遺存体が保存状態に恵まれないことが一般的である。しかし、貝塚、低湿地、水中、砂丘などの環境にある遺跡では、動物遺存体がしばしば良好な状態で出土する。唐古・鍵遺跡では、1937年の唐古池の工事に伴う発掘調査をはじめとして¹⁾、低湿地部から数多くの動物遺存体が出土している。これまでに唐古・鍵遺跡では、海水産の魚目類が出土しているが²⁾、出土遺種や数量の詳細は明らかになっていない。

今回、唐古・鍵遺跡第37次調査の土坑SK-2130（大和第III-3様式：弥生中期中葉後半）から出土した魚類遺存体を同定し、その概要を報告する。魚類遺存体の破片数は156点にのぼり、種類や部位を同定したものは82点を数える。その内訳は淡水魚56点、海水魚26点であり、魚類の約7割を淡水魚が占めている（第1表）。また、これら魚類のほか海水産のウニ類の棘を2点同定している。なお、動物遺存体の同定は、奈良文化財研究所所蔵の現生骨格標本と形態学的な比較を肉眼によって、あるいはルーペ、実体顕微鏡を用いておこなった。（丸山）

2. 第37次調査 S K-2130の概要

2011年現在、唐古・鍵遺跡の調査は110次を数える調査を実施している。これまでの調査から唐古・鍵遺跡は、弥生時代の拠点的な大環濠集落であることが判明している。また、検出された遺物は多種多様で膨大な量になっている。

第1表 SK-2130（唐古・鍵遺跡第37次調査）出土の魚類遺存体種名表

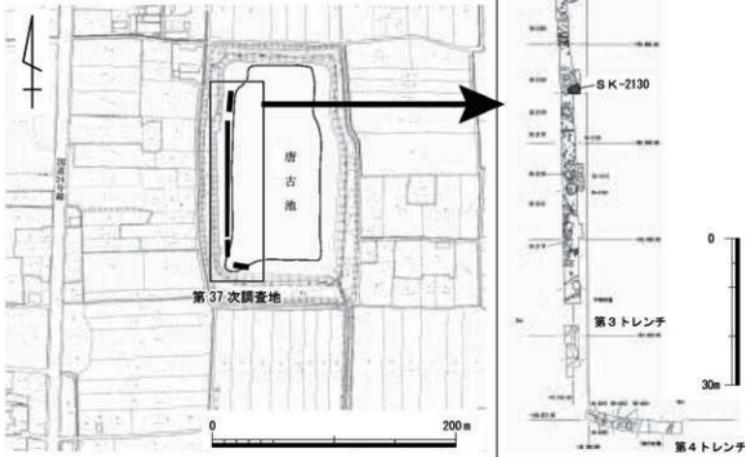
脊椎動物門	Vertebrata
硬骨魚綱	Osteichthyes
ウナギ目	Anguilliformes
ウナギ科	Anguillidae
ウナギ	<i>Anguilla japonica</i>
ニシン目	Clupeiformes
ニシン科	Clupeidae
ニシン科の一種	Clupeidae gen. et sp. indet.
コイ目	Cyprinida
コイ科	Cyprinidae
コイ	<i>Cyprinus carpio</i>
フナ属の一種	<i>Carassius</i> sp.
コイ科の一種	Cyprinidae gen. et sp. indet.
ドジョウ科	Cobitidae
ドジョウ科の一種	Cobitidae gen. et sp. indet.
ナマズ目	Siluriformes
ナマズ科	Siluridae
ナマズ	<i>Silurus asotus</i>
サケ目	Salmoniformes
アユ科	Plecoglossidae
アユ	<i>Plecoglossus altivelis</i>
ボラ目	Mugiliformes
ボラ科	Mugillidae
ボラ科の一種	Mugillidae gen. et sp. indet.
スズキ目	Percidae
タイ科	Sparidae
タイ科の一種	Sparidae gen. et sp. indet.
サバ科	Scombridae
サバ属の一種	<i>Scomber</i> sp.

今回資料報告する唐古・鍵遺跡第37次調査は、唐古・鍵遺跡の北部に位置し、現在の唐古池の西側堤防の内側にある（第1図）。この調査は溜池改修工事に伴う事前調査として、1989年1月～4月にかけて実施したもので、西側堤防内側の法面に沿うように幅約2.5m、総延長143mにわたって4つのトレンチを設定した（北から第1～4トレンチ）。設定したトレンチのすぐ東側は、1936・1937年の唐古池の調査時の採土により急激に落ち込んでおり、本調査地はちょうど採土を免れたところであった。

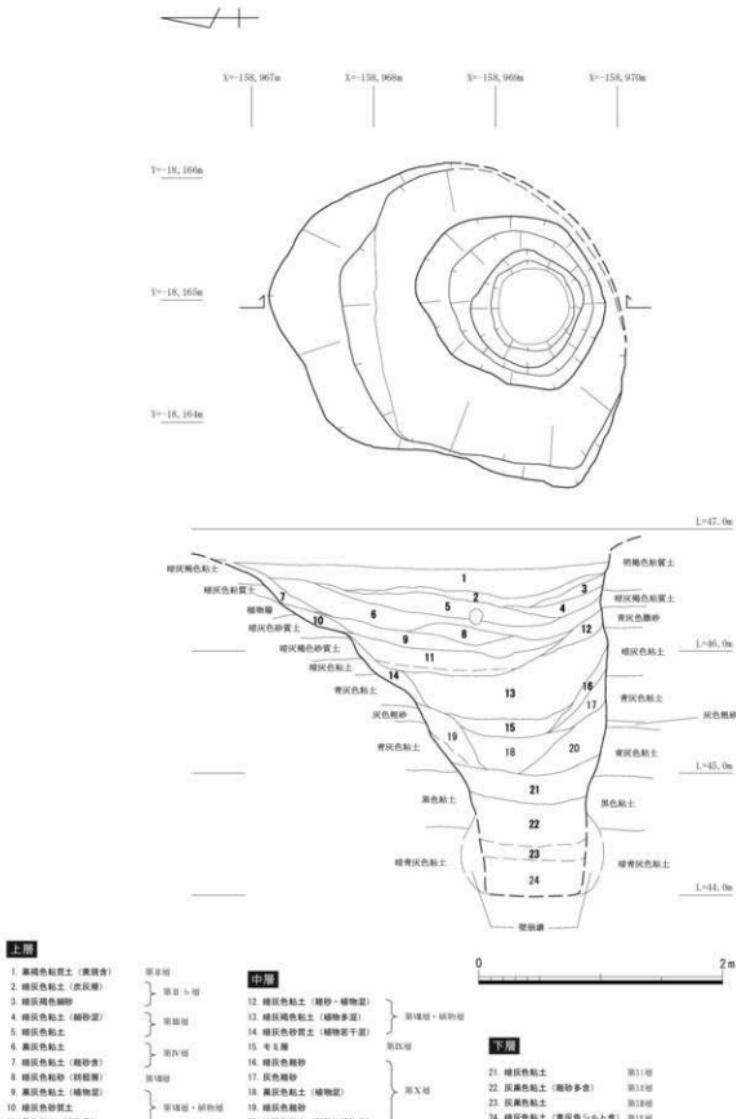
調査では、各トレンチで弥生時代前期から後期までの土坑や溝、柱穴と中世の素掘り小溝群を検出した。第1トレンチでは弥生時代中期の大環濠（SD-1101）を、第2～4トレンチでは居住遺構を検出した。のことから、この調査区が唐古・鍵遺跡の北西部を囲む環濠から内側の居住区にあたることが判明した。特に第2トレンチでは、良好な微高地

上に弥生時代前期から後期に至る井戸や区画溝、柱穴などの居住遺構を検出した。

今回報告する弥生時代中期の井戸SK-2130は、第2トレンチのほぼ中央で検出した井戸で、唐古・鍵遺跡の井戸の中でも大形の部類に属するものである（第2図）。井戸上部の南東側は、前述の池内採土による削平を受けているが、ほぼ橢円形の平面形態で、上面での規模は長軸3.1m、短軸2.4mで、深さは28mを測る。井戸の断面形態は、下部が円筒状で上部が漏斗状に拡がる形態である。井戸の堆積層は24層に細分されるが、大きくみると3分割（上・中・下層）14分層（遺物取上層序に対応）される³⁾。井戸下層の堆積は井戸使用時の



第1図 唐古・鍵遺跡第37次調査位置図及び遺構平面図（左：S = 1/4,000、右：S = 1/1,000）

第2図 S K-2130構造平面図・土層堆積図 ($S = 1/40$)

堆積、井戸中層の堆積は井戸浚え後の堆積、上層は井戸機能喪失後の堆積と考えられる。これらの土層は主に粘土層で構成されているが、上層下位である第VII層では植物層・初穀層がみられ、井戸機能喪失後の植物と初穀を一括廃棄したものと思われる。

出土遺物は、土器のほか木製品や石器、獸骨など多様なものがあり、中・下層では自然流入遺物、上層では土器片や初穀等の不要品としての廃棄遺物である。このような遺物とは異なり、井戸への供獻遺物あるいは何らかの祭祀行為の投棄遺物も出土している。第VII層では着柄鋤と卜骨各1点、第VIII層では広口壺2点と大型細頸壺1点、第X層では高杯と小型水差形土器2点・卜骨1点、第XI層では無紋の広口壺（壺D）1点、第XII層では小型の水差形土器（生駒山西麓産）が出土しており、土器はほぼ完形品である。

さて、今回報告する魚類遺存体は、おもに井戸の堆積土を1mmメッシュの篩で水洗し取り出した遺物である。前述したように井戸の内容物が良好で重要であったため、堆積土は上層上位の第II・IV層はサンプル抽出、上層下位から下層にあたる第VII層以下は全ての堆積土を持ち帰った。その土壤の量は、遺物箱（W34cm×D54cm×H15cm）で約142箱である。(藤田)

3. 魚類遺存体の特徴

淡水魚はナマズが25点と最多の出土量であり、同定した魚類遺存体の32.5%を占める。これに続いてアユ9点、コイ科7点、ナマズとギギの判別ができないものが4点、ウナギとドジョウ科3点、コイ、ギギが2点ずつ、フナ属が1点出土している。ナマズは椎骨が大部分を占め、歯骨や方骨が少量に留まる。ナマズの椎骨の中には、被熱して白色を呈するもののが含まれる。大きさは、体長20cm以上の個体が大部分を占めるが、それ以下の小さな個体も含まれる。アユ、コイ科、ドジョウ科は椎骨のみが出土しており、ウナギは前上顎骨・節骨・鰓骨板と椎骨が、フナ属は主鰓蓋骨のみが、ギギは胸鰓棘のみが、コイは咽頭歯のみが出土している。アユ、コイ科、フナ属は体長20cm以下、ドジョウ科は体長10cm以下、ウナギは体長50cm以下と推定される。

海水魚は、ニシン科が14点と最も多く出土している。これに続いてエイ・サメ類5点、タイ科4点、サバ属2点、ボラ科1点が出土している。ニシン科はマイワシなどのイワシ類であり、椎骨が大部分を占め、主鰓蓋骨や主上顎骨など頭部を構成する部位も出土している。大きさは、体長20cm以下のものばかりである。エイ・サメ類はいずれも椎骨で、椎体横径10mm以下を測る。タイ科は顎骨から遊離した歯のみが、サバ属は椎骨と舌顎骨が、ボラ科は主鰓蓋骨といった頭部が出土している。サバ属は体長20cm程度、ボラ科は体長30~40cmと推定される。

これらのはかに淡水魚ではアユ、コイ科と思われるものが2点ずつ、ナマズと思われるものが1点出土している。海水魚ではニシン科、ボラ科、ハタ科と思われるものが1点ずつ出土しているが、いずれも種の同定には至っていない。(丸山)

4. 層位別の特徴

魚類遺存体は第II-b・IV・VII・VIII・IX・X・XI・XII・XIII層から出土している。魚類遺存体が最も多く出土したのは第VII層で34点を数え、ナマズやコイ科を中心とした淡水魚を主体としており、ニシン科やタイ科といった海水魚が含まれている（第2表）。次に第XII層で22点が出土しており、ナ

第2表 SK-2130 (唐古・鍵遺跡第37次調査) 出土の魚類遺存体集計表

層位	生息	小分類	部位	左	右	計
II-b層	淡	ナマズ	歯骨		1	1
計					1	
IV層	海	タイ科	遊離歯	1	1	
計				1		
VII層	淡	アユ	椎骨	3	3	
		コイ	頭頭歯	2	2	
		コイ科	椎骨	4	4	
		ナマズ	椎骨 方骨	12	12	
		ナマズ/ギギ	胸鰓棘	3	3	
	海	ギギ	胸鰓棘	1	1	
		ドジョウ科	椎骨	1	1	
		エイ・サメ類	椎骨	1	1	
		ニシン科	歯骨 角骨 主鰓蓋骨 椎骨	1	1	
		タイ科	遊離歯	1	1	
計				34		
VI層	淡	アユ	椎骨	4	4	
		ナマズ	椎骨	5	5	
		ギギ	胸鰓棘	1	1	
		コイ科	椎骨	3	3	
		ドジョウ科	椎骨	1	1	
	海	エイ・サメ類	椎骨	2	2	
		ニシン科	主上頸骨 椎骨	1	1	
		タイ科	遊離歯	1	1	
		計		22		

層位	生息	小分類	部位	左	右	計
IV層	海	サバ属	舌顎骨 椎骨	1	1	1
計						
X層	淡	ウナギ	椎骨	1	1	
		ナマズ	胸鰓棘 椎骨	1	1	
	海	エイ・サメ類	椎骨	1	1	
		ニシン科	椎骨	1	1	
		計		5		
XI層	淡	アユ	椎骨	1	1	
		フナ属	主鰓蓋骨	1	1	
	海	エイ・サメ類	椎骨	1	1	
		ニシン科	椎骨	2	2	
		ボラ科	主鰓蓋骨	1	1	
計				6		
XII層	淡	アユ	椎骨	1	1	
		ウナギ	椎骨	1	1	
	海	ナマズ	胸鰓棘 椎骨	3	3	
		ニシン科	主鰓蓋骨	1	1	
		タイ科	遊離歯	1	1	
計				8		
XIII層	淡	ウナギ	前上顎骨-篩骨- 鰓骨板	1	1	
		ドジョウ科	椎骨	1	1	
	海	ナマズ/ギギ	胸鰓棘	1	1	
		計		3		
		総計		82		

マズ、アユなどの淡水魚、ニシン科とタイ科といった海水魚が含まれている。これら第V・VI層で56点と7割弱を占めており、両層で魚種の構成が類似していることが特徴的である。さらに下層の第IX・X・XI・XII・XIII層では淡水魚を主体に10点以下の出土である。一方、上層の第II-b・IV層では出土量が極端に少ない。種類を同定できなかった魚類を含めても、第V・VI層に出土が集中しており、これらの土層に魚類が多く含まれていたことを示している。

(丸山)

5. 唐古・鍵遺跡における魚類利用

唐古・鍵遺跡第37次調査のSK-2130では、淡水魚のナマズが最も多い(第3図)。その他の淡水魚ではウナギ、ギギ、コイ、フナ属、コイ科、ドジョウ科が見られるが、出土量はそれほど多くなく、ナマズを中心とした淡水魚の利用が盛んであったと考えられる。海水魚はニシン科を中心として、エイ・サメ類、タイ科、サバ属、ボラ科が出土している。

淡水魚のナマズが卓越していることは、唐古・鍵遺跡が内陸に位置することから、周辺環境を反映した魚類利用を窺うことができる。宮ノ下遺跡¹⁾や亀井遺跡²⁾などの河内湖沿岸の弥生遺跡におけるナマズの出土頻度は高い。また、古墳時代の郡屋北遺跡、難波宮下層遺跡ではナマズが最多の出土量を示す³⁾。これら河内湖沿岸の弥生・古墳時代の遺跡から出土している魚類遺存体は食用となつたものと考えられ、ナマズが重要な水産物であったと言える。これらに対して大阪湾沿岸部の池上・

四ツ池遺跡では、マダイなどの海水魚が主体である⁷⁾。これら大阪の弥生遺跡では、河内湖沿岸部では淡水域を、大阪湾沿岸部では汽水～鹹水域を主要な漁場としており、遺跡の立地と魚種組成に関連がみられる。また、伊勢湾沿岸のやや内陸に位置する朝日遺跡では、淡水魚が海水魚よりやや多く出土しており、淡水魚ではコイ科、ナマズ属、アユが主体である⁸⁾。近畿・東海地方の弥生遺跡では淡水魚が出土することは一般的であり、その主要種がコイ、フナ、ナマズと言え、これら3種類の淡水魚は水田漁撈を示唆する魚種であり、唐古・鍵遺跡でも集落周辺における河川、湖沼以外に、水田及びそれに伴う灌漑施設で漁獲した可能性もある。

特筆されるのは、唐古・鍵遺跡では海水魚もまとまった量が出土していることである。第37次調査で出土したニシン科（イワシ類）、タイ科、サバ属、ボラ科が出土しており、他の地点ではサメ類、マイワシ、ハモ属、さらに海水産貝類のアカニシ、ヘナタリ、海生哺乳類のクジラ類が出土している⁹⁾。このように唐古・鍵遺跡と海岸部との交流を貝類及び魚類遺存体から見ることができる。奈良盆地では縄文時代晩期の櫛原遺跡でマダイ、クロダイ属、フグ科、スズキ属、コショウダイ属といった海水魚やウミガメ類、クジラ類が出土している¹⁰⁾。また、古墳時代の南郷大東遺跡ではクエ¹¹⁾、飛鳥時代の飛鳥京苑池遺構ではボラ科、スズキ、ブリ属、コチ科¹²⁾、奈良時代の平城京東市跡ではボラ科、サケ属¹³⁾などの海水魚が出土している。

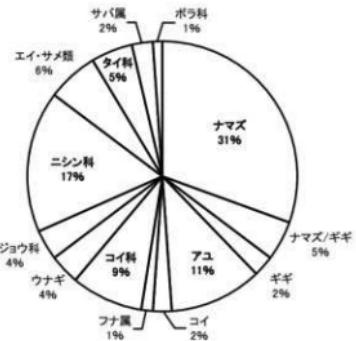
遺跡から出土する海水産魚貝類から、奈良盆地では海岸部との交流が窺える。唐古・鍵遺跡について言えば、出土している搬入土器から、大阪湾沿岸、和歌山湾沿岸、伊勢湾沿岸から海産物が持ち込まれた可能性が高い。奈良盆地の遺跡で出土している海産魚は、いずれの種類も同時代の海岸部の遺跡から出土する魚種であり、食用として持ち込まれたと考えても差し支えない。しかし、奈良盆地で海産物を日常的な食料としていたとは考えがたく、祭祀・儀礼など特別な場で供されたことも考えられよう。

S K-2130の第Ⅲ層では供獻された広口壺、大型細頸壺、水差形土器などの完形品が出土し、第X層ではト骨が出土しており、それぞれに祭祀・儀礼に関連した遺物が含まれていると考えて良いだろう。魚類遺存体を見れば、第Ⅲ層でナマズなどの淡水魚のほか海水魚のニシン科が出土しており、第X層では魚類遺存体の出土量が少ないが、ナマズ、ウナギ、ニシン科と淡水魚、海水魚の両方が出土している。他の土層と第Ⅲ層や第X層で出土している魚類遺存体を比較しても、出土量や魚種に目立った特徴は見られないが、祭祀に伴って利用された魚類である可能性も考えておきたい。

(丸山)

6. おわりに

唐古・鍵遺跡第37次調査で出土した魚類遺存体は、淡水産のナマズ、ウナギ、ギギ、コイ、フナ



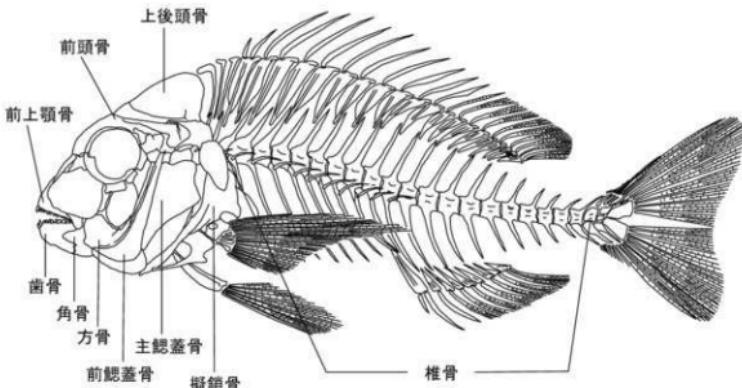
第3図 魚類遺存体の出土量比 (N=82)

属、コイ科、ドジョウ科、アユ、海水産のニシン科、タイ科、サバ属、ボラ科の12種類を同定した。いずれも食用となる魚種ばかりで、淡水魚が海水魚よりも多く出土しており、遺跡周辺の環境を反映していると考えられ、河川や湖沼、さらには水田や灌漑施設において漁獲されたものと考えられる。また、海水魚の出土によって海岸部との交流が明らかとなり、奈良盆地には绳文時代晚期から交通路が発達し、唐古・鍵遺跡に海産物が持ち込まれたと考えられる。唐古・鍵遺跡のような拠点的な集落であっても、日常的に海水魚を賞味することは難しいと考えられ、SK-2130の第Ⅸ層や第X層から出土している魚類遺存体のように祭祀・儀礼のような特別な場で消費された可能性も考えられる。今回は、唐古・鍵遺跡第37次調査のSK-2130の魚類利用の概要を報告するにとどまるが、今後、他の遺構、さらには奈良盆地内の他の遺跡での海水魚の出土状況などと比較をおこなうことなど、さらなる検討を経て、唐古・鍵遺跡における魚類利用の実態を明らかにすることが課題となる。

(丸山)

註

- 1) 小林行雄・末永雅雄・華岡謙二郎1976『大和唐古縄生式遺跡の研究』臨河書店
- 2) 田原本町教育委員会2000『唐古・鍵考古学ミュージアム展示図録』
- 3) 発掘調査時の遺物取上順序は通常アラビア数字で表記しているが、本項ではローマ数字で表記した。
- 4) 別所秀高1996『動物遺体』『宮ノ下遺跡第1次発掘調査報告書』第2分冊 東大阪市教育委員会・^④東大阪文化財協会 pp.157-338
- 5) a. 横野博幸・山西良平1980『動物遺体』『亀井・城山』^④大阪文化財センター pp.397-404。
b. 松井章1986『亀井遺跡（切り広げ部）出土の動物遺存体』『亀井（その2）』大阪府教育委員会・^④大阪文化財センター pp.423-484
- 6) a. 丸山真史2010『藤屋北遺跡出土の魚類遺存体』『藤屋北遺跡発掘調査報告書』大阪府教育委員会 pp.325-334



付図 魚類遺存体部位名称 (図はマダイ)

- b. 丸山真史2010「難波宮下層から出土した動物遺存体」「難波宮址の研究第十六」**大阪市文化財協会**
pp.73-81
- 7) 金子浩昌・牛沢百合子1980「池上遺跡出土動物遺体」「池上・四ツ池遺跡」第6分冊 自然遺物編 **大阪文化財センター** pp.9-32
- 8) 山崎健2005「朝日遺跡出土の魚類遺存体」「研究紀要」第6号**愛知県教育サービスセンター・愛知県埋蔵文化財センター** pp.34-45
- 9) 2) に同じ。
- 10) 丸山・橋本・松井2011「櫻原遺跡出土の動物遺存体」「重要文化財 櫻原遺跡出土品の研究」**奈良県立橿原考古学研究所** pp.281-294
- 11) 松井章2003「南郷大東遺跡出土の動物遺存体」「南郷遺跡群Ⅲ」**奈良県立橿原考古学研究所** pp.303-308
- 12) 丸山真史・松井章2007「飛鳥京菟池遺構から出土した動物遺存体」「青陵」**奈良県立橿原考古学研究所彙報**123号 **奈良県立橿原考古学研究所** pp.1-5
- 13) 中島和彦2004「平城京東市跡推定地（左京八条三坊十二坪・東三坊坊間路）の調査第27・28次」「奈良市埋蔵文化財調査概要報告書」**奈良市教育委員会** pp.87-102



写真1 唐古・鍵遺跡第37次調査出土魚類遺存体

田原本町における古道関連の遺構について

清水 琢哉

1. はじめに

奈良盆地の中央に位置する田原本町は、大和川支流の初瀬川・寺川・飛鳥川・曾我川の4河川が北流する沖積平野に立地する。田原本町北端付近で初瀬川の流れが大きく北西へと屈曲し、川西町北部周辺で盆地北部から南流する佐保川を含めて5河川が合流することになる。歴史的環境としては、北の平城京と南の飛鳥・藤原京の中間に位置し、両者を結ぶ古代交通網の上・中・下3道のうち、町の東端を中ツ道が、中央の寺川沿いを下ツ道が通る。そして、飛鳥と斑鳩を結ぶ筋違道も町の北西から中央南にかけて継続している（第1図）。

このように古代交通網にとって重要な位置にある田原本町域では、ここ十数年の発掘調査で古代道路関連遺構のデータが蓄積されつつある。平成22年度の唐古・鍵考古学ミュージアム秋季企画展で「道の考古学」を開催したこともあり¹⁾、ここで一度、田原本町内で検出した古代道路関連遺構の情報を整理しておきたい。

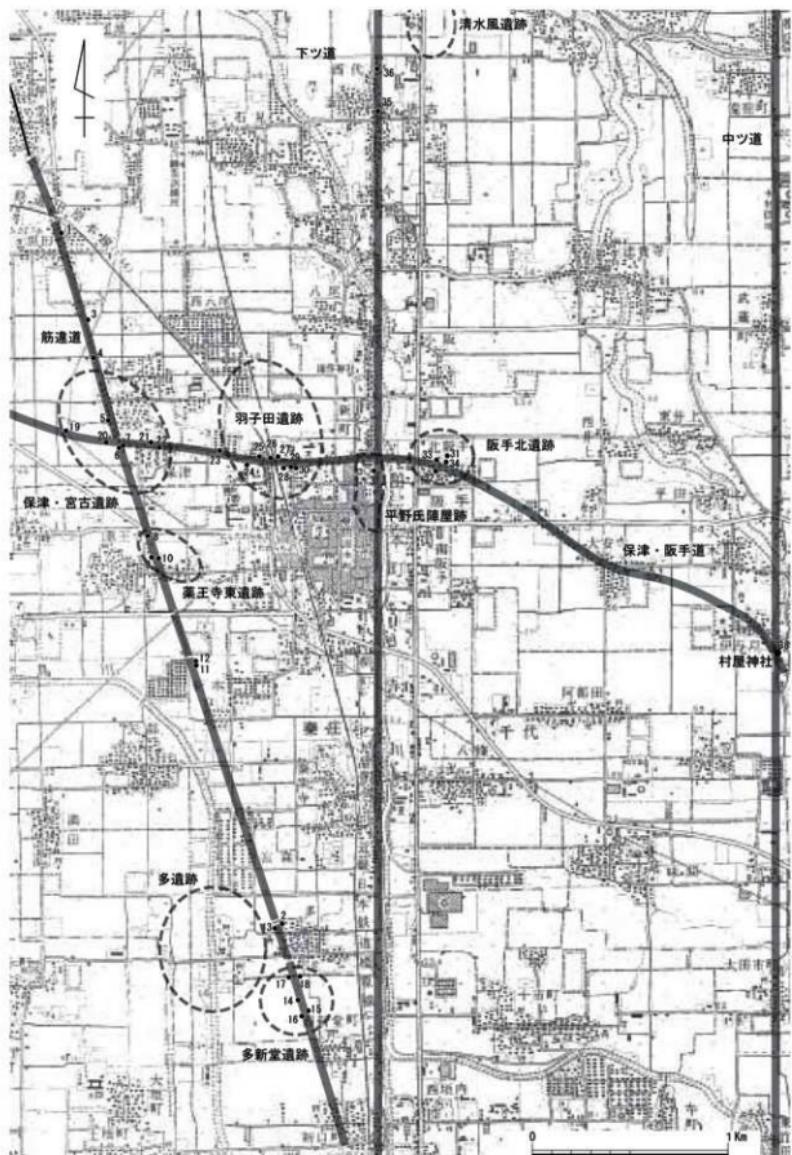
2. 奈良盆地交通網の研究史

奈良盆地の古道については、記紀や万葉集研究の関係から古くからの研究の蓄積があったが、1970年に岸俊男氏と秋山日出男氏が発表した論文は現在に至る研究の基礎となっている。岸俊男氏は、文献資料と歴史地理学の成果に基づき、古代の奈良盆地に計画的な直線道路が存在することを指摘した²⁾。また、秋山日出男氏も大和の条里制施行と上中下3道について考察し、さらに筋違道や現在「保津・阪手道」の名称が与えられた古道についても言及した³⁾。

80年代には、各地で発掘調査が増加し、歴史地理学で想定された古代道路交通網が考古学的手法で検証・確認されていった。このことが古代道路研究の進展を促し、学際的な研究も推し進められることになった。

90年代以降、歴史地理学的立場では中村太一氏が、考古学的立場では近江俊秀氏が古代道路についての研究を深化させた。中村氏は、奈良盆地の道路交通網を発展的解釈で考察した。雄略らの王宮が置かれた磐余地域に近い海石櫛市を中心とする非直線道路による交通網が形成された6世紀後半の段階（ただし当麻と海石櫛市をほぼ直線で結ぶ“プレ横大路”を含む）、筋違道など飛鳥を中心とする斜方位直線道路網が形成された7世紀初頭の段階、下ツ道や横大路など方位軸に則った正方位計画道路が設営された7世紀中頃の段階と大きく3つの段階を設定した⁴⁾。

一方、鶴神遺跡で古墳時代の道路遺構の調査を担当された近江氏は、過去の発掘調査で確認された成果に基づき、歴史地理学的手法で推測されている中村氏の発展的成立過程を検証している。文献に現れる記事と周辺の遺跡に与えた地割り上の影響などから、横大路と下ツ道の成立が6世紀後半に遡る可能性があるとする。また、斜方位直線道路を必ずしも古くは考えず、筋違道の成立時期が新しいという可能性も述べている⁵⁾。このほか、酒井龍一氏が筋違道の路線復元を積極的におこなうなど⁶⁾、奈良盆地の古代交通網の研究は個別具体的な路線とその維持された時期の検証に主眼



第1図 田原本町周辺の古道及び関連する遺跡 (S = 1 /25,000)

が置かれる段階となっている。

3. 田原本町内の古代道路遺構

田原本町内での古代道路関連の成果を紹介する⁷⁾。

(1) 筋違道の発掘調査（保津・宮古遺跡の調査成果を中心に）

筋違道は、聖德太子が斑鳩から飛鳥まで通ったという伝承にちなんで一般に「太子道」と呼び習わされている。十三世紀頃の文獻「古今目録抄」には「須知迦部路」とみえることから「筋違道」を正式な遺跡名称として使用している。なお、万葉集の中に「三宅道」の表現があり、これが筋違道を指す可能性もあるが、確証がない。

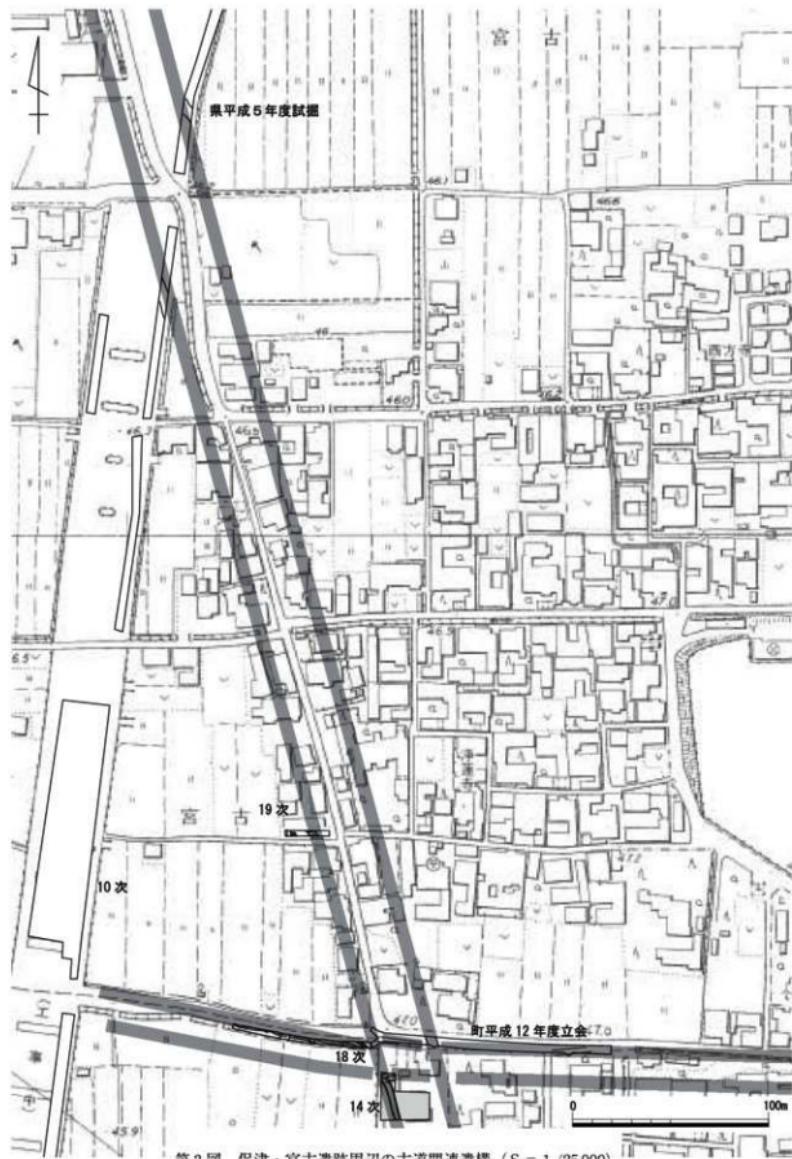
この筋違道については、田原本町教育委員会などが発掘調査により数ヶ所で側溝を確認している。保津・宮古遺跡周辺（第2図）、薬王寺東遺跡周辺（第3図）、多新堂遺跡周辺（第4図）で道路側溝とみられる遺構を確認しているが、いずれも小規模な調査であるために時期の特定につながる資料が得られたことは少ない。この中にあって、保津・宮古遺跡第14次調査では、筋違道の西側側溝跡を延長15mにわたって検出しており、この遺構の成立時期を考える上で重要な資料となることが考えられる（第5図）。

この調査では、小規模な方墳である保津岩田古墳、井戸SK-111などの古墳時代中・後期の遺構が検出されているが、これを切る形で筋違道側溝が掘削されている。保津岩田古墳からは5世紀代とみられる家形埴輪・盾形埴輪等が出土しているが、溝は深さ0.2m以下しか残らず、かなりの削平を受けていることがわかる。通常、埋没古墳では、溝中層あたりに埴輪が崩落して出土することが多く、浅い溝内に良好な状態で埴輪が残る本古墳の事例は、比較的早い段階で削平されたことを示している可能性がある。また、井戸SK-111は、筋違道側溝により西肩の半分が削平されており、井戸の埋没後に溝が掘削されたことは確実である。この井戸の遺物については時期の特定がやや難しいが、6世紀中頃にあたるものと考えたい。筋違道側溝となる溝SD-105は、幅3m、深さ0.4mを測る直線的な溝である。遺物は須恵器・土師器等が多数出土しているが、本来遺物がほとんど伴わない道路の側溝という性格上、時期の特定に直接つながるものであるかどうか評価が分かれることである。ただし、中・下層からは6世紀末頃の遺物が出土しており、この時期に掘削された溝である可能性がある。そして最上層には布目瓦片などがみられ、奈良時代頃の遺物を含んで埋没するとみられる。

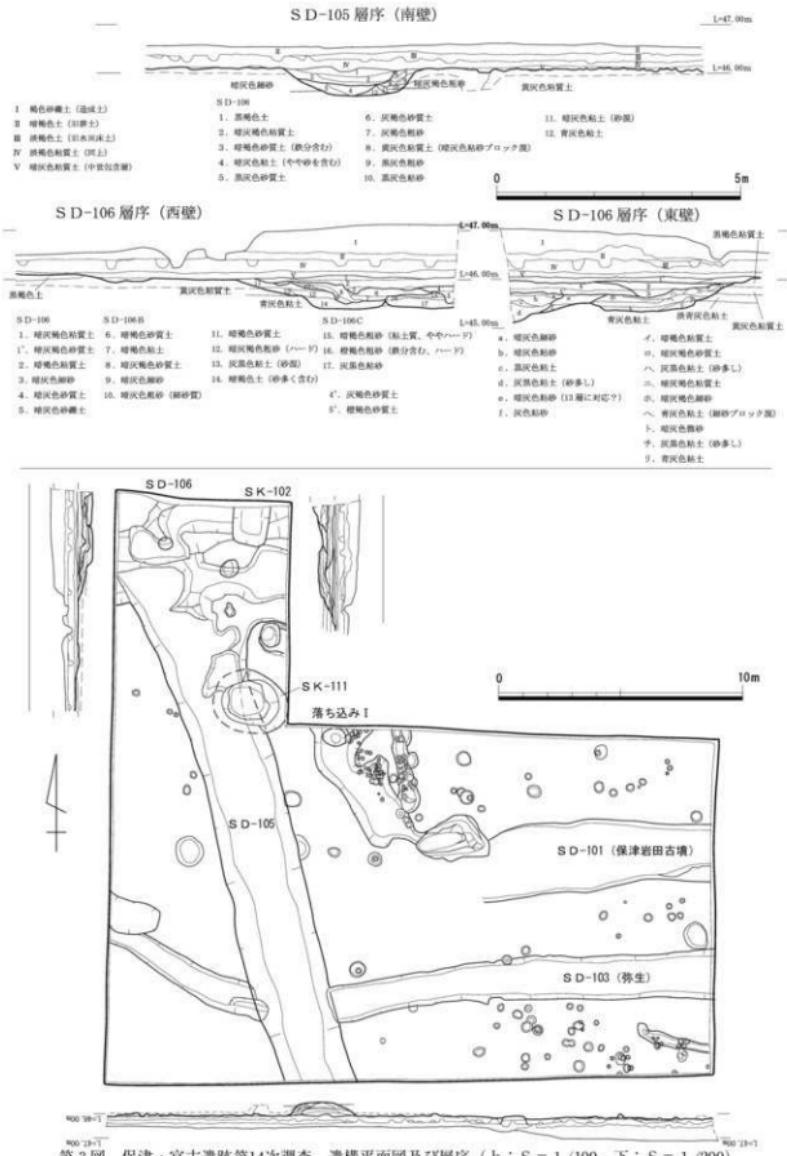
この筋違道西側側溝SD-105は、調査区の北端で東西方向の溝SD-106と合流する。SD-106は後述する「保津・阪手道」の側溝とみられる。SD-105とSD-106の関係は、一定期間共存したのち、先にSD-105が埋没し、合流点付近に壅みを残す程度となる。そして、奈良時代の間にSD-106も埋没するようである。これは、SD-106の埋没後に井戸SK-102が掘削されており、奈良時代後半頃の須恵器が出土していることから想定される状況である。

なお、SD-105の東側で検出した「落ち込みI」は、遺構底面に細かい凹凸が多数あり、道路面の補修に関わる遺構であった可能性も考えられる。この遺構の堆積土は粗砂質で鉄分により硬化していた。

このほか、筋違道の調査は田原本町南部の薬王寺東遺跡でも実施しており、古代の遺物を含む河



第2図 保津・宮古遺跡周辺の古道関連遺構 (S = 1 / 25,000)



第3図 保津・宮古遺跡第14次調査 遺構平面図及び層序(上: S = 1/100、下: S = 1/200)



第4図 薬王寺東遺跡の古道関連遺構 (S = 1/2500)

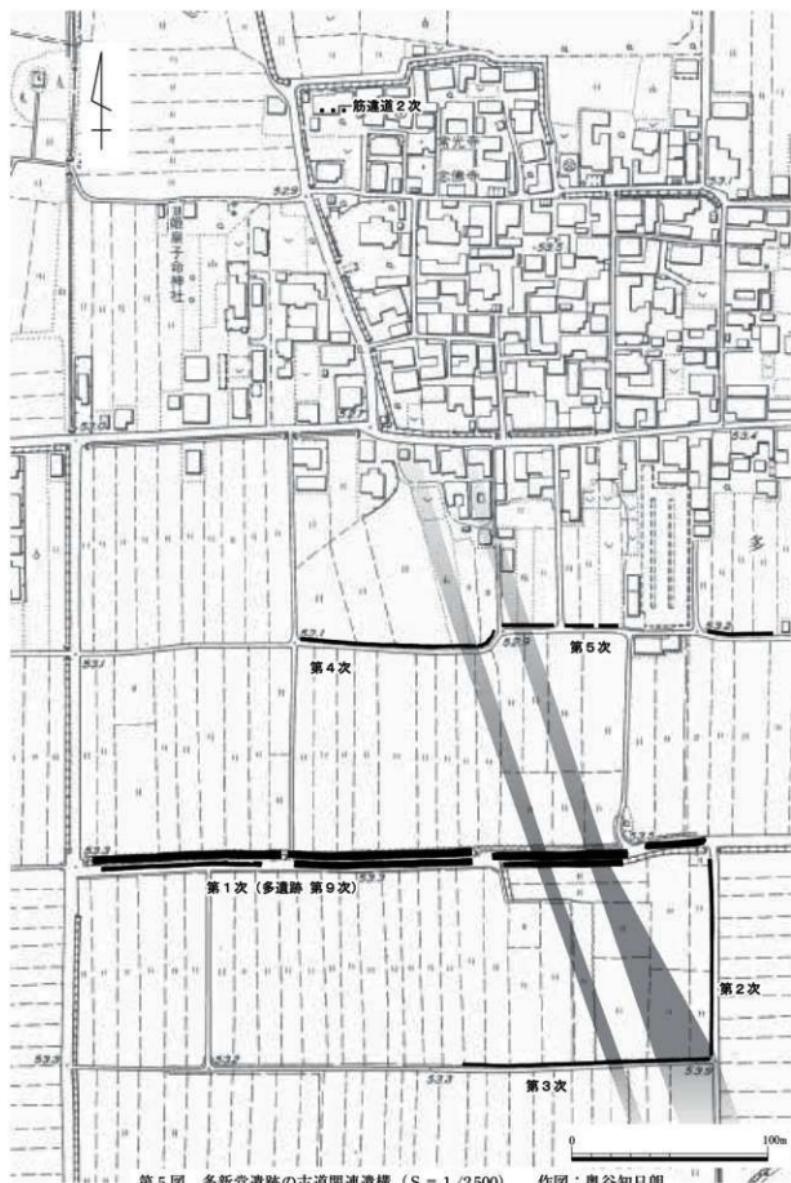
跡などを検出している。また、保津・宮古遺跡第19次調査・京奈和道試掘調査などでも側溝を検出しているが、いずれも遺物を含まない河跡のような遺構であった。延長距離の長い直線道路跡であり、早期に埋没した部分と比較的の長期間維持された部分とがあったようである。

さらに、近年の調査で多新堂遺跡での筋道の状況を確認することができた。東側側溝、西側側溝とともに、中世まで河川にちかい状態で維持されていたことが確認された（本書P.24参照）。

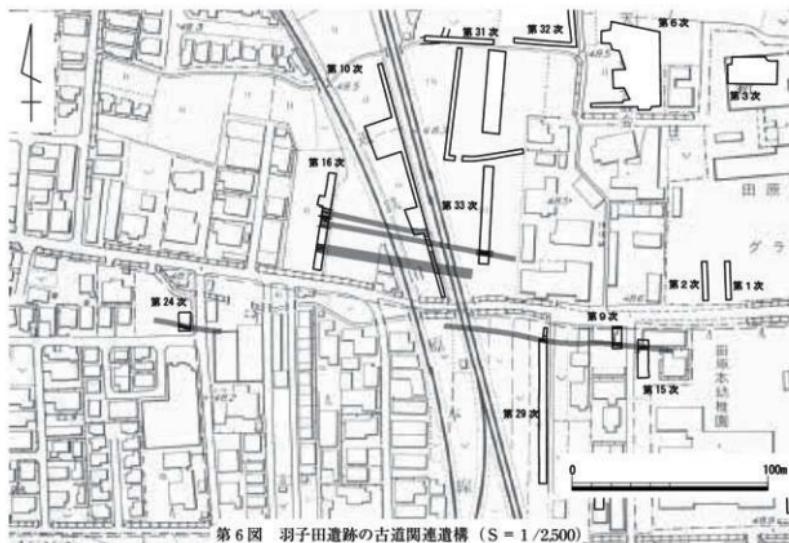
(2) 保津・阪手道の発掘調査

保津・宮古遺跡第14次調査の北側隣接地は大字宮古と大字保津の境界で、この地点以北で良好な形で痕跡を残す筋道は調査地以南で断絶し、大字薬王寺や大字多付近に痕跡が点在する程度となる。なお、大字宮古と大字保津の境界は、旧式下郡と十市郡との郡境でもある。この郡境が奈良時代の古道に規制されて定まった可能性があることが発掘調査により明らかになってきている。この古道については文献に記載がないため、田原本町教育委員会では「保津・阪手道」の仮称で表現してきた。西は田原本町大字富本から、東は中ツ道上に鎮座する村屋神社の位置までその痕跡を辿ることができる。村屋神社以東にも初瀬川沿いに上流まで遡るルートが続いている可能性がある。

保津・宮古遺跡第18次調査は、第14次調査の北側にある辻から西側へと延びる道路の建設に伴って調査がおこなわれた。この調査では、筋道と交わって西北西へと延びる溝を検出した。奈良時代の墨書き土器や人面墨画土器、円面鏡などもみつかっている。鏡の出土は文字を使う階層の存在を示唆する。磯城郡衙が存在した可能性も検討されている。また、人面墨画土器の出土は、当時の律



第5図 多新堂遺跡の古道関連遺構 (S = 1/2,500) 作図：奥谷知日朗



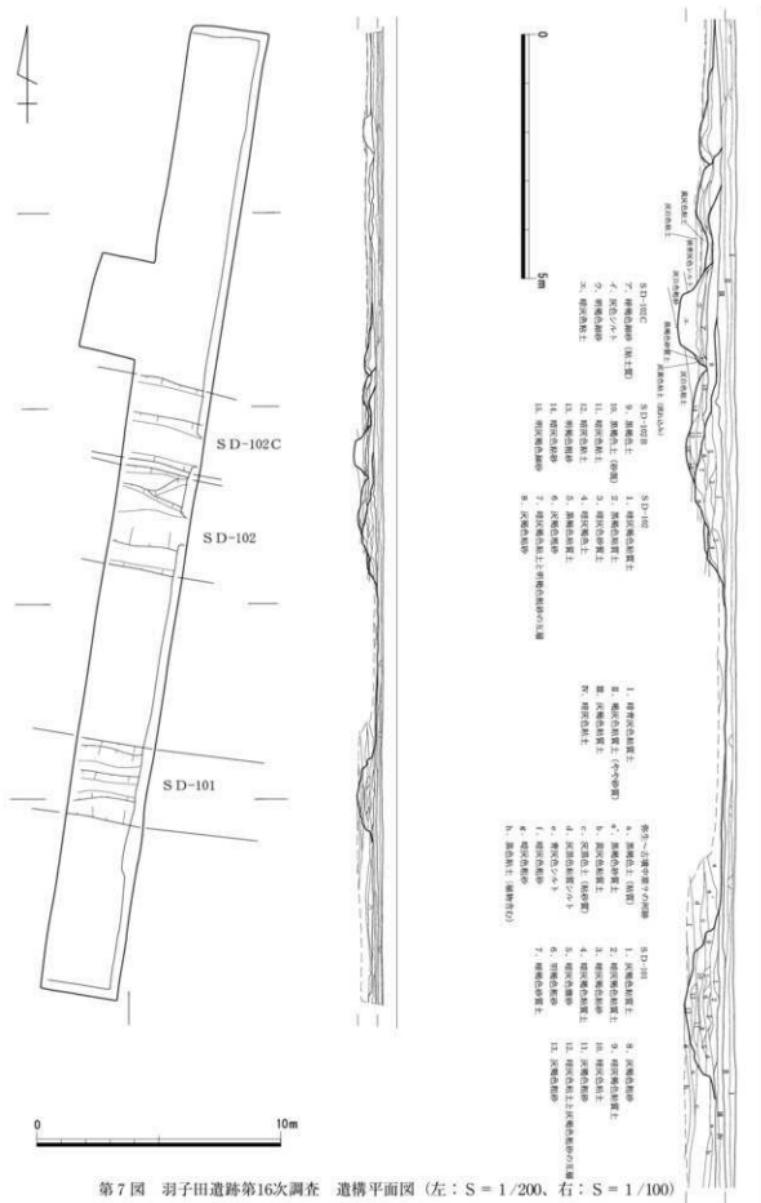
第6図 羽子田遺跡の古道関連遺構 (S = 1 / 2500)

令祭祀が当地で執りおこなわれていたことを示す。特にこの種の祭祀は道の交差点である衝でおこなわれる傾向があり、筋道と保津・阪手道との交差点であるという立地が影響しているとみられる。

保津・阪手道に関わる遺構は、東側の羽子田遺跡でも確認されている（第6図）。羽子田遺跡第16次調査では、奈良時代段階の保津・阪手道の南北側溝を検出した（第7図）。南側溝S D-101は幅3m、深さ1mを測る。粗砂で埋没する河川状の遺構であった。下層から奈良時代の壙1点がほぼ完形で出土した。なお、この河川状の堆積は古墳時代後期から流れるものであった可能性があり、隣接する調査区では前身遺構の下層から6世紀代の須恵器が出土している。

北側側溝とみられる溝は、出土遺物がみられないため時期不明であるが、新旧2条の溝を確認した。古段階とみられる溝S D-102Cは幅3m、深さ0.6mを測る。この段階の道路幅は推定19mである。新段階とみられる溝S D-102は幅3m、深さ0.4mを測る。この段階の道路幅は推定16mである。

羽子田遺跡では、保津・阪手道沿いで方向が一致する遺構を複数時期にわたり検出しているが、その位置と時期的関係は充分な整理ができるていない状態である。第24次調査で検出した6世紀後半の溝が最も古い段階の側溝となる可能性があるが、当時の羽子田遺跡は小規模方墳が多数築造されていたこともあり、小面積の発掘調査成果のみで道路遺構であるか否かを決定することは極めて難しい。また、第9・15・29次調査では古代頃とみられる東西方向の溝を検出している。第16次調査で検出した側溝との時期的関係は明らかでない。なお、第9・15次調査では中世～近世の溝も検出している。現代にも続く道路であることから、古代以降も側溝状の遺構が形成され続けたのである。



第7図 羽子田遺跡第16次調査 遺構平面図（左： $S = 1/200$ 、右： $S = 1/100$ ）

(3) 古道に関係する遺跡

田原本町内の遺跡では、古代の交通網に密接な関係をもつとみられる遺跡もみつかっている。ここでは、阪手北遺跡^①と清水風遺跡^②を紹介する。

阪手北遺跡第3次調査では、奈良時代の遺物と平安時代の墨書き土器・役人の使用する帶飾りである石製巡方が出土している。官衙的性格の施設が奈良～平安時代に存在した可能性がある。大字阪手の南東部には中世で断絶した「阿刀村」の伝承地があり、これが古代の迎賓施設「阿刀河辺館」の候補地と考えられている。阪手北遺跡はこの阿刀河辺館跡と直接関係する遺跡となるかどうかは明らかでないが、下ツ道と保津・阪手道が交叉する地点に接続しており、交通の要衝に置かれた何らかの施設があった可能性がある。

清水風遺跡第5次調査では、奈良時代の溝から製塙土器等が多数出土した。また、別の遺構からは当時の役人が着用する帶の飾りに使われる丸駒1点が出土している。清水風遺跡は、下ツ道と初瀬川の交わる場所に近く、その立地から河川交通に伴う「津」のような存在であった可能性が考えられる。なお、近世の物資輸送を担った川船は、清水風遺跡とも程近い天理市嘉幡まで運上していたという。

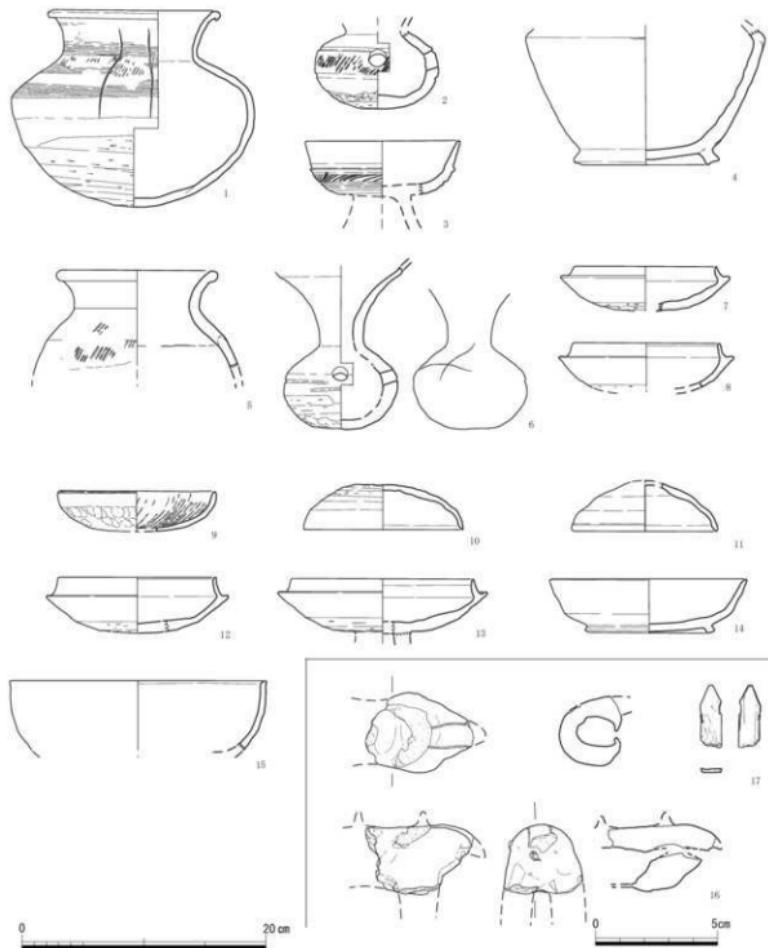
4. 田原本町域の古代道路関連遺構の位置づけ

以上みてきたように、古代の田原本町周辺は、都城域からは外れているものの、古代交通路が縱断・横断する交通の要衝であった。これら古代道路の成立時期については諸説あるものの、上記の調査成果に基づいて一定の見通しを考えたい。

筋造道は、後世にもそのまま道路として維持管理されたり、河川的な存在となって側溝の再掘削が繰り返されたりしたため、当初の掘削段階の時期とその規模を把握することが難しい。このようなかで、保津・宮古遺跡第14次調査での成果だけに限れば、西側側溝の掘削時期が6世紀末頃となる可能性が考えられる。保津・阪手道の南側が早く廃絶したことで、第14次調査地点では奈良時代には側溝が埋没し、当初の側溝の形状が良好な形で保存されたのだろう。なお、北側の第19次調査地点では西側側溝が自然河道状の堆積となっていた。また、多地区から薬王寺地区にかけては、筋造道の痕跡が点々と地形に残される。発掘調査で確認されたこの地区的筋造道側溝は中世頃にも開口して河川状の堆積となっていることが多い。農業用水路として溝が転用されていたのであろう。

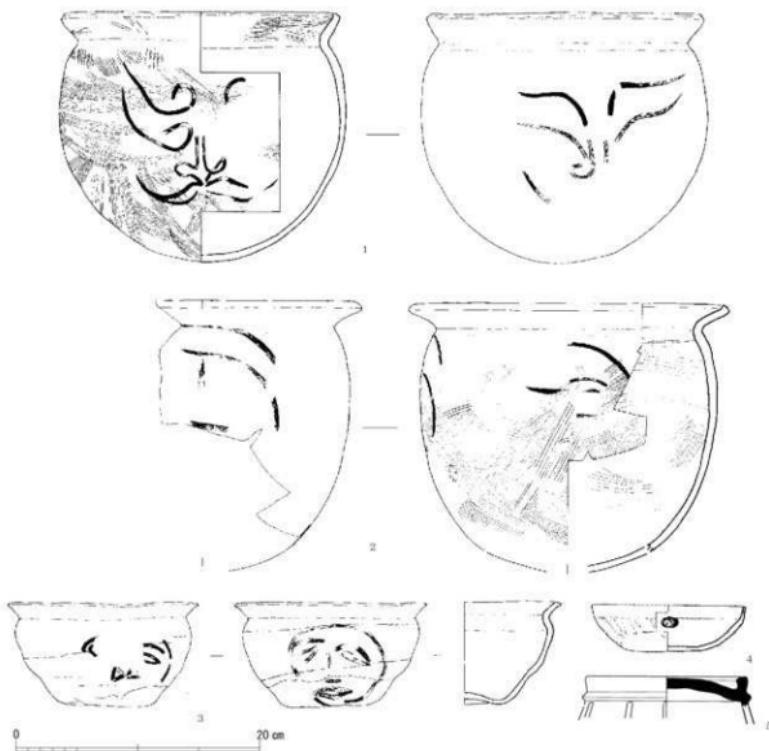
保津・阪手道は、中村太一氏のいう「隋使入京路」と想定される古道である。田原本町大字富本、大字阪手（阿刀河辺館想定地）、中ツ道との交差点である村屋神社を経て海石橋市まで続く。羽子田遺跡第16次調査・保津・宮古遺跡第18次調査ではいずれも奈良時代に機能していた側溝を検出している。一方、保津・宮古遺跡第14次調査では本道との交差点以南の筋造道側溝が奈良時代の段階で埋没する可能性があることを確認した。龍田付近から盆地南部へと抜けるルートとして筋造道から保津・阪手道を経て下ツ道へ接続する経路が重視され、奈良時代頃に改めて整備された可能性が考えられる。なお、羽子田遺跡第24次調査等で先行遺構の可能性がある側溝状の遺構が検出されていることから、中村氏の想定するような磐余地域を中心とする6世紀後半代の非直線道路が先行して置かれていた可能性も考えられる。

ところで、秋山氏の論文では保津・阪手道から6町南に並行して同一方向の地割りが残ることが



1~3 : SK-111出土遺物 1:須恵器盃。2:須恵器縹。3:須恵器縹。
 4 : SK-102出土須恵器縹
 5~8 : SD-105 (動産・西側側面) 出土遺物 5:第8層出土須恵器縹。6:第4層出土須恵器縹。7~8:第7~8層出土須恵器縹
 9~17 : SD-106 (保津・坂手道南側側面) 出土遺物 9:第6層出土須恵器縹。10:第6~9層/第7層出土須恵器縹。11:第7層出土須恵器縹
 12:第6層出土須恵器縹。13:第6層出土須恵器縹。14:第1層出土須恵器縹。15:第1層出土須恵器縹
 16:第6層出土須恵器縹。17:第4層出土須恵器縹
 18:第6層出土須恵器縹。19:第5層出土土器。20:第4層出土土器

第8図 保津・宮古遺跡第14次調査 出土遺物 (1~15: S = 1/4、16~17: S = 1/2)



第9図 保津・宮古遺跡第18次調査 出土遺物 (S = 1 / 4)



第10図 羽子田遺跡第16次調査 出土遺物 (S = 1 / 4)

指摘されている。大字薬王寺から大字十六面・西竹田にかけて残るこの地割りは、受け堤の存在などから旧河道の影響と考えられているが、十六面・薬王寺遺跡などで確認された古代の水田畦畔はこの地割りの影響を受けているようでもある。秋山氏のいうように条里制施行以前の一段階にこのような斜行地割りによる屯倉運営があった可能性も考慮する必要があるだろう。

中ツ道・下ツ道に伴う遺構は本町域では検出していない。可能性のある遺構としては平野氏陣屋跡第3次調査で検出した平安時代の南北溝及び寺川旧河川域に伴う河道路である。これらの遺構は、下ツ道と重複する位置に寺川が固定された時期を探る上で重要である。下ツ道は奈良盆地の条里施行の基軸線となった道で、秋山氏は齐明朝の運河掘削の一環として寺川が下ツ道沿いの直線水路として整備された可能性を指摘しているものの、この大工事がいつおこなわれたのかは現在に至るまで解明されていない。上中下3道と水運については清水風遺跡でもその関係の深さが窺えるが、今後の調査の積み重ねでこれら残された問題を解明していく必要があるだろう。

註

- 1) 田原本町教育委員会2010『道の考古学』唐古・鍵考古学ミュージアム展示図録Vol.11
- 2) 岸 俊男1970「大和の古道」「日本古文化論叢」櫻原考古学研究所編 吉川弘文館
- 3) 秋山日出雄1970「条里制地割りの施行起源－大和南部条里の復原を手掛りとして－」「日本古文化論叢」櫻原考古学研究所編 吉川弘文館
- 4) a. 中村太一1996『日本古代国家と計画道路』吉川弘文館
b. 中村太一2000『日本の古代道路を探す 律令国家のアウトバーン』平凡社新書
- 5) a. 近江俊秀2006『古代国家と道路』青木書店
b. 近江俊秀2010「[「大道」考－大和と河内を結ぶ直線古道の成立と展開について－]」「古代文化」第62巻 第2号
- 6) 酒井龍一2008「蘇我馬子の都市計画」「文化財學報」第二十六集 奈良大学文学部文化財学科
- 7) 田原本町教育委員会による古道関連の調査については下記報告がある。
 - a. 田原本町教育委員会1996「保津・宮古遺跡第14次調査」「田原本町埋蔵文化財調査年報5」
 - b. 田原本町教育委員会1997「保津・宮古遺跡第18次調査」「田原本町埋蔵文化財調査年報6」
 - c. 田原本町教育委員会1999「羽子田遺跡第16次調査」「田原本町埋蔵文化財調査年報8」
 - d. 田原本町教育委員会2001「保津・宮古遺跡の立会」「田原本町埋蔵文化財調査年報10」
 - e. 田原本町教育委員会2006「太子道の巷を掘る」唐古・鍵考古学ミュージアム展示図録 Vol.3
- 8) 田原本町教育委員会2002「阪手北遺跡第3次調査」「田原本町埋蔵文化財調査年報11」
- 9) a. 田原本町教育委員会2008「清水風遺跡第5次調査」「田原本町文化財調査年報16」
b. 清水琢哉2008「清水風遺跡出土の製塙土器」「田原本町文化財調査年報16」田原本町教育委員会

第1表 田原本町内で検出した古道関連遺構

※道路想定地隣接地で道路遺構の存在しなかった地点の情報も含む

路道遺

	遺跡名	調査次数	調査年度	所在地	調査面積	検出した 道路関連遺構	遺構の時期	備 考
1	新造道	第1次調査	11.16年春	田原本町黒川277-6	33 af	東側開削?	古代?	幅6.5m以上、深さ0.6mの谷沢遺構を検出。時期不明
2	新造道	第2次調査	11.21年春	田原本町多 ^モ 86-1	9 af			中世の往來等あり。道路関連遺構なし。
3	保津・宮古遺跡	第7次調査	11.11.4	田原本町宮古540-2地	61 af	東側開削?	不明	幅7.m、深さ0.8mの状況の遺構あり。側溝の可変性を含む
4	保津・宮古遺跡	調査	11.11.5	田原本町宮古地内	1,300 m ²	東・西側開?	不明	高岡地区の幅10mほどの河原地。来往跡。夷山岸壁の木トレンジ検出。他の西側開?となる可能性あり。
5	保津・宮古遺跡	第19次調査	11.9年度	田原本町宮古131-1地	66 af	西側開削?	不明	遺物なし。鍍金時代より古い。
6	保津・宮古遺跡	第14次調査	11.7年度	田原本町保津166-4	423 af	西側開削	6世紀末 ~7世紀	西側開あり。道路面の複数遺構あり。
7	保津・宮古遺跡	調査	11.17年春	田原本町保津147-1北側木橋	* * *	東側開削?	不明	この結果により、路線面の幅22mと推定される
8	新造道	調査	11.13年春	田原本町黒川11地	* * *	西側開削?	不明	自貢時代から?
9	十六塚・葉子守遺跡	第7次調査	11.3年度	田原本町黒川62	239 af	東側開削?	平安時代	幅2.m、深さ0.4mの段と幅1.5m、深さ0.6mの段が2条併走
10	葉子守気賀遺跡	第2次調査	11.11年春	田原本町黒川今1地	139 af	東側開削?	平安時代	西側開。遺物なし
11	葉子守今南島遺跡	調査	11.18年春	田原本町黒川今184-1地	* * *	東側開削を含む	古代?	下本堂波瀬遺跡の北側で路道と方向の一致する幅1.5mの跡を検出。土壁等小出し土台。古代から?
12	葉子守今南島遺跡	調査	11.17年春	田原本町黒川今184-6~8	4 af	河跡?	古代?	上記立会で検出した河跡を確認。遺物なし。
13	多造跡	第23次調査	11.22年春	田原本町多 ^モ 45	5 af			遺跡に近づいて操作の手印と模様
14	多造跡	第9次調査	9.5.10	田原本町多 ^モ 内	11,100 m ²	東・西側開?	奈良時代	河跡。平安紀に発見か、埋蔵した土器が多い。
15	多造堂遺跡	第2次調査	11.9年度	田原本町多 ^モ 94	120 af	東側開削?	中世	河跡状
16	多造堂遺跡	第3次調査	11.21年春	田原本町多 ^モ 1 他南側道路	191 af	東・西側開	中世	河跡状。西側開による位置の変動を確認
17	多造堂遺跡	第4次調査	11.21年春	田原本町多 ^モ 297 他南側道路	118 af	東側開削	不明	
18	多造堂遺跡	第5次調査	11.22年春	田原本町多 ^モ 300 南側道路	114 af	東側開削?	不明	幅12mの河川跡堆積

保津・坂下道

	遺跡名	調査次数	調査年度	所在地	調査面積	検出した 道路関連遺構	遺構の時期	備 考
1	保津・宮古遺跡	第39次調査	11.23年度	田原本町宮古6-1	109 af			北側隣接地で小面積の調査区段。既述調査遺構はみられず
2	保津・宮古遺跡	第14次調査	11.7年度	田原本町保津166-1	423 af	東側開削?	飛鳥~奈良	既述遺構と交差する東西方向の成跡
3	保津・宮古遺跡	第19次調査	11.8年度	田原本町保津166 北側隣接地	176 af	東側開削?	奈良時代	溝内より人面彫刻片・圓筒形漆器出土。他の祭祀か
4	保津・宮古遺跡	第30次調査	11.16年度	田原本町宮古47-3	96 af			保津・坂下道北側隣接地での調査。平安並塁小溝跡のみ検出
5	保津・坂下道遺跡	第1次調査	11.16年度	田原本町保津137地	11 af	東側開削?	奈良時代	保津川落の遺産か?
6	保津・坂下道遺跡	第21次調査	11.16年度	田原本町保津189-5	21 af	東側開削?	不明	幅6.m以上の東西方向の河跡を検出
7	斜子田遺跡	第24次調査	11.13年度	田原本町保津10-12	37 af	東側開削?	6世紀	保津・坂手道の河身?左岸土は中央標地の異なる渠
8	斜子田遺跡	第16次調査	11.10年度	田原本町新町210-1	212 af	東・南側開	奈良時代	南側=河跡状
9	斜子田遺跡	第10次調査	11.9年度	田原本町新町212-3地	620 af	東・南側開	時期不明	河跡状
10	斜子田遺跡	第33次調査	11.13年度	田原本町新町217-1	209 af	東側開削?	古代?	溝の横幅が第10~16次調査検出のものと比較して小規模で2箇所に分かれ。
11	斜子田遺跡	第29次調査	11.17年度	田原本町新町206-1	365 af	東側開削?	飛鳥時代頃	飛鳥時代頃の第1・2河跡
12	斜子田遺跡	第9次調査	11.9年度	田原本町新町202-1地	35 af	東側開削?	中世~近世	近世後澤・坂手道の側溝?
13	斜子田遺跡	第15次調査	11.10年度	田原本町新町309-2	107 af	東側開削?	中世~近世	近世後澤・坂手道の側溝?
14	坂手北遺跡	第3次調査	11.13年度	田原本町新町180-1地	147 af			古代の落ち込み横断。壁面上部等多数の遺物が出土
15	坂手北遺跡	第4次調査	11.16年度	田原本町新町301-2	12 af			中世並塁内の横断。石穴・溝など検出
16	坂手北遺跡	第5次調査	11.17年度	田原本町新町180-2地	12 af			中世並塁小溝跡検出。中世以降口耕地
17	坂手北遺跡	第6次調査	11.19年度	田原本町新町190-4	11 af			中世並塁小溝跡検出。中世以降口耕地

下少道

	遺跡名	調査次数	調査年度	所在地	調査面積	検出した 道路関連遺構	遺構の時期	備 考
25	下少道	第2次調査	11.17年春	田原本町西内223-1	3 af		不明	羽忍魔屋のシルト埋蔵
26	下少道	第3次調査	11.20年春	田原本町西内442-1	3 af		平明	羽忍魔屋のシルト埋蔵
27	平野丸跡尾端	第3次調査	11.4年春	田原本町400-1	622 af	東側開削?	平安時代	羽野川の西側か?

中少道

	遺跡名	調査次数	調査年度	所在地	調査面積	検出した 道路関連遺構	遺構の時期	備 考
28	中少道	第1次調査	11.11年春	田原本町轟305地	11 af			道路関連遺構なし

田原本町文化財調査年報20

2010年度

平成24年2月1日

編集発行 田原本町教育委員会
印 刷 株式会社 明新社

